

飽海郡誌 卷十

160  
10  
130

160-130



\*1200901383960\*

Kodak Gray Scale



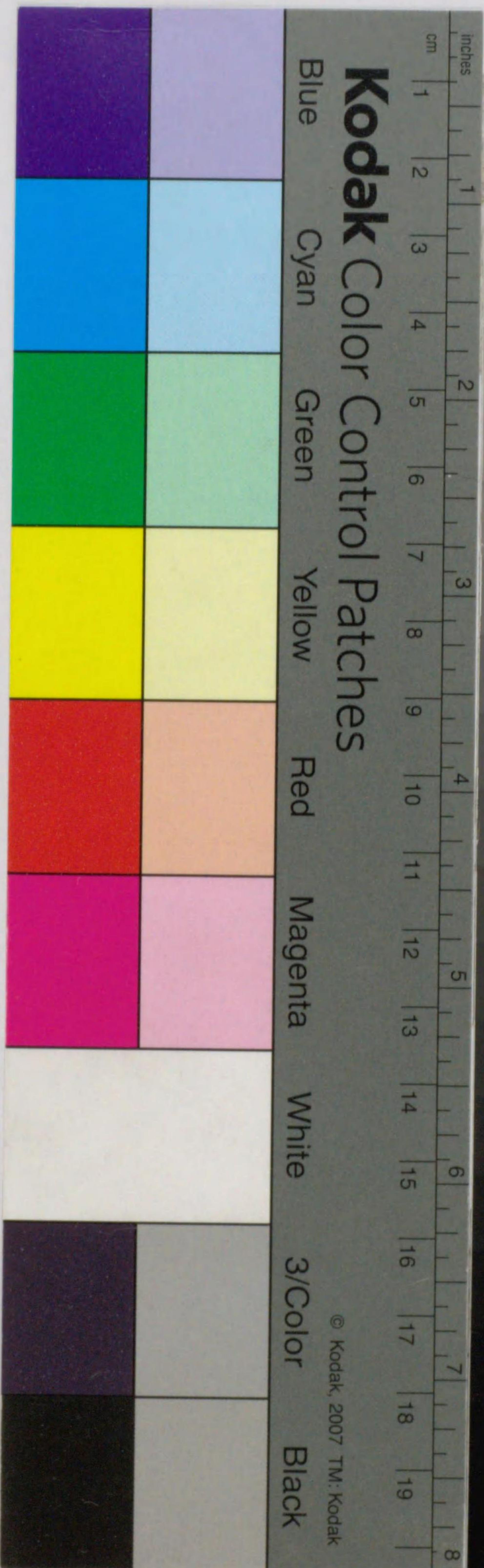
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





飽海郡誌卷之十

〇 卯寄贈本

目次

第八編 村里

第六章

高瀬村

北目 北目楯 北目新田 丸子 鷺野町

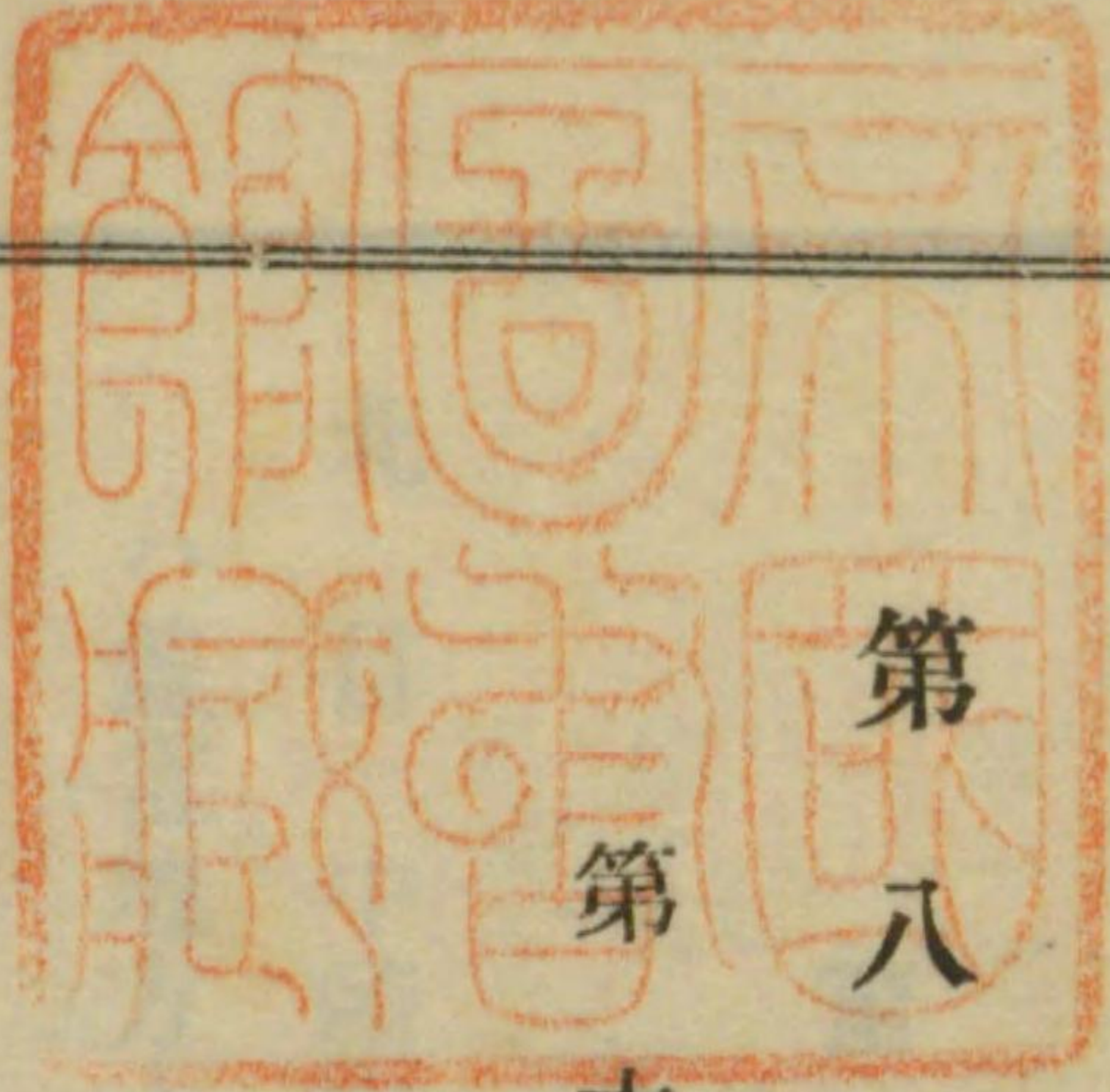
下當新田 劔龍神社 劔積寺 常恩寺 山崎

川 佐藤藤佐 佐藤政養 中山新田 樽川新田

管野 菅野城 小里城 高之田 藤泉 藤崎 木良

西遊 佐村 藤崎 佐藤氏

青塚 服部興屋 十里塚 藤崎 佐藤氏





吹浦 村  
 吹浦 大物忌神社吹浦口之宮 吹浦館 番所址  
 唐船場 鷹侍小屋址 湯之田鑛泉 落伏 永泉寺  
 箕輪新田 箕輪楯 鳥崎 瀧之浦 女鹿 番所  
 址  
 飛 島 村  
 勝浦 勝浦澗 遠賀美神社 月座神社 圓福寺  
 浦大宮神社 法木 八幡神社 多寶寺

# 飽海郡誌 卷之十

## 第八編 村里

### 第六章

高瀬村 北目北目同新田丸子富岡南目鷺野町當山下當直世田川樽川新田菅野菅里管内ヲ管ス

北目 中崎宮の下ノ小字アリ古へ此方面ヲ飽海原ハラト稱ス和名抄ニ謂ユル飽海郷ハ蓋當地方ナリ北目ノ名稱ハ承久二年ノ文書ニ見ユ由來既ニ久シ

(羽黒山在廳年代記)人王三十代欽明天皇五年甲子之年間元大泉庄司殿御入國翌年北目飽海ヶ原迄田畑開カセ給フ……………庄内ニ三權現始ル本宮大權現同七年丙寅飽海ヶ嶽ニ出ツ現今鳥海山大權現……………

○黒圈ヲ加ヘシ文字ハ固ヨリ信スルニ足ラスト雖トモ北目吹浦一帯ノ方面チ古へ飽海ヶ原ト稱セシ證左トナスヘシ土人ノ口碑ニ太古ハ本郡ノ大部分ハ人海ナリシナ何時シカ陸地トナレルモノナリト所謂入海ハ由利郡ノ傳誦ニ阿古海ト云ヘルモノニシテ飽海ヶ原ハ阿古海ヶ原ノ假字ナリト云フサレバ鳥海山ノ舊名ヲ飽海ヶ嶽ト稱シ大物忌神社ノ別名ヲ飽海神社ト稱スルモ亦飽海ヶ原ヨリ取レルモノナルヘシ



慶長十六年ノ檢地ニ高十四石七斗三升余ニ打出サレ

(慶長十六年北目村御檢地帳菅原吉之助所藏)

本田八千五百四十五束蒞

此米七十七石七斗六升

出田三千百貳束蒞

此米二十四石六斗九合

苗代六百八十五束蒞

此米六石八斗五升

興田八十六束蒞慶十六興三年休

此米七斗八升五合

興田出貳拾五束蒞

此米貳斗

合壹百貳千四百三拾貳束九把高方蒞

此出米七斗此内八斗九升四合見合

本島米貳石七升七合

山手米壹石三斗

合百十四石七斗三升九合

居屋敷廿五間

但家廿五

漆ノ木廿六本

此米壹石八斗九升

一門松

一せり

一炭

三籠

慶長十六年八月晦日

但馬守印

肝煎主計

後チ檢出新墾アリテ明曆二年ノ現高四百八拾壹石四斗七合、畑村五十三石七斗五升貳合、與頭興目貳斗六升三合三勺同年檢後チ本高四百九十五石八斗九升免四分七厘畑村五十四石四斗壹升免三ツ八組頭興六斗六升免貳ツ七分山新田貳拾壹石五斗五升壹合七勺免三ツ八トナレリ

因ニ云フ往時當村ヨリ下塔下野澤ニ係ル地方境界ノ爭論アリテ遠ク武藤家時代ニ起リ爾後動靜アリシモ延イテ維新後ニ亘レリ訴訟ノ成敗ハ暫ク措キ武藤家ノ文書ハ之レニ依リテ今ニ傳ハリ地方歴史ヲ研究スルニ頗ル有益ノ資料トナレリ左ニ之ヲ掲ク

(北目文書)

今度下塔北目之山ニ押合ニ付而双方爲及古人之諍論糺正理憲法之筋北目山ニ差定候處不可有疑者也仍如件

天正十二年霜月十八日

義興



北目長中

去々年巳隆野澤北目之河之押合ニ付治定北目河ニ可有之旨雖聞成東禪寺筑前守事



袴當座、權威野澤者共引勝依事於左右申懸候間不及是非就中彼一亂北目之者一事ニ相守大浦之間旁以北目河ニ令差定候上自今以後不可有疑者也

天正十四年三月十五日

義興花押

北目長中

(北目菅原家文書)

如仰已前者懸御目□本望候仍北目之者共之事今度御かせきゆへ大切之公事共相調候事我々儀も自貴所之御使□申候條令満足候□□□上意御判形之事□□望之由申上候哉其ハ前代より閑様之儀ニ付者御判を被下候事ハ無之候間被下間敷候無左候共今般落居之所者向後共御失念被成間布由たつと○苗字ナルヘ大膳などニたゐし被仰出候上ハ此上有まじき由□□□□爲仰聞□尤候委以面可申候 恐々謹言

(天正十三年)

極月一七日

志

土甲斐入道

茂

修理進殿

御報人々御中人

かへま／＼まもどふ下野澤と山の公事北目之もの共申かち候事義興様ニおゐて御志つねん有まじき由被仰出候間□□ハ御もん形之事くとく申上候儀はいかゝと存候こと／＼御さいそく被下□□

北目山ハ下塔下野澤トノ間ニアリ境界ヲ爭論シ之レヲ武藤家ニ訴ヘ天正十二年十一月北目ノ勝利トナリ之レカ判物ヲ下サレ其後チ北目川ノ押合ニ下野澤ヨリ東禪寺筑前ニ請托スル所アリ東禪寺自己ノ權威ヲ以テ下野澤ノ利運ト判決セラレシニ依リ北目ヨリ之レヲ武藤家ニ訴ヘ天正十四年三月ニ至リ義興北目ノ村民ガ莊内擾亂ノ際尾浦ニ忠勤セシ舊功ヲ嘉ミシ更ニ此判物ヲ下サレタルナリ此等ノ文書ハ單ニ訴訟ノ裁許ニ止マリ別ニ意味ナキニ似タリト雖トモ子細ニ文義ヲ玩味スルニ當時義興ト東禪寺トノ關係何如ヲ窺フニ足ルヘキモノナリ東禪寺前森ハ武藤氏ノ重臣トシテ國政ヲ掌握セシガ窃ニ欺ヲ最上義光ニ通シ天正十年其主義氏ヲ弑シ養子千勝ヲ追ヒ上杉氏ト絶チ義興ヲ擁立シ最上ノ聲援ヲ頼ミ舊ニ仍リ威權ヲ擅マニセシヲ以テ義興ノ意ヲ失ヒ君臣ノ間自ラ調和ヲ欠キ隨テ城中平穩ナラサリシハ其文中ニ「東禪寺筑前守事誇當座權威ニ云々」マタ來迎寺年代



記二「義興國主二年次二」○天正十四年ニ當ル 範州ト功輪○筑州ト口論ノ假字ナリ 兵亂起國中亂トアル  
 ニテ自ラ明カナリ 尙義興東禪寺矛盾ノ事ハ總説ニ詳カナリ宜シク參照スヘシ而  
 シテ爾後訴訟ノ動靜聞ユルナキモ天和三年再ヒ端緒ヲ啓キ元祿五年ノ爭論トナ  
 レリ

(北目菅原氏文書)

乍恐書付を以御訴訟申上候事

一北目村山古來より上ハ大河代道より西下ハさかいけ道より東ニ御座候處ニ其間  
 ニ取上野ト申處御座候彼野ヘ拾年以前亥○天和三年之閏五月廿一日ニ草苅候を下野澤  
 村之者共大勢參候而鎌取申候則大肝煎衆ヘ右之段迷惑之由申上候ヘハ下野澤之  
 者共被召寄御聞被成候ヘバ元來右之野共ニ下野澤村之地方ニ而北目村山ト申事  
 少茂無之由申候其後大肝煎御代官所御郡奉行所ヘも度々申上候ヘ共何かト相延  
 申候四年目之寅之秋より大不作仕御年貢上納仕候義不罷成不納過分ニ御座候ニ  
 付相止罷有申候去秋不納も皆濟申上候ニ付如此申上候事  
 一北目村より山御年貢六表壹斗四升八合上納仕候山子も南目村鷺野町村ニケ村御  
 座候此御年貢下野澤村之者共くば川原野御年貢ト申候此野之儀ハ村近所御林野

火際野少御座候最上様御代ニハ野谷地御年貢上納申候事少も無御座候山御年貢  
 之義ハ壹石三斗宛上納仕候御當代ニ罷成増御年貢共ニ六表壹斗四升八合上納仕  
 候事

一北目村ニ山御座候而御年貢上納仕候證據古來より炭釜立申候而炭焼出し申事か  
 くれ無御座候最上様御代ニも御役炭上納仕候則最上様御役人進藤但馬殿御出し  
 被遊候御水帳ニ御書ノせ被遊候此外ニも御役炭八表宛上納仕候御證文御座候八  
 年以前丑之年炭釜御年貢相應ニ上納仕候而炭焼申度旨願之御訴訟申上候處ニか  
 ま壹たうニ付米三斗宛御年貢上納仕候様ニ被仰付候此御年貢山親村より一紙  
 ニ立申様ニ被仰付候則北目村御皆濟一紙ニ立可申と候處ニ北目村山之儀ハ下  
 野澤村ト押相ニ付無用ト被仰付下當山村子ニ候間先下當村ヘ一紙ニ立テ可申由  
 被仰付右之下當村ヘ一紙立申候下當村山子ニ罷成候子細ハ北目村山ニ而ハ雪足  
 木剪申候ニも又ハ草苅申ニも勝手惡敷御座候ニ付山子ニ罷成申候古來より北目  
 村山ニ而御座候而御年貢上納仕其上御役炭上納仕候證文數多御座候上ハ土目錄  
 ニ北目村ニ御書ノせ被下置候ハ難有可奉存候事

一義興様御代下當村ト右之山押相公事仕候刻北目山ニ治定有之候段御判形御座候  
 北目村山之義ハ下當村下野澤村兩村山之中ニ御座候ニ付兩方より奪取申度ト如  
 斯申候事



一義興様御代下野澤村と北目村と川之押合公事仕候刻北目村川ニ治定有之候段御判形御座候北目村山筋より流候川ニ而段々居村にて續申候ニ付御判形被下置候事

一取上ケ野と申處ニ大分成石塚御座候是ハ古來ニ亂國之時分取上ケ申候石塚之由申傳候又ハ鳥海參之者取上ケ申石塚共申傳候彼塚之儀も下野澤村之者共さかい塚之様ニ申候過分相違ニ御座候事  
一當年より邊濱通之者共米九表出し候西郷中村々山へ入申筈ニ御座候處ニ右之九表之米村々山御年貢之内引申筈ニ罷成候處ニ北目村山々之儀ハ少も引不申候ニ付彌々以迷惑至極ニ奉存候事  
元祿五年申ノ五月

遊佐郷北目村長百姓

與 助 八右衛門 市十郎

掃 土部

小百姓

彌左衛門 喜右衛門 藤左衛門

五右衛門 惣右衛門 新左衛門

又左衛門 左次右衛門 與兵衛

長右衛門 中郎左衛門 善 助

八右衛門

肝煎長大夫

御郡奉行所

御代官所

右ニ對シ下野澤村ノ答辯書アリシナランモ未タ之レヲ見ルニ及ハス  
北目楯 字北目ニアリ土居堀ノ形跡微ニ存シ楯之内ト字ス舊大組頭菅原氏世々コ

、ニ住ス同家ハ新留守ノ未葉ト稱シ承久二年鎌倉幕府政所ノ吹浦兩宮修造ニ係ル執達狀ハ其相傳ノ文書ナルヲ彼社ニ寄附セルモノナリ

戰國ノ比武藤氏ノ幕下ニ屬シ天正十三年義興東禪寺ト矛盾ノ際義興ニ與力セシコト上掲境界爭論ノ判物ニ徴シテ明カナリ爾後ノ消息詳カナラズ最上時代ニ主

計ナルモノ當村ノ肝煎タリ 應長十七年北目村檢地帳 子孫相承ケ後チ北目組大組頭ニ命セラレ

維新後ニ及ヘリ

因ニ云フ往時吹浦大物忌月山神社ノ六月十四日御濱出神事ニ北目郷ヨリ十二人



ノ在廳衆コレニ勤仕セラレシコト同社ノ舊記ニ見エ慶長十七年北目村檢地帳ヲ  
閱スルニ田畝ニ「ふたへ」○舞臺「さんかう免」三綱免「けはいでん」ハ化粧「けわい免」ハ化粧

ナ「神田」ノ字アリ又出羽風土略記ニ「菅原氏ハ新留守ノ子孫ニシテ正月八日迄物  
忌ノ故實アリ」ト見ユ所謂在廳衆ハ即チ國衙ノ在廳官人ノ名殘ニシテ留守所ニ

屬スルモノナレバ無論當家ニ關係ヲ有スルモノナランモ事歴詳カナラズ

北目新田 寛永十一年大肝煎菅原次右衛門石川作右衛門ノ開發セシメシ所ナリ

楸島下野澤ノ  
下ニ詳カナリ 明曆二年ノ現高拾石壹斗貳升タリシヲ同年檢後チ十三石七斗九升四合

免四ツトナル  
壹分 丸 子 明曆二年ノ現高四百卅壹石四斗三升五合同年檢後チ四百四十七石三斗三勺

免五ツ五  
分七厘 タリ 南 目 明曆二年ノ現高貳百七十壹石九斗六升七合同年檢後チ二百七十貳石五斗六

升貳合七勺免四ツ四タリ 鷺野町 明曆二年ノ現高百四十壹石五斗壹升五合同年檢後チ二百七十

五石四斗五升八合八勺貞享村トナル後チ異同ナシ但内高百四十壹石九斗八升六合

壹勺免四ツ九ハ本高ニシテ二十三石四斗七升貳合七勺免三ツ七ハ京田新田高ナリ

下 當 劍積寺三ツ新田ノ小字アリ古ヘ下塔シメタウニ作ル劍龍山ニ關係ヲ有スルモノナ

ルヘキモ由緒詳カナラズ明曆二年ノ現高四百拾七石壹斗壹升六合同年檢後チ四百

廿石壹斗五升七合三勺免五ツ四タリ

下當新田 寛永七年ノ開發ニシテ承應三年ノ現高四十九石余明曆二年ニ至リ五十

二石貳斗貳升七合同年檢タリシヲ後チ百七石九斗六升五合壹勺免四ツ壹タリ但今民

居ナシ

(酒井家御土藏記録寫) 承應三年午二月十四日 下當村百姓四名發田ニ付目安北目  
村主計返答書

乍恐以書付御訴訟申上候事

一下當村百姓衆ハ山本ニ而御座候ヘバ田畑□無御座候ま、杉山七郎兵衛様御知行  
之時分七郎兵衛様へ申上候ヘバ田そヘニあれ地御座候者ひらき申様ニと被仰付  
候間百姓數十七人ニて高十三石七斗五升之所ひらき申候ヘバ北目村の組頭主計







上ヶさせ候間。下當村之内高少持申者壹人ニあつけ百姓數四人ニ仕我等ニ肝煎致候へと被仰付候間則九兵衛ニもたせ當年まで十三年肝煎仕候

一 下當村之谷地ひらき申由偽ニ御座候山崎村之谷地貳反六畝之處ひらき申候是ハ武右衛門様○御郡代家 老柴谷氏之時分惣組頭共ニ高拾石ツ、ひらきくみ頭免ニ可仕と被仰下候間何之くみ頭共近處ニ見合次第ひらき申候我等も山崎村之谷地見立山崎村之肝煎百姓衆ニもらい候てひらき申候則卯之年より御年貢貳ツ六分ニ納申候別而地方之おしあいニハかまへ無御座候則御目錄ニも年々くみ頭免高と別而指上申候其外村中之ひらき之御年貢とり申由偽ニ御座候此あと少ツ、ひらき申所ハ卯ノ年御さを入申候我等ひらき之御年貢取申儀ハ偽ニ御座候

一新田村之肝煎我等取はなし申由申上候偽ニ而御座候右ニ申上候通午ノ年御物成埒明不申其時分ハ新田さんくたいてん仕不埒ニ御座候故御代官衆へ肝煎を縫殿助指上申候より就夫ニ我等ニ御あつけ被成候此新田立申候より當年迄廿五年さき之午ノ年○寛永 七年ニたち申候先肝煎ハかもと申者仕候それよりハ下當村之喜藏と申者仕候其次ハ同村之勘兵衛仕候其次ハ同村之八右衛門仕候其次ハ新田之内ニ而金四郎仕候其次ハ同村ぬい之助と申もの仕候かやうニ拾貳年之内肝煎六人かわり申候壹年貳年ツ、仕候へ共何れさんく不埒ニ而罷成候其後我等ニ被仰付候間肝煎仕候當年迄十三年無事ニ仕候處ニ我等我かま、仕新田つふれ申

由偽ニ御座候右之百姓四人ハ今ニ御座候右之條々返答書指上申候委ハ口上ニ而可申上候 以上

北 目 村

主 計 印

清右衛門 印

午ノ二月十三日

御 奉 行 所

覺

一 下藤村十七人之百姓發地高拾三石七斗三升之所面々ニ而御年貢しはい仕候へハ事あまたにて成かたく候とて右之高同村九兵衛壹人ニ預ケ置申ニ付而右十七人之百姓共めいはく之由申上候へハ面々手前ハ御返し可申由主計ニ被仰付候

一 主計ニ被下候おき地下藤村山崎村へおこし申分ハ御藏へ被召上候北目村ニおこし申候分ハ主計ニ被下候

一 下藤村新田四人之百姓之儀下とう村きも入扱下ニ成共又ハ山崎村ニ成共勝手次第ニ仕可申由被仰付候へハ下藤村之分ニ罷成度由四人之百姓申上候事

午ノ二月十四日

北目村主計ひらき地上ヶ申覺

北目村主計組頭免ニひらき申田之事



下田貳反六畝廿四步

山崎村分

下田貳反貳畝拾六步

丸子村分

下田四反九畝拾步 分米五石四斗貳升六合七勺

午二月十四日

主計印

劔龍神社 字下當ノ劔積寺ニアリ大己貴少彦名ノ二神ヲ祭ル本ト劔龍山權現ト稱

シ本地佛ヨリシテハ劔龍山藥師堂ト稱セリ古ヘ末社白山神社ノ東方ニアリシテ

年代不詳今ノ位置ニ移轉セシト云フ 上野澤安養寺藏記録ニ當社ヲ劔龍山彼宇志別神社ト云ヘ

波神社ノ北俣愛澤ニ於ケルカ如クナルヘシ 慶長十四年十月龜ヶ崎城主志村光惟堂宇ヲ再建セラレ 菅原政寬

文十二年八月廿三日燒失 山崎高橋善四郎家代記 造立ノ年月詳カナラズ安永八年八月八日炎上

此時本地藥師像ハ鳥有二屬セシモ古來秘佛ト稱スルモノハ幸ニ恙カナカリキ天

明四年更ニ藥師日光月光三尊ヲ造リ之レニ安置ス 天明四年藥師如來萬人講奉加帳

明治三年神佛分離ノ際地方官立會シ内陣ニ就キ彼ノ秘佛ヲ納メシテフ箱ヲ開キ

之レヲ檢スルニ一口ノ劔ト記録トアリ記録ハ率ネ蠹食シ殘余ノ文字幾クモナシ

即チ左ノ如シ

往還旅客絶

之神力者何摧伏之乎

彼

跡千時仁五五十二

七丙申弘覺沙門因

像山似龍頭

有池水可謂八功德池也名謂

巖高表如意珠且

故号劔龍山劔積寺云



右叙積寺奉旨築妙

一封印由坐い中

奉旨秘傳故別當

申いふ今交々上し初

光院は僧曰別當

詔所中堂建立仕

寺減少亦崇敬仕交

仰上り可なり

○用紙筆跡ヲ檢スルニ寛文時代ノモノニ屬セリ仁王五十二代……七丙申ハ千支ヲ推スニ嵯峨天皇弘仁七年歲次丙申ナルヘク將タ「今度炎上」ハ寛文十二年八月廿三日ノ火災ナルヘシ紙面蠹食ミ意義通暢ナラスト雖モ殘余ノ文字ニ依リ之レヲ案スルニ當所ハ本ト劔ヲ身体トナシ劔龍權現ト稱セシヲ弘仁七年沙門弘覺ナルモノ初メテ本地薬師ヲ安置シ劔龍山劔積寺ト稱セシモノ、如シ而シテ寛文十二年ノ回祿ハ靈劍幸ニ烏有ヲ免レシヲ以テ學頭淨光院別當坊等肝銘ノ余堂宇建立ノ際更ニ之レヲ函ニ納メ古縁起文ト其筋ニ差上ケタル文書トヲモ同ク函中ニ封ジ籠ノ内陣ニ安置セシモノナリ

是ニ於テ本地佛ヲ學頭劔積寺ニ下附シ更ニ劔ヲ靈代トナシ劔龍神社ト稱ス明治九年二月廿四日村社ニ列シ同十三年九月廿七日郷社ニ列セラル

舊社領ト社僧 慶長十七年最上義光ヨリ下當村ニ於テ三石六斗貳升八合ヲ寄附セラレ學頭衆徒六口ニテ之レヲ配當セリ黒印ハ慶長十八年紛失スト

(延寶九年庄内寺社領記)遊佐郷下塔村劔龍山淨光院劔積寺領高三石六斗貳升八合  
地方下塔村 黒印一通 慶長十八年丑ニ紛失 内三石學頭淨光院内六斗貳升八合別當坊外衆徒五人 寶藏坊寶泉坊般若坊極樂坊安樂坊

明治二年八月神佛分離ノ際六口ノ衆徒神式ヲ以テ社頭ニ奉仕シ學頭ハ分離シテ



眞言ヲ繼續セリ

劔積寺 字劔積寺上戸ニアリ劔龍山ト號ス東京眞言宗彌勤寺末ニシテ藥師如來ヲ

本尊トナス寺傳ニ慈覺大師ノ開基ニシテ元祿十七年二月廿一日書上淨光上人ノ再興スル所ナリ

ト天保十一年十二月書上云フト之レヲ確ムヘキ文書ナシ但出羽風土略記ニ淨光ノ再興シ延慶元年四月ニ係ルモ據ナシ本ト淨光院

ト稱シ劔龍山衆徒六口ノ學頭タリ故ニ劔龍山劔積寺ノ稱號ヲ襲用ス第九世秀海

江戸彌勤寺ノ法咏ヲ相續セシニ因ミ年月不詳彼末寺ニ屬ス明治三年社頭ヨリ分

離シ眞言宗ヲ繼續セリ

藥師堂 本ト劔龍權現ノ本地佛タリ安永九年八月八日燒失天明四年ノ造替ニ係レ

リ

(天明四年秋藥師如來萬人講奉加帳當寺所藏)巳ノ八月上方ヘ注文仕候藥師如來尊像御

姿ふすべ色にて坐像三尺五重臺舟後光以上御長七尺ニ仕候日光月光等兩尊者立像  
にて御長三尺ニ仕惣金箔ニ御座候

明治三年當寺ニ下附セラレ同四年三月十五日當寺五十二世隨息別ニ堂宇ヲ建立

シ之レヲ安置ス

常恩寺 當山字福の中ニアリ龍宕山ト號ス曹洞宗永泉寺末ニシテ釋迦牟尼如來ヲ

本尊トナス寺傳ニ本寺弟九世全得下塔村教化ノ際鳥海山ノ半腹ニ堂宇ヲ創始シ

興福寺ト稱セシヲ後チ劔龍山常恩寺ト改ム

○寺傳ニ改稱ノ年月長祿二年戊寅四月トアルモ永泉寺過去帳ヲ案スルニ常恩寺

開山全得ハ文明十三年十月十七日ヲ以テ遷化シ所謂長祿二年ハ永泉寺第七世

是金ノ時代ニ當リ世次ト年代ト矛盾スレハ今之レヲ取ラズ

年代不詳當寺第四世峰山現地ニ移轉建立シ山號ヲ龍宕ト改メシト云フ

○寺傳ニ移轉ノ年月ヲ寶永元年三月十日トナセリ然レモ文明ト寶永トハ其間幾

ント二百余年ヲ隔テ固ヨリ四世ノ能ク經過スヘキニアラサレバ亦之レヲ取ラ  
ズ

山崎 上山崎東山崎田中ノ三小字アリ明曆二年ノ現高三百六十七石六斗九升七

合同年檢後チ三百七十五石貳斗貳升貳合貳勺免四ツ九分貳厘タリ

升川 古ハハ現今ノ位置ヨリ三里許奥ニアリテ桑ノ森山道ノ線路ニ當リシヲ土

冠出入ノ憂アルヲ以テ大同二年ニ至リ此通路ヲ塞キ更ニ三崎山ヲ開キシヨリ本



村ノ一部ハコ、ニ移リ一部ハ女鹿ニ轉シ各一村里ヲナセリ菅原政次記ト爾後ノ沿革詳

カナラス明曆二年ノ現高百六十八石壹斗貳升九合五勺同年檢毛帳後チ本高百七十四石

四斗九合二勺免四ツ貳分七厘同新田廿八石貳斗四升八合六勺免三ツ六分トナレリ

佐藤藤佐 當邑ノ人ナリ父ヲ次郎左衛門ト曰フ其先佐藤三郎兵衛尉嗣信ヨリ出ツ

ト母諱ハ某本郡 村菅原氏ノ女ナリ幼ニシテ父ヲ喪ヒ母ニ養育セラレ夙ニ功

名ノ志ヲ抱キ庄内ノ天地ニ跼蹐スルヲ屑シトセズ母其異器ヲ察シ之レニ金ヲ與

ヘ諭シテ曰ク汝チ力ヲ國家ニ效シ以テ父祖ノ名ヲ顯ハスヘシト下掲ノ肖像記文ニ據ル乃チ其

妹ニ婿ヲ迎ヘ家ヲ繼ガシメ藤佐ヲシテ江戸ニ赴カシム時二年十九、藤佐人トナリ

塊偉倜儻ニシテ頗ル才幹アリ其都下ニ在ルヤ備ニ艱難ヲ嘗メ堅忍コレニ耐エ交

ヲ知名ノ士ニ求メ名聲稍々揚カリ彼ノ有名ナル矢部駿河守定謙ノ知ル所トナレ

リ藤佐固ト經濟ノ才ニ富ミ凡ソ事皆先機ヲ制シ毎ニ名門巨族ノ爲ニ效ス所尠カ

ラズ其功勞ニ依リ諸家ノ俸祿ヲ受ケ一家ヲ起シ子女亦各々處ヲ得、疇昔ノ藤佐

ニアラス頻リニ伎倆ヲ振ヒ名聲ヲ都下ニ馳セ當時策士ヲ以テ稱セラル、ニ至レ

リ下掲人名辭書水野主殿頭ハ幕府麾下ノ士ナリ下總結城ノ城主水野日向守ノ男舍

人ヲ養子トナス日州藤佐ノ器ヲ知り托シテ之レヲ保育セシム下掲天保十三年九月九日書翰參照舍人

ノ相續スルヤ家宰其人ヲ失ヒ内政大ニ紊ル日州亦藤佐ヲシテ之レヲ整理セシム

ルニ頗ル成績アリ賞スルニ大樹ヨリ恩賜ノ「鷹造」佩刀ノ名ヲ以テス天保十一年祝融

ノ爲メニ亡ハンコトヲ慮リ更ニ之レヲ生家ニ贈リ永ク其賜ヲ保存セシム舍人後

チ若狹守ニ叙爵シ大坂奉行ニ累遷シ命名アリ堺奉行伊奈遠江守後チ勘定奉行タリ亦曾テ大

ニ藤佐ニ荷フ所アリ故ニ兩家之レヲ德トシ待ツニ家臣ノ土席ヲ以テセラル

(林若吉 藤佐ノ長子泰然ノ孫 筆記)予加家ニ傳ふるハ藤佐翁ノ千住驛ニ至るや懷中僅ニ數

百文而して身ニ纏ふものハ赤合羽一枚のみ翁更に屈せずして東都に入り具ニ艱難

を嘗め某家に入り仲間となること三日直ちに擧げられて足輕に列すと其方の非凡

なること知るへしニ計ムヘチ人ニマキテ聞ク五日ハ將軍ノ御前ニ召シテ六十餘歳

(松本順筆記)羽后國飽海郡升川村鳥海山ノ麓ニアリ佐藤一家ヲ以テ一村ヲ爲ス昔

秀衡ノ子息等父ノ遺言ヲ用キス源頼朝ニ欺カレ國ヲ失ヒシトキ秀衡ノ母經信忠信

ノ遺子ヲ携ヘ一族ヲ卒キ没落鳥海山ノ麓ニ至リ新ニ田園ヲ開キ是レニ住スト云フ

○此一節據ナシ



佐藤信隆通稱藤佐幼ニシテ父ヲ失ヒ獨リ慈母ノ爲メニ人トナル事ヲ得伯父某家政ヲ預リ藤佐十六才ヲ俟ツテ之レヲ渡サント約セシニ其言ノ僞ニシテ自ラ其家ヲ強奪セントスルノ念アルヲ以テ怒リ大ニ激論動モスレバ腕力ニ及バントスルヤ村人皆是ヲ宥メタルモ慾心尙止マズ遂ニ官ニ訴ヘ訟訴全勝ヲ得タリ藤佐氏十九ノ時其母命シテ汝ハ僻村ニ住ムヘキ人ニアラズ聞ク江戸ハ將軍ノ在ル所ニシテ六十余劬ノ候伯皆集リ武家最モ多ク志アルモノ、望ム地ナレバ聊カ旅費ヲ與フルヲ以テ江戸ニ至リ槍一本馬一疋ノ士人ダラバ再ヒ故郷ニ來ルヘシ家ハ妹ヲ以テ相續セシム決シテ後ヲ慮ル事勿レト金廿五兩ヲ與フ即チ其金ヲ以テ獨步國ヲ出デ旅中酒色ニ豪遊シ携フル所ノ金一錢ヲモ殘サズ其後ハ所持ノ品ヲ賣却シテ僅ニ江戸ニ至ルモ一ノ知人ナキヲ以テ人ニ問フテ慶安○人ノ口入ヲ業トスルモノニ至リ柳生但馬守ノ小僕タリ時ニ柳生家ノ妾密ニ家老ト通シ庭口ヨリ其情夫ヲ導クヲ見テ之レヲ捕フ藤佐ハ警力人ニ増リ若キハ米五表ヲ負フ大聲但馬守ヲ呼ヒ其顛末ヲ詰リ悉ク白狀セシム翌朝男女共ニ放逐セラレ擢ンジテ士頭トナル余カ幼時嘗ニ曰ク出羽ヨリ出テシキ三日ノ間柳生ノ僕トナリ夜分ハ米表ノ中ニ寢タリト若干ノ金ト帶刀紋衣ヲ賜ハリタリ此時迄強酒殆ント四五升ヲ盡スモ今ヨリ必ス是レヲ禁シ後世志ヲ得ルニアラサレバ再ヒ酒杯ヲ手ニセズト誓ヒタリ

柳生家ノ家政整理ノ後麻布狸穴渥美九郎兵衛湯嶋天神町深谷遠江守濱町水野若狹守等ノ依頼ヲ受ケ其家政整理ヲナシ就中伊奈遠江守三味線堀ニ在リテ其若殿佐藤

小右衛門後チ泰然ト改ムト學校友タルヲ以テ伊奈ノ依頼ニ依リ父藤佐ニ説キ其整理ノ囑托ヲ受ケタリ然ルニ若殿左衛門ノ人トナリヲ感ジ更ニ金主ヲ談シテ虎ノ門表ニ地ヲ求メ新築シテ父子共ニ邸中ニ在テ特ニ之レヲ助ケ後左衛門ハ累進シテ遂ニ勘定奉行トナリタリ此頃藤佐ハ既ニ死シタルカ故ニ伊奈其恩ヲ感シ墓碑ヲ建立ス今尙小石川水道端日輪寺ニアリ是レヨリ先キ大橋ヲ過グルキ橋上ヨリ將ニ投身セントスルモノアルカ故ニ之ヲ止メ扶助ヲ加ヘ且資本ヲ與フルヲ以テ後チ其娘ヲ田安家ニ奉仕セシメ公ノ愛妾トナリタリ此折シモ水野越前守庄内ノ領主酒井左衛門尉ノ中邸淺草福井町ニアルモノヲ奪ハントシテ種々惡計ヲ廻ラシ遂ニ其令ヲ出シタリ干時左衛門尉ハ格別ノ罪ナクシテ此邸地ヲ奪ハレントスルヲ以テ其策ヲ藤佐ニ計リタリ幸ニシテ前ニ助命セシ者ノ娘田安公ノ愛妾タルヲ以テ田安公自ラ登營セラレ親シク將軍ニ其事ヲ説話セラル、ニ依テ左衛門尉ハ其邸地ヲ奪ハル、事ヲ免カレタリ以來其功ヲ以テ大ニ藩ノ厚遇ヲ受ケ中仕以上ノ格ヲ賜ハリ少ク恩祿ヲ扶助セラレタリ

(升川佐藤熊治○藤佐生家所藏文書)別紙を以得貴意候昨年喜惣次○二男然僕ナリ方惣領藤太郎儀學文出精ニ付聖堂江罷出林大學頭殿始御儒者方御目付衆立合之上御吟味有之舊臘御呼出之上若年寄衆松平玄蕃頭殿ヨリ別紙御書面を以爲御褒美銀子二枚被下置難有仕合奉存候右者十七才ヨリ十九才迄素讀御吟味ニ罷出候御議定ニ御座候へ共桃



太郎儀昨年十四才ニ罷成候へ共十七才與申達罷出申候右御褒美ハ家之面目ニ付右之内一枚同人ヨリ私江相送候間右御書付并銀子賣拂御金共其御地江差遣申候間右金子ニ而於湯泉寺○落伏永泉寺ナリ先祖私兩親之法事致修行親類共江吹聽致右書付ハ次郎左衛門方子孫へ殘置候様致度奉存候

一私儀も久々眼病ニも有之殊ニ近頃病身ニ罷成可致隱居與種々致工風候へ共忤泰然方當時廿人暮余ニ而此節既ニ其御地酒田之醫者ニ而水上村佐藤利大夫方縁者ノ由ニ而富樫多門ニ申者舊臘ヨリ致入塾候己ニ同人も承知之通忤追々手廣ニ相成當時御屋敷方十軒余御立入仕右之内六軒様ヨリ御扶持方六十八人扶持余金百兩余宛年々項載着類ハ反物其外ニ而家内一同之着類ニハ餘リ候へ共當時子供四軒ニ分レ孫も十九人有之所々ヨリ私方江不足ノ分ハねたり參候間金銀着類ニ而も間ニ合兼候夫故藤太兄弟杯之方迄ハ世話も行届不申候乍然私差かまハず候方ハ却て當人共之爲ニ相成自分ニ追々致工風取續藤太義ハ昨年妻を貰可也ニ相成可申と奉存候姉之方も追々身上取立可申候間上寺江も序之節宜御申通可被下候一私儀前文之通所々様江御立入仕候處昨年俄ニ米下落ニ付所々様御身代殊之外御六ヶ敷七軒様之内二軒様殊之外御難澁ニ付廿人扶持當分差上是迄下地差上候金子居置舊臘二軒様江新金千兩余之御口入ニ而大ニ困リ無據無盡取立七百五十兩小口一口并五百兩口者先年大山戀川參候節浦賀表ニ而江戸入之酒々樽數稠敷御改

候て江戸表酒拂底ニて大差支相成江戸問屋ハ勿論上方造酒家其外江戸市中酒小賣之者迄難澁致迷惑候處其節御勘定奉行矢部駿河守殿江申上私取計ニて當時世上酒三分一造四分一造ニ而も江戸中酒致潤澤當時賣餘リ候程ニ相成候ニ付右江戸酒問屋并上方酒造家一同申合外五百兩之無盡取立吳都合千貳百五十兩之積金講出來舊臘二口講事無滯取立候へ共八百兩余不足ニ而舊臘ハ大難澁致未タ私宿許之義ハ舊臘之儘捨置申候江戸之住居ハ右様之者ニ而決而親類縁者たりとも江戸表江差遣候義兼々申進候通吳々も御無用ニ御座候

一公儀御留筆男谷公之書各様江一幅ッ、差進候間表具御申付御子孫江御傳可被下候私義も病身ニハ罷成候共所々様御世話引受御大借之處も被爲在候間當年來年迄之内今一度遠國ニ參可申與奉存候其内依品當二三月比迄之内ニハ新庄戸澤大和守殿御判元御目付水野舍人被仰付候ハ、依品私儀も罷越可申哉も難計乍然御用先ニ付御地迄參候義も六ヶ敷候間兩三年之内遠國相仕舞其上ニ而隱居致參度與心懸居候へ共當年最早六十六才ニ相成候上病身ニも有之候間何分參候義も無覺束夫故書面を以先此段申進候余者追々重便萬々得御意可申候以上

(天保十一年) 正月二日

佐藤々々

佐藤次郎左衛門様

菅原太藏様



鷹造脇差傳來書

水野舍人殿御小納戸御勤役中 大御所將軍家千住筋御鷹野のせつ舍人殿御脇鷹おほせ付られ御場先にて鶴雁多く御手ニ入候とて其節御脇鷹の装束紫房ニ仰出され御鷹の具残らず御場ニ於て御拜領被成還 御の後御奉の鶴雁の御料理頂戴のうへ鶴雁の足御拜領被成候ニ付右之足皮を柄さめの代ニ御用鷹の具の小道具を最□にて御野指出來いたし其後 御成の御供ニハ御用ひ被成候依て御鷹造と名付られ候右舍人殿家元ハ作州津山城主十萬八千石水野日向守殿の六男にて新知二千石ニ被召出水野讚岐守殿と申しより七代目主殿頭殿いまた大目付御勤中當舍人殿部屋住ヨリ奥つとめニ被爲成右御家累代の御家來共不束にて御政事亂れ候ニ付拙者事舍人殿御本家當時下總結城の城主水野日向守殿ヨリ御家老稻葉清大夫を以厚御頼御書等も被下候故無據御家政の事及御相談近頃御取締も付候とて御満足之余リ御秘藏の御鷹造を被下置永く家ニ傳へよとの事ニ候へとも江戸住居のものにてハ往々火災の恐れも有之ニ付具ものを譲リ子孫へ永く傳へ候様いたし度傳來のあらまし申送り候 冗賢々々

天保十一年子六月

佐藤々々佐

信隆花押

木

此時ニ當リ水野越前守御老中トシテ幕府ノ要路ニ當リ峻峭事ヲ用ヒ威權赫灼勢内外ヲ傾ケ我カ酒井忠器侯ト意氣相投セズ侯嘗テ武ヲ酒田大濱ニ閱スルノ途本間家ノ別莊ニ臨ム本間外衛厚ク奉饗シ金帛ヲ獻シ延イテ隨從ノ女中ニ及ヘリ事天保九年ニ係レリ女中等大ニ悦ヒ歸府ノ後チ盛ンニ之レヲ父母親戚ニ鼓吹シ得々其款待セラレタルヲ誇リシガ事幕府ニ聞ユ幕議以爲ラク今ヤ凶歎ノ餘ヲ承ケ海内悉ク疲弊セリ庄内ノ奢侈斯クノ如キハ時世ヲ憚ラザルモノナリト或ハ之レヲ以テ侯ニ中テ轉封ヲ擬スルモノアリ時ニ矢部駿州御勘定奉行タリ既ニ庄内ノ事情ヲ知悉スルヲ以テ爲メニ辯シ事ナキヲ得タリキ下掲弘化四年十二月七日ノ書翰參照スヘシ

天保十一年十一月朔日酒井侯越後長岡石七萬ニ轉封ノ臺命ヲ受ケ武州川越ノ城主

松平大和守ニ庄内ヲ賜ヒ長岡ノ牧野備中守ニ川越ヲ賜ハル事青天ノ霹靂ニ屬シ

封内ノ士民呆然トシテ爲ス所ヲ知ラス川越侯ハ鶴岡城内ナル酒井家累代ノ遺骸

ヲ長岡ニ改葬セシメンコトヲ幕府ニ内願シ弘化四年十二月七日ノ書翰參照スヘシ酒井侯モ亦之レニ對

シ歎願スル所アリ歎願書ハ本間家文書ニ見エタリ物情頗ル穩カナラス庄内ノ百姓相率キテ「いなり



大明神いなりハ居成ノ假字本領 筵旗ヲ翻ヘシ處々ニ嘯集シテ本領安堵ノ方略ヲ密  
議シ終ニ三々五々提携シテ江戸ニ脱走シ將ニ爲ス所アラントス藤佐痛ク之レ  
ヲ憂ヒ更ニ主家ノ爲メニ盡サントシテ窃ニ駿州ニ推敲スル所アリシガ是レヨ  
リ先キ駿州本丸建築ノ幕議ニ反對シ其言將軍ノ忌諱ニ觸レ御留守居ノ閑地ニ左  
遷セラレ當時政務ニ參預セサリシヲ以テ復タ之レヲ奈何ントモスル能ハス諭ス  
ニ此際酒井家ヲシテ臺命ヲ重ンジ速カニ就封シ譜代ノ譜代タル實ヲ效サシメ三  
年ノ後チ機會ニ投シ復封ヲ計畫スヘキヲ以テセラレ轉ク越前等ノ專横ヲ慨キ幕  
府ノ爲メニ憂色アリキ天保十三年八月五日  
書翰參照スヘシ 是ニ於テ藤佐大ニ悟ル所アリ豫メ松平侯  
就封ニ對スル方略ヲ講シ挽回ノ先機ヲ制シツ、アリシガ會々酒田ノ白崎五右衛  
門本間家ノ用務ヲ帶ヒ江戸ニアリ之レト相議リ百方苦心緣ヲ求メ川越藩邸ニ昵  
近シ陽ニ忠勤スルマネシテ内部ノ形勢ヲ探知シ就封ノ後チ松平氏ヲシテ財政困  
難ニ陥ラシメ機ニ投シ變ニ應スルノ奇謀ヲ畫策セラル既ニシテ五右衛門用務ヲ  
了シ歸國セントスルニ臨ミ川越ノ探偵ヲ避ケ故ラニ我カ藩邸神田橋  
ニアリニ辭セズ彼ノ

藩邸ニ伺候シ以テ其歡心ヲ收メリ當時ノ苦楚想フヘシ天保十三年八月十五  
日ノ書翰參照スヘシ  
駿州ノ骨鯁ヲ以テ左遷セラル、ヤ水戸ノ烈公深ク其人トナリテ欽シ和歌ヲ作り  
之レニ遣リ其志ヲ稱セシガ尋テ將軍精ヲ勵マシ治ヲ圖リ寛保寛政ノ政ニ復セン  
ト欲シ天保十二年春駿州ヲ起シテ江戸町奉行トナシ大ニ紀綱ヲ更張セシム是レ  
實ニ藤佐ノ爲メニハ池中ノ蚊龍雲雨ヲ得タルモノニシテ復タ遇フヘカラサルノ  
好機ニ會スルモノナリ此時ニ當リ庄内百姓ノ都下ニ潜伏スルモノ往々不穩ノ形  
跡ヲ存シ藤佐ノ諭止スルニモ拘ハラズ終ニ當時嚴禁ノ越訴ヲ企テ直訴歎願書ヲ  
幕府ニ呈スルニ至レリ監察值吏ヲシテ之レガ消息ヲ探ラシムルニ都下兩國ニ佐  
藤々佐ナルモノアリ本ト莊内ノ産ナリ彼レ領内ノ百姓ヲ教唆シ事コ、ニ及ベル  
モノナリト併モ藤佐ノ訴願事件ニ於ケル全然何等ノ關係ナク寧口之レヲ諭止セ  
シモノナリ而モ二者其趣ヲ異ニスルモ主家ノ爲メニ奔走スル目的ハ同一ニ歸ス  
ルヲ以テ值吏ノ側ヨリハ斯ク見做サレタルモノニシテ藤佐ノ爲メニハ即チ不慮  
ノ奇禍ニ屬セリ然レ吉凶禍福ハ糾ヘル繩ノ如ク禍ヲ轉シテ福ニ化スルノ活機ハ



隱然コ、ニ發揮シツ、アリ  
 水野越前守駿州ニ命シ藤佐父子二男喜惣治後チ然僕ト改名スヲ引致シ其狀ヲ鞠問セシム時ニ藤佐  
 齡己ニ耳順ヲ超エシモ剛直不撓ノ氣概ハ老テ益々旺ンニ多年江戸ニ住シ名門ニ  
 出入シ見聞極メテ廣ク越前守及ヒ榊原鳥居等ノ專横ヲ稔知スルヲ以テ訟庭ニ於  
 テ侃々諤々飽クマデ當路ノ失態ヲ鳴ラシ極力轉封ノ非ヲ痛論シ毫毛憚ル所ナク  
 餘焰内廷ノ秘密ニ屬スルモノヲモ亦將ニ暴露セラレントス駿州窃ニ其杭直ニ感  
 激シ口供書ヲ取り臺閣列坐ノ席ニ於テ之レヲ朗讀シ越前守等ヲシテ坐口ニ顔色  
 ヲ失ハシム是ニ於テ幕府藤佐ノ訊問ヲ停止シ并セテ越前守ニ三日間ノ登城ヲ遠  
 慮セシメ○一説ニ越前守自ラ時事ノ非ナルヲ見所勞ト稱シ自邸ニ引籠ミシト云フ其間ヲ以テ御老中堀田備中守正陸佐倉城主等轉  
 封ノ利害ヲ審議シ其結果トシテ同年七月十二日「上之思召」テフヲ以テ酒井侯ヲ  
 シテ本領ヲ安堵セシメタリ是レ德川氏開府以來破天荒ノ特典ニシテ君德ノ然ラ  
 シムル所、民心ノ歸スル所ニ因ルト雖氏藤佐一身ヲ犠牲ニシ敢テ訟庭ニ論爭ス  
 ルニアラザレハ安ンゾ能クコ、ニ至ルヲ得ン天保十三年八月十四日十五日ノ書翰參照スヘシ

(大日本人名辭書第四版)

佐藤々佐 出羽庄内ノ人ニシテ醫師泰然ノ父ナリ嘗テ庄内  
 藩轉封ノ議起ル藤佐窃ニ江戸ニ出テ閣老ニ迫リ不可ナルヲ陳シ其議終ニ止ム藩之

レヲ德トシテ世々其家ニ祿スト云フ當時ノ一策士ナリ虛心筆記

(茶農漫錄林洞海著)

藤佐翁ハ予が妻の祖父なり其性實ニ豪邁不偏深く學ハすといへど  
 も理を見ること敏明なり故に能く經濟の事に通し老年ニ及んで眼盲して明に見る  
 こと能ハすと雖其談論の活潑なること壯年の人と雖及ふことなし實ニ胆斗の如き  
 人と稱すへし其藩主轉封の命下りて一藩愕然呆然として爲す所を知らざるに當り  
 て大に政府の非を訟庭に論して懼縮する所なく轉封の命中途に廢せられしハ全く  
 翁一人の力なり其事ハ本編○茶農漫錄ヲ云フ第一號高島秋帆罹災始末の内に在り就て見るべ

高島秋帆罹災始末抄錄

上 先是武州川越の城主松平大和守萬石を出羽の庄内に、庄内の城主酒井左衛門尉を  
 越後長岡城に、長岡の城主牧野備前守酒井八十四萬石 牧野八七萬石を川越城に轉封の命あり莊内の人  
 民蜂起官ニ訴へて故主を其儘莊内ニ置かんとす事もつれて解けず人民遂に江戸ニ  
 出て閣老に直訴歎願するに至れり其時監察の探偵上申して云江戸兩國の住人佐藤  
 々佐なる者あり庄内領の産なり此者専ら庄内の人民を煽動すと水野越前守町奉行  
 矢部駿河守に命して之を拘引して其狀を鞠問せしむ藤佐性剛直不偏年己に耳順に



過くと雖毫も恐怖の色なく訟庭に於て移封の非を痛論す矢部も亦剛直の人且竊に  
此舉を美とせす故に藤佐をして其意を悉さしめ之れを書に筆して以て政廳ニ出て  
閣老參政列坐の席に於て口上を朗讀して陰蔽する所なし移封の命中止となりしハ  
此書與りて大に力ありしといふ略下

酒井侯其功勞ヲ嘉ミシ藩邸ニ於テ金帛廩俸ヲ給フ藤佐ノ功彼レカ如ク偉大ナル  
モ其賞斯クノ如ク輕薄ナリシハ其措置稍く當ヲ失スルニ似タリト雖凡決シテ然  
ルニアラス當時尙越前守幕府ニ在リテ要樞ノ地ヲ占メツ、アルヲ以テ之ヲ慮リ  
事コ、ニ出テシモノニシテ若シ酒井侯ヲシテ意ノ如クナラシメバ其酬ユル所ノ  
モノ果シテコレニ止マラサリシナリ之レガ消息ハ特ニ文書ニ所見ナシト雖侯窃  
ニ駿州ヲ德トシ他日其遺族ニ扶助セラレシ事歴ハ慥ニ之レヲ證スルニ足ルヘキ  
モノアリ故ニ藩邸ノ藤佐ヲ遇スル資格ニ拘ハラズ年始期節ノ献上及ヒ意見ヲ藩  
老ニ開陳シ得ルノ特典ヲ與ヘラレタリ弘化元年正月十一日  
ノ書翰參照スヘシ

(升川佐藤氏文書)以飛扎致啓上候未餘寒強御座候へ共御兩家皆々様始御一門御一  
同彌御安泰ニ而御越年被成日出度奉存候當表ニても始私孫子縁者共相替候義無御

座致加年候間御安意可被下候

一去臘茂 殿様ヨリ御召 御紋御小袖拜領猶又御留守居大山庄大夫殿御取直を以  
年始其外時々献備物致候様被仰付冥加至極難有仕合ニ奉存候乍併其度々御側頭  
迄献備日限聞合差上候様ニこの御沙汰ニ御座候殊ニ手數も相かゝり諸入用も勿  
論之事ニ御座候へ共是ハ家之面目殊ニ冥加至極之御儀ニ而御所替一條ニ付如何  
様□心中者御座候共又ハ私白崎等之儀彼是申候共並人物ニ中々相譯候義ニ無御  
座候此上慥成證據ハ無御座候乍憚天下ニ名ヲ轟せ候故最早私ニ於て何の願ハ無  
御座候間此間ニ脱  
字アルヘシ水野舍人儀ハ一昨年堺奉行被仰付若狹守ト改昨秋大坂町奉行被  
仰付私十一才ヨリ守立申候

伊奈左門ハ昨春御小納戸頭取被仰付昨冬若狹守跡堺奉行被仰付遠江守ト改若狹  
守義ハ御勘定奉行迄ハ此上にて勤次キも次第にて昇進も可有之伊奈遠江守ハ卅  
七才ニ而昨冬堺奉行被仰付候間是ハ品ニ寄御側御用御取次ニも可被爲在私儀ハ  
兩家々來之上席いたし居候へ共最早前文之次第にて世の中ニ願も無御座隱居致  
一度在所江罷下リ佛參先祖之致法事も度右ニ付永泉寺之水引内鋪ハ先達も申進  
候通何卒宜キ便リも御座候へバ相届申度御上屋敷江願置候石燈籠壹丈貳尺之御  
蔭石ニ而出來居候間昨年御所替大願成就之御禮ニ献備致度同壹丈壹尺之燈籠ハ  
永泉寺之本堂之前ニスへ同七尺五寸之燈籠ハ私永泉寺江立置候石碑之前江スエ



申度同笠石六尺余之山燈籠ハ方丈之庭江ヌエ候様と申相廻し可申心意ニ付上寺  
大泉坊酒田之白崎五右衛門同處廻船問屋渡邊氏江相談之上船廻之義並ニ佐藤喜  
内殿江御相談之義此度白崎氏江委敷相願差遣ハし候間各々様ヨリも右之御方々  
江御相談被成宜敷御取計可被下候私儀ハ當月十五日比出立大坂表ヨリ堺表迄罷  
越隠居いたし其御地江罷下リ先祖江拜禮いたし度所存ニ付右趣一先取極歸府ノ  
上都合次第罷下リ候心得ニ御座候余ハ重便申進候へ共先ハ此段申上候早々以上

(天保十三年)

正月九日

曩キニ白崎五右衛門ト相議リ陽ニ川越藩邸ニ昵近セラレシハ陰ニ内部ノ形勢ヲ  
探知セントスルニアリ即チ主家ノ爲メニ苦肉ノ計略ヲ策スルモノナリト雖氏當  
時秘密中ノ秘密ニ附シ藩邸ノ有司ニシテ尙之レヲ知ルモノハ纔ニ御留守居大山  
庄大夫及櫻井順助ノ二人ニ過キサリシナリ是レ其事体極メテ重大ニシテ一朝暴  
露センカ苦楚慘憺ノ餘、畫策セルモノ徒ニ水泡ニ歸スルノミナラズ却テ累ヲ主  
家ニ及ボザンコトヲ恐ルレバナリ藤佐等ノ心事既ニ斯ノ如シ之レヲ戰國ノ世ニ  
移サバ單身敵壘ニ入り要害ヲ偵察シ内應ヲ謀ルモノト何ゾ擇ハン顧フニ此レヨ

リ間牒ヲ入ルレバ彼亦間牒ヲ來スヘキハ物情恟々タル當時ニ於テ固ヨリ免レザ  
ル數ニシアレバ互ニ相警メテ事跡ヲ韜晦シ之レヲ秘密ニセラレシヲ以テ藩邸ス  
ラ其眞想ヲ知ルモノ極メテ希レナルニ況シテ庄内ノ士民ニ於テチヤ

サレバ百姓等ハ白崎ガ歸國ノ際藩邸ニモ告別セズ川越伺候ノ形跡ヲ傳聞シ大ニ  
激昂シ所謂天狗連ナルモノハ以テ二百年來ノ恩義ニ背キ川越侯ニ親ミ他日ノ利  
益ヲ計ル賣國ノ奸賊トナシ一犬虛ニ吠エ萬犬之レニ應シ物論囂々トシテ有司ノ  
制止スルニモ拘ハラズ黨類ヲ嘯集シ白日五右衛門ノ居宅ヲ破壊セントス有司旨  
ヲ白崎ニ諭シ難ヲ鶴岡ニ避ケシメ天保十三年之レニ退隱ヲ命ジ養子謙吾ニ跡式  
ヲ賜ヒ以テ民心ノ動搖ヲ鎮セシム時ニ藤佐江戸ニアリシヲ以テ幸ニ其累ヲ免レ  
シモ生家一族ノ郷里ニ住スルモノ毎ニ彼等ニ厭嫌セラレ各々警戒ヲ加フルニ至  
レリ是レ將タ頑拗ナル土民ノ暴舉ニ出テシモノト云ヘ藤佐五右衛門ノ爲メニ  
實ニ不慮ノ枉冤ト謂フヘキナリ

酒田町白崎  
氏ノ下參照

詮ズルニ本領安堵ノ臺命ハ無論民心ノ

歸嚮之レガ根底タリシニ相違ナキモ單ニ百姓ノ越訴ノミヲ以テ幕議ヲ翻ヘセル



モノトスルハ未タ其真相ノ全局ヲ知ラサルモノナリ否或ハ之レヲ知レルモノナ  
 キニシモアラスト雖氏藤佐等ノ爲メニ獨リ美ヲ擅マニセラレンコトヲ恐レ川越  
 ニ係ル形跡ヲ奇貨トシテ之レヲ毀タントスルニ起因セシモノナリ殊ニ知ラズ藤  
 佐既ニ己ニ藩邸ニ於テ其功勞ヲ勤セラレツ、アリシコトヲ區々ノ物論固ヨリ蛙  
 鳴蟬噪ニ屬シ毫モ以テ榮辱トナスニ足ラサルナリ  
 駿州ノ藤佐ヲ鞠問シ其口供書ヲ臺閣ニ公開スルヤ越前守大ニ面目ヲ失フノミナ  
 ラズ轉封ノ事サヘ行ハレズナリ非常ノ失敗ヲ取レリ爾來深ク駿州ヲ悲ミ窃ニ耳  
 目ヲ放チ乘シテ擠ル<sup>オシイ</sup>ヘキ隙ヲ窺ハシメ天保十三年春事ニ托シ構陷シ籍ヲ除キ勢  
 州桑名ニ禁錮セシメ以テ之レニ報イタリ駿州痛ク其深刻ヲ憤リ食ヲ斷チ致命ヲ  
 期ス桑名侯狀ヲ具シテ以聞ス幕府醫ヲ遣ハシ之レヲ視セシムルニ憔悴骨立復タ  
 當年ノ面影ナシ醫藥餌ヲ進ム駿州之レヲ卻ケテ曰フ吾レ既ニ死ヲ決セリ何ンゾ  
 藥ヲ用ヒン吾レハ三月廿一日ヲ以テ罪ヲ獲タリ必スヤ此日ヲ以テ吾レヲ陷ルモ  
 ノニ報イン君其レ之レヲ記セヨト辭色甚タ厲ケシ八月下旬終ニ絶命シ桑名城外  
 セ、

一杯ノ土トナリヌ水戸ノ藤田彪爲メニ詩ヲ以テ之レヲ哭ス句々悲壯鬼神ヲ泣カ  
 シム翌年ニ至リ越前守果シテ貶黜セラル世舉ツテ駿州ノ崇ル所ナリト云フ此一節  
愛國偉  
續編名譽實  
錄ニ據ル

(同上) 極内々書取を以テ申進候

一 昨年御所替之趣白崎五右衛門私方江參り右之趣申聞候ニ付同様驚入絶言語候得  
 共乍併 殿様御所替之儀ニ付而ハ安閑與致可罷在儀ニ無御座候ニ付白崎氏與相  
 談之上兼而奉蒙御懇命候御方様○矢部駿江  
州ヲ云フ罷出奉伺候處御同人様ニ被爲置候而も  
 庄内家之儀ハ格別之儀故然ルニ右様被仰付候<sup>モツテ</sup>尤之外之御儀ニ思召面色をかへ  
 御沙汰被進候ニハ君命故難<sup>戻</sup>儀ニ被爲在候間大久保青山御兩家之通リ君命與  
 思召庄内家之御義丈クニ奉對上江穩便ニ御引渡被遊候方與可思召旨ニ而大和守  
 殿庄内江御引移被爲在候而も大和守殿御國政ニテハ三ヶ年ハ相治リ居不申御領  
 分中程なくラン立候得者庄内家ニ於テ奉對上江候而者格別之御儀ニも被爲在  
 大和守殿惡政ハ眼前ニ相分既ニ庄内領酒井家江被下置候ニハ元和之比にても別  
 而酒井家ハ格別之御勢ヒニ被爲在候へ共三ヶ年程ハ不相治候程之人氣故大和守  
 殿永領ハ不存寄候儀ニも御座候へ共右之御方様御政事ニ御加リ不被遊候間誠ニ  
 殘念之事與思召候之御沙汰ニ候○此時駿州御留守居ノ  
閑地ニアリ故ニ云フ然ル上ハ御穩便ニ御引渡其上ハ



御引移其外御平日萬端御少略被遊三ヶ年相立御本領御安堵之節御引移並萬端御  
 差支不爲在候様被遊候ハ、奉對公儀候而ハあつはれ御普代之被遊方與末代迄大  
 久保青山御兩家御同様世上ニしらせられ候御儀之御沙汰○以上ハ駿州ノ轉封ニ對スル  
ル意見ヲ叙シタルモノナリニ  
 付既ニ御引移御城丈御入用庄内御引渡長岡御受取迄ハ大そう之御入用ニ御座候  
 處御上使様御先々に御取入り矢張御國々之御料理人ニ而御間ニ合候様可取計手  
 段ニ而御物入ハ江戸料理茶屋共請負拾分一ニて間ニ合候様致手段候ハ大和守殿  
 庄内領御引移被爲在候得者白崎初本間家其外何れも大家之面々御用金ニ而大  
 和守殿ノ爲ニ被取上候間第一白崎氏ハ私ニ相談之上大和守殿江表向勤功被爲見  
 掛ケ同人身代限リ開發產物仕立方江不殘身代入レ上ケ可申本間家ハ上野之本間  
 之名前ニ早々御領中之地面並貸金唯今之内證文書替置宮様之御服料金之積リニ  
 致置候義上野宮様御里有柄川宮者京都町奉行深谷遠江守殿家老ニ而私罷登候節  
 〇藤佐嘗テ深谷家ノ財政ヲ整理セシコト上掲松本順氏筆記ニ見エ遠有柄川様奉蒙御頼ヲ罷在一昨暮ヨリ  
 州京都町奉行トナルニ及ヒ家老トシテ京都ニ在勤セラレシ際ナ云フ  
 御年始旁有柄川宮御使粟津甲斐守幸出府中ニ付上野御旅宿ニ罷出致面談本間家  
 之御ゆう金○御有ハ直ニ長岡御同人御引移之節御持越被成候様御取計候方可然  
金ナリ且大和守殿御用金等御引移後被仰付候ハ、紀州様御用途御貸附御名目金御貸附  
 金ハ先年私差加リ候間上方金主共ハ私申談酒田ノ役所取建之御領分之義ハ先以  
 御領所ハ是迄之拜借且ハ爲冥加御別レニも被爲在候間相互ニ申合國中金子御領

内一同ニ而ゆう通致壹錢も御用金ハ出來不申候迎紀州様御用途金御年貢引當テ  
 ニ拜借致可奉差上ニ申其上如何様被仰付候共御領内一同申合候義ニ付右拜借金  
 ニ而御間ニ合候義ニ御座候ハ、御引移リ御當分之義ニ付右金子御借リ請御用金  
 ハ被仰付間敷ニ奉存候猶又紀州於御役所ニハ御用船御つくり御米並產物御引上  
 ケ國々江御廻し被成候ハ、大和守殿ニハ彌金銀差支故非道之御國政御座候節ハ  
 御在所表御領内之御百姓町人眼前之惡政も御座候義ニ付其節ラン立御引移翌々  
 年之暮比ハ其時節ニも當リ可申と存候間夫迄ニハ白崎本間等ハ私追々大和守殿  
 様子も内々爲承候もの江戸表にも縁者共之内大和守殿江手筋御座候もの相頼置  
 私儀ハ大和守殿江附入り御家來同様ニ相成庄内江參リ白崎開發新田之世話等大  
 和守殿へ御頼世話可致ミ僞リ參リ白崎ニ於てハ開發產物之爲ニ身代限リ入り上  
 ケ候迎大和守殿御爲ニハ不相成往々ハ殿様御爲之御益ニ而自分之爲ニ相成候儀  
 ニも有之大和守殿惡政ニ而一同ラン立候時節ハ霜月中北風起リ候節新堀川岸迄  
 川北ヨリ南ニ向ひ詰かけ大和守殿御家來ハ川南御城下ヨリ南ニ向ひ詰かけ候而  
 も大風之事故寒サ強く手足も働出來不申候雪吹ハ目口ニ入り不案内土地故進ミ  
 候義ハ勿論息ヲ吹ク間も無御座候其節北ヨリ南江向ひ參リ候ものハ十分之働出  
 來可申漁師筒を以打かけ候得者大和守殿人數壹人も進ミ候義ハ勿論鉄砲ニ而打  
 被殺候間一人も逃可申様無御座候ニ付左候ハ御城下之人數追々繰出し御城下



ハ手薄ニ相成可申其節大鳥其外山中之人數城下江押掛ケ候ニ申風聞爲致御領内一同嚴重ニ致候ハ、大和守殿暖國之御家來共壹人も恐れざるもの有之間敷於上も大和守殿惡政故之儀ニ付右之風聞御座候ハ、御領主之御本領御安堵ニ被仰付外有之間敷ニ申既ニ私の口つさみニ

近道ハ雪車引く比ニ有ると知れ北風勢負て寒さ見込ニ

と口つさみ申神田橋御屋敷の衆江も内々掛御目候御人も御座候白崎本間大泉坊杯ハ私近き身寄ニ申大和守殿へ往々格別御用之御取持可仕并御城引渡御馳走諸雜費不相掛様可仕ニ申取入リ候積リ種々相巧附入リ可申手段ニ而白崎にも大和守殿衆に手段ヲ以縁者共之宅ニ而落合候様取計引合せ右之手續故白崎歸國之節爲暇乞差遣候川越藩邸ニ伺候其後外ニも一人同様取計申候右ヲ御屋敷ニ而ハ御役所御届も無之大和守殿衆に暇乞ニ參リ候ハ不相濟儀杯ニ申是ハ右様之一大事出來之節身ニ替工風可致もの腹近親杯勿論家内子供ニも打明候義出來不申候既ニ

大石内藏助吉良の屋敷夜打之志ヲ發シ候節平岡方外姑女妻之父にも聊明し不申人々ニもらさるハ計事の第一ニ付木下藤吉今川に打向候節佐久間柴田老臣より手段尋御座候へ共敵方の廻しものも可有之も難計ニ申其時節ニ至リ不申候而ハ不申上ニ申ためしも御座候既に菅原氏方ニ大和守殿御領分ニハ不相成様可致萬々一彌御引移ニ相成候ハ、私御家來共相成難儀不掛ニ申遣し有之筈於御在所

御懸意之御人  
トハ駿州ニ懸  
フ意ナル人ナリ云

私ニ大和守殿衆心を通し候ニ申風聞大和守殿ヨリ參居候御察之ものヨリも追々川越並江戶見坂御屋敷にも相聞候間公儀にも御密ニ而御書上ケニ江戶表ニ於てハ全御所替之儀ニ付一身ニ引請種々手段致居候儀ニ付江戶之風聞ハ表向ハ庄内御百姓に御駕籠訴等之儀差留候へ共内實私手引致し騷立させ候ニ相違無之ニ申儀も申上ニ相成申候ニ付上ヨリ御下ケにて私御吟味被仰付右様迄計リ候ても大和守殿衆ハ最初ハ彼是之様子も相もれ候へ共直ニ心付何も後々ハ一向參リ候もの無之候右一件ニ付最初ヨリ私に御心添被下候御方ハ庄内家の御家來ニおゐて元より御懸意の御人ハ一人も無御座候儀ハ勿論何も御頼申上候ものも私外ハ有之間敷既ニ御留守居衆之内右之御方様ナリ駿州ニ御一人御同道申候へ共却て思召ニ不爲叶申上私困リ申候右一條之儀ニ付萬端相治リ候迄之義其時ニ申上候へ共御留守居衆之内大山庄大夫殿外櫻井順助殿斗にて其外一人も私明しカナ名詳兼々申上候御方様之外御しん用被成候御家來衆外無御座候然ルニ相止ミ本領安堵上ハ其御方様之御蔭故ニ江戶表御屋敷ハ勿論御在所表にても當時ハ其御方様之御蔭ニ申不殘御領内一同神佛之様ニ難有狩候様子ニハ私手段ヨリ外此手段致候もの無御座候然ルニ右之御方様此一様ハ元ニ相成誠ニ何ごも可申上様無御座候御身ニ成行駿州ノ桑名ニ禁御家其身とも最早御終リ被遊候ニ付是迄ハ私儀右之御方様御取計被成下候義相もれ厚御恩の御方様故御迷惑ヲ奉掛候而ハ不相濟如何様



升川村與兵衛  
ハ當時天狗連  
ニ屬ス故ニ云々

庄内家御家來中始御百姓町人共ニ至迄私骨折候○此間拾字許不分明彼是申候儀心外至極ニ有  
之候へ共右之御方様ニ奉對勘辨致し罷在候へ共最早右之御方様前文之通り御成  
行被遊候上ハ何も身ニ替へ候と申披仕候ニハ恐入可申筋無御座候ニ付然ル上ハ  
子孫之儀當暮來春迄之内ニ跡々之難儀ニ不相成様ニ取片付其上にてあつはれ申  
披仕先祖以來の家名父母名前私未代迄英名爲輝候積ニ御座候間與兵衛初メ一同  
何様之義申候共今少之内勘辨致給リ候様致度奉存候以上

八月十五日

佐藤々佐

一矢部様御義御三方様

○酒井松平牧野ノ三家ヲ云

御所替被蒙仰候節ハ御政事ハ御口出し御出來不爲

成候御役ニ付上之御取計ハ甚不宜餘リ御自分勝手ニ而國主大小名御旗本之御

氣請ニも被爲抱候義ニ御忠臣ニ候間既ニ御政事向之儀ニ付上ハ存寄被仰上候

與而此度御改易ニ而桑名公ハ御預ケニ相成御斷食ニ而終ニ去月下旬御死去被成

候程之御潔白之御方様右御所替者被仰付候義ハ往々迄上之御恥辱ニ被思召彼

是御心配被遊御在所之一條ニ付テハ萬端私ハ一々最初ヨリ御相談被遊其内結構

町奉行被仰付候ニ付猶又私ハ萬端御領主様之御爲第一ニ思召逸々御在所表ニ

於て一流騷立候義並御家老衆之御出府不被爲在百姓ヨリ御駕籠訴致し候もの御

差留も不被成却而御褒美等被下候與申儀ハ對公義重々御駕籠訴等致候者御屋敷

方ニ而御取扱方御存知無御座儀者御政事向ヲ不辨義ニ付差留可申與並其外大和

守殿ハ私手段を以附入大和守殿ヨリ御役家へ權門致候義並何れの手筋を以大和

守殿御所替御願被成候ニ申義其外庄内家ニ而ハ同様何方様ハ何々之權門致候ニ

申儀並其外大和守殿ヨリ御頼ヲ請候御方々之事ハ庄内家御家來ニ於ても不取留

風聞ニ而も殿様御家一大事之時節ニ付自分遣候可申談與私ハ被仰付候間右之

趣申談候而も表向之摺挨拶ニて却て私存寄リ爲困申候是者自分之爲ニ無御座主

家之御爲筋一命ニ替可取計筋ニ存候へ共銘々存寄ニ付餘リ甲斐なくと存候へ共

致方も○此間脱字右之趣ハ御領主様御家來衆ハ急度申談候義ニ御座候其中私別紙ニ

書取候通兩様之風聞書上ケ候節是又私書取御内沙汰ニて替一命候善惡とも有体

可申上所有有之有無急度御糺御座候

上之御政事ヲ惡迄そしり天下之重キ御役人様方之義ヲ急度御不埒筋迄於申上候

ハ私身分ヲ捨候共未代ニ英名ヲ相輝候儀ニ付公儀之義ハ勿論越前守様其外重

キ御役人様方之義聞及ひ候儀ハ不殘申上候處別紙之通り御褒美之沙汰ニて三日

御吟味之上四日私口書下書を以御人拂ニて御掛リヨリ讀爲聞四日目ニ矢部様

直ニ入上覽候由ニて私口書尤至極ニ付此上御糺被爲在候てハ上之御耻ニ相成候

迎御吟味ニ不及候ニ之御沙汰ニて私申上候義御取用越前殿御所替一條ニ付御評

議のそきニ相成三日御登城不被爲在其後ハ堀田備中守様御三方御評議ニて全

上之思召ニて御沙汰止メと相成候是ハ當御上ニハ矢部様ヨリ不被仰上候共不



宜。思。召。被。爲。入。候。御。儀。○將軍ニハ駿州ノ内申テ俟タズ既ニ己別。て。私。風。情。迄。奉。對。上。に。恐。入。リ。候。義。ヲ。申。上。候。程。之。義。思。召。御。沙。汰。止。メ。ニ。相。成。候。右。故。越。前。守。様。大。キ。ニ。矢。部。様。御。取。計。ニ。テ。表。向。御。面。皮。抱。世。上。之。御。そ。し。り。ヲ。御。請。被。成。候。事。心。外。ニ。思。召。候。故。矢。部。様。御。儀。前。文。之。通。リ。ニ。被。爲。成。候。上。最。早。私。ニ。お。ひ。て。ハ。遠。慮。可。致。所。ハ。勿。論。身。今。ニ。望。ミ。も。無。御。座。候。間。水。野。若。狭。守。方。御。暇。相。願。○此時藤佐大坂町奉行水野相濟次第矢部殿御儀ニ付殿様御願筋有之候間罷下リ剃髮いたし矢部殿初私先祖兩親菩提ヲ弔候所存ニ御座候是迄ハ矢部殿之御儀大切ニ存上何事も遠慮致居候白崎杯を彼是申候者大間違ひニて計事ヲ表向ニテ御領主之御役所江届又ハ人ニ相もらし候て行届可申儀ニハ無御座候餘リ馬鹿々々敷軍書ハ勿論世の中へ是迄萬端誠心ヲ込取扱候もの事ヲ甚おかしく存候

(天保十五年) 八月十四日

女ハ己レヲ悦フモノ、爲メニ容ツクリ士ハ己レヲ知ルモノ、爲メニ死スト藤佐深ク駿州ノ知遇ニ感激シ既ニ身ヲ以テ之レヲ許ルシ將ニ報ユル所アラントセシモ心事相乖キ已ニ隔世ノ人トナリ今ヤ其微衷ヲ效ス能ハサルノ悲境ニ遭遇セリ以テ終天ノ遺憾トナシ憂悶措カズ此際殉死以テ九泉ノ下ニ奉侍スルニアラサレ

バ薙髮身ヲ佛門ニ委ネ冥福ヲ祈ランコトヲ期セシモ更ニ見ル所アリテ英魂ヲ祭リ如在ノ義ヲ盡シ遺族ヲ扶助シ行く家名ヲ再興シ其萬一ニ酬ユルノ得策タルヲ覺リ先ツ其法諡ヲ桑名ヨリ求メ靈牌ヲ作り自宅ニ奉安シ且ツ俸祿ヲ分チ遺族ヲ扶助シツ、アリシガ天保十四年秋ニ至リ五右衛門ト相議リ刀工氷心子ニ囑シテ刀二口ヲ鍛ヘシメ一口ハ横刀作ノ美裝ヲ加ヘ曾テ轉封ニ係ル祈誓ノ報賽トシテ鳥海山大物忌神社ニ奉納シ一口ハ白鞘ニ藏メ故駿州ノ靈體トナシ之レヲ正一位居成大明神ト崇メ郷里ニ社殿ヲ建立シ之ヲ安置シ永ク其英靈ヲ慰メ併セテ恩遇ニ答ヘントシテ之レヲ藩邸ニ内願セシモ當時幕府ニ憚ル所アリテ社殿建立ノ志願ハ未タ聽サレサリキ斯クテ蕨岡ニ奉納ノ太刀ヲ下サントスルニ當リ會ク藤佐病歿ニアリテ家人ヲシテ之レヲ取扱ハシメシニ誤リテ駿州ノ異体ヲモ一函ニ裝置シ送致セラル刀銘左ノ如シ

(大物忌神社蕨岡口之宮末社稻荷神社寶物太刀銘小身ニアリ) 富士 永代正一位居成大明神御武運長久國家安全祈所



天保十四年八月 日

佐藤々佐信隆

願主 白崎五右衛門正

氷心子秀世精鍛之

御郡 中講中

(大物忌神社蕨岡口之宮寶物太刀銘上)

佐藤々佐信隆

奉出羽國一宮大物忌神社

願主

白崎五右衛門正

天保十四年八月吉日

氷心子秀世精鍛之

駿州ノ靈体ハ氷心子ガ渾身ノ精力ヲ鍾メ鍛鍊スルモノニ係リ同子ノ傑作ト稱セラレ寒光電閃夏尙冷カナルヲ覺ユ就中銘ニ所謂富士ノ文字ニハ藤佐無限ノ感慨ヲ寓セルモノニシテ本ト矢部氏ノ祖ハ今川義元ノ幕下ニ屬シ駿河國富士郡矢部村ヲ領セシニ因ミ祝シテ富士永代ト鑄ラシメ居成ハ稻荷ト稱呼相通シ即チ本領安堵ヲ意味スルモノナリ以テ藤佐ハ駿州トノ關係及ヒ駿州ノ本領安堵ニ於ケル消息ノ一斑ヲ窺フニ足ルヘキナリ

天保十五年大山御料ノ人民幕府ニ訴願スル所アリ事酒井家ニ係レリ藤佐爲メニ

幹旋シ頗ル功蹟アリ酒井侯之レヲ嘉ミシ帛ヲ賜フ藤佐又白崎ノ爲メニ舊功ヲ勤

シ稟請スル所アリ天保十五年ノ書 翰參照スヘシ弘化二年五右衛門ノ職ヲ復シ酒田町年寄月番ニ

補シ役料トシテ俸貳口ヲ賜ハル白崎氏 勤書

既ニシテ川北百姓ノ有志彼ノ天狗連ナルモノ願主トナリ藩主ノ助力ヲ仰キ本領安堵ヲ祝シ蕨岡ノ山内ニ稻荷社建立ノ舉アリ藤佐遙ニ之レヲ聞キ五右衛門ト相議リ駿州ノ靈体ヲ其相殿ニ安置シ且豫メ能書ヲシテ揮毫セシメタル「いなり大明神」ノ書幅ヲ生家ノ菩提所ナル落伏永泉寺ニ送附シ彼社ノ寶物トシテ奉納セシコトヲ交渉セラレシモ當時藤佐等ガ藩邸ノ覺エ愛タカリシニモ拘ハラズ執拗ノ輩尙之レニ慊然タラズ其要領ヲ得ザリシカバ太刀ハ大庄屋今野某ニ書軸ハ永泉寺ニ於テ姑ク保管スルコト、ナレリ

矢部家ノ斷絶スルヤ藤佐心力ヲ盡シテ遺族ヲ扶助シ再興ヲ企圖セシガ弘化二年正月特ニ恩命アリ駿州ノ養子鶴松ヲ錄シ二百石ヲ賜ヒ家名ヲ再興セラレ駿州ノ靈コ、ニ血食スルヲ得タリ藤田彪又長篇ヲ作り之レヲ祭り英靈ヲ慰ム其名流ニ



重ンゼラル、既ニ斯クノ如シ以テ平生ノ概ヲ推知スヘシ後チ岩瀨忠震肥後守 川路  
 聖謨ト共ニ幕末三傑ト稱セラレ名聲嘖々タルハ盖偶然ニアラサルナリ古人云フ  
 同明相照ラシ同氣相求ムト亦以テ藤佐ノ人トナリシヲモ想見スヘシ弘化三年正  
 月十五日矢部家類焼ニ罹リ資財悉ク烏有トナル藤佐藩邸ニ内願シ助力金ヲ遺ラ  
 シメ邸宅ヲ建築セシム同四年酒井侯ヨリ永ク矢部家ノ緩急ヲ見繼カンコトヲ幕  
 府ニ内願セラレタリ弘化四年十二月七日ノ書翰參照スヘシ 是レ侯ノ義ニ厚キノ然ラシムル所ナリト雖  
 斥抑亦藤佐與リテ大ニ力アリ

藤佐ノ知遇ニ感激シ爲メニ效ス所到レリ盡セリ而モ尙自ラ足レリトセズ曾テ其  
 靈体ヲ蕨岡稻荷社ノ相殿ニ安置センコトヲ交渉セシモ彼レ執拗ニシテ其要領ヲ  
 得サリシヲ以テ痛ク遺憾ナリトシ同年更ニ藩邸ニ請ヒ恩祿ニ易ヘ社殿建立ヲ内  
 願セラレシモ惜哉病ヲ以テ果サバリキ實ニ千秋ノ恨ト謂フヘシ後年大庄屋等ヨ  
 リ靈体ヲ蕨岡ニ奉納シタルハ藤佐五右衛門ノ遺志ヲ成セルモノニ庶幾シト雖斥  
 之レヲ駿州ノ神体トシテ稻荷社ノ相殿ニ奉祭セザルハ其素志ニアラザルナリ但

神號ノ壹軸ハ其際永泉寺ヨリ生家佐藤氏ニ納附セラレシモ既ニ奉納ノ時機ヲ逸  
 シ今尙其家ニ傳フ裱褙裝函頗ル意匠ヲ凝ラシ觀ル者ヲシテ坐口ニ當年ノ苦心ヲ  
 想像セシム

(升川佐藤氏文書)十一月三日出之貴翰並反物吸物椀とも十二月朔日五十嵐與左衛  
 門殿ヨリ御届被下儘ニ不殘落手仕候御細書之趣一々相談仕候甚寒之節久々御不快  
 之趣別テ藥用專一ニ奉存候將又私忤共一同無異罷在候間乍憚御放念被成下候様奉  
 存候且兼テ相願候織物澤山ニ御惠投被成下難有拜受仕候尙又和蘭陀金巾之羽織之  
 義被仰付委細承知仕候何れ穿鑿致入手次第今便も差上候心得ニ御座候へ共五日迄  
 ニ松山屋敷江差出不申候而ハ御□便も間ニ合申間敷候へ共是ハ長崎江申遣候ても  
 私下リ迄ニハ急度差上候様可仕候左様思召被下候  
 一太刀ハ拵迄出來御名前ハ私同様切付御名乗はかり殘置御紋所ハ太刀之縁之兩方  
 ニ尊名私と爲付是ハ過日申上候通御同所之茂兵衛ヨリ承リ被遣候御紋本通出來  
 仕候

一今一振り爲打置候是ハ丈ケ三尺ニテ極最上之出來故矢部殿神体ニ可致奉存銘ハ  
 過日申上候通正一位不盡永代居成典爲切御武運長久祈奉と爲切申候且願主ハ私  
 貴君兩名講中御郡中と爲切候へ共人氣難計御座候間一同とハ未タ爲切不申候へ



共其御地之御様子ハ如何ニ御座候哉難計御座候へ共御城内杯ニ而ハ最早此節ハ  
 矢部佐藤大明神と祭り候而も可然と申杯與之尊も御座候乍然疑多キ人氣殊ニま  
 けおしみ強き者共ニ付尊君杯之事ハ未タ如何噂仕居候哉も相知不申候へ共江戸  
 表御屋敷内ハ越前殿御退役之後ハ可致譯も無御座候ニ付有体私大山御氏申聞候  
 故多分相分リ候様子も有之尙又私尊君同心ニ而大和守殿之事謀ヲ以付ケ入縁者  
 山ノ内杯も無據譯がらニ付謀候迄も申達候間來春私罷下リ委曲申聞候上ハ慥成  
 證據之御座候ニ付彼是申者ハ決して有之間敷ニ奉存候此度私内々大山御氏心願  
 書差出候是ハ前書正一位居成何卒空地可然場所ニ而空地頂載外荒宮ニ而も引相  
 殿ニ本社拜殿建立致拜殿内之横額ハ肩ニ割書ニ而富士永代割書ヨリ一字下ケ是  
 ハ正一位假名ニ而○居城ト書クナ云フ都中一同中ヨリはたむしる簀ハいなト認メ候御吉相  
 ニ而御所替相止ミ候殊ニ矢部殿私儀御吟味之節も委敷申上候處百姓共一同一決  
 致し候ハ神妙之事ニ付是ハ全ク左衛門尉殿國政故ニ御感心ニ而諸家之手本ニも  
 可致事ニの御義ニ御座候ニ付此神妙も末世ニ相殘し矢部殿之御心切上江御忠義  
 之譯柄も是又相殘し申度元矢部殿ハ今川家の代名○大名ナリニ而駿州富士郡ニ而今ハ  
 田島百姓之屋敷ニ相成居候ニ付矢部村ニ申候夫故富士永代居成と認メ大刀江も  
 ほり付殿様御武運御長久且ハ御郡中一統之者江も冥加之爲志御座候者江ハ折も  
 あらバ相談爲致度且右矢部殿之御儀御疎略ニ御取扱被爲在候ハ世上之人御家

之義如何批判も可有之哉尙又其後とても乍恐御家ニ御異變御座候節ハ矢部殿御  
 同様御世話如何可有之哉私茂愚案仕内願致し大山御氏江申立候處是ハ上江  
 之御遠慮故容易ニ不相成候被申候是ハ理之當然ニ付□□して申立兼候へ共御  
 領分外ニ而一山之内杯○寺社ノ境内ナ云差支も有之間敷萬々一ニ駿州ノ異テ領内ニ祭リ幕御座候  
 節ハ私も矢部殿之御影ヲ以テ助命致居候ニ付殿様始御家來中之御迷惑ニハ掛不  
 奉候所存ニ御座候間罷下リ之上ニ而取計方も可有之ニ奉存候夫故私召出され候  
 而も○藤佐勤功ニ依リ酒井家ヨリ召出サレタルナ云フ當時ハ御家來名目差出不申大山御氏白崎公產物御仕立之御  
 相手ニ相成名々御手當頂戴矢部殿與方江女中ニ而も付置候冥加之爲御世話仕度  
 願上置候處是ハ御家ヨリ兎モ角モ極密之御世話も可被下候様子且白崎公私身分  
 ハ是又兎モ角ニ差合ニ申上先月廿九日大山御氏私方江態々御出仰被聞候間多分  
 内願之通相達可申ニ奉存候間是又荒増申上候下略

(天保十四年) 十二月三日 佐藤々佐

白崎五右衛門様  
 追啓是迄申上置候通此書面升川村之兩人江も一應爲見大泉坊様ニ御留置可相  
 成ハ御郡中可然人物へも御内々御吹聽可被成様ニ相願候上

截 斷



満足此事ニ候乍恐御休意可被下候舊臘ハ神田御屋敷ヨリ結構ニ被爲蒙仰御扶持方其外御家中之御目印等迄夫々無殘處被仰付候由誠以數年來之御本望無此上次第家名之面目此方親類共ニ至迄何斗恐悅不可有之重疊奉賀候如仰十ヶ年以前ニも斯ク被仰付候ハ拙家共ニ至迄何歎難有仕合之儀ニ奉察候乍去心之儘ニ不相成事も浮世之習ニ候只今ニ相成候共難有事ニ奉存候右御本望御立身ニ付先祖並御兩親之事被思召此度永泉寺相頼供養法事仕候様被仰越御親切之義御尤ニ奉存候母並親類共相願當八日於永泉寺ニ古法事仕則多藏多治兵衛惣三郎惣助惣左衛門山崎善四郎落伏金三郎皆々佛ノ相伴を相招キ賑々敷法事仕候猶又仰之通永泉寺へ布施物として金五百疋取替差上申候則永泉寺ヨリ右一禮書狀別紙差上申候先祖御兩親等異嚙々黄泉下ニ御悅可被遊候半ニ奉察候右左様思召可被下候一度々幸便被仰下候彼御方様○駿州ヲ云フ之冥加ニ正一位稻荷社當社安置場處又ハ荒社ニ而も見合御建立被遊度儀御尤之御事ニ奉存候幸多藏惣三郎等申合永泉寺境内地廣之事ニ候間極内々ニて申合候處永泉寺申聞候ニハ殿様御始一統之御爲筋ニ相成候御方ニ申候ハ拙寺ニ於而も境内安置之儀満足之事ニ被申候猶又永泉寺ヨリも右之段可申上候筈ニ候間御存生中早々御企可被爲遊候當春御下リ之御都合ニも可有御座御文面一統相悅奉待入候下略

(弘化元年) 正月十一日

佐藤次郎左衛門

同惣三郎

菅原多藏

並親類中

佐藤々佐様

追啓其御地ニ而ハ唯今以彼是申候哉先達多藏殿惣三郎より今暫文通も差扣候趣ニ申越候然ル處私儀結構被仰付其上厚御含も被爲在心願筋之儀も御聞届可被下旨之御内意ニ而猶又大山其外御預リ地一件之義も私儀大山庄大夫ニ同意致し取計候儀見込之通十分ニ行届既彼地之もの共ハ御承知之通りニ相成行乍併頭取共身分之儀ハ如何様ニ相成行可申哉難計其筋所々内々相伺候へ共未タ到着後御吟味無御座候ニ付相分不申候何卒重罪ニ不相成様致度當人共始大貫殿御留守宅元ハ共江も大々相談私内々申諭且ハ村上貫藏等江も爲骨折其地迄も差越大山のもの共ハ勿論其外壹萬千石之小前へも如斯成行不申候内重立候もの兩三人出府致大山之者共ニ同意無之趣御駕籠訴致候ハ取扱方も御座候趣爲掛合候へ共相方心得違にて壹萬八千石之方迎も格別之義ハ有之間敷候へ共諸入用ハ大壯之様子此節ニ至リ候而ハ大貫殿も御病氣ニハ乍申御子息江御代官も不被仰付嚙々御後悔之御儀ニ奉存候右一件



ニ付舊臘廿六日猶又私儀御上屋敷江被爲召御褒之御沙汰ニ而御挨拶御端物御目錄等御拜領被仰付大夫吉之亟殿江罷出御留守一同酒宴之上談判仕御表御斷ニて夜九時過歸宅仕候右之通りニ御座候間此上決而御家中様方始御郡中ニ而も彼此申候もの有之候へハ乍恐臺命ヲ非判致候儀ニ付決而右之儀ニ遠慮御心配ニ及び不申萬々一此上白崎御氏始野生親類一同縁者共へ不法申掛ケ候族茂御座候ハ、既ニ先達而之御吟味願○謬告者ヲ相手取テ訴願スルナク差出候程之儀ニ御座候間猶又此上とも同様之義ニ御座候間無御遠慮思召可被下候且先達ても白崎公ハ申上候通り私望之元綱ニ取付候義ニ付此間白崎公之御身分之義情々申立置候ニ付御安神可被下候乍御氣ノ毒阿部殿○孫大夫御義ハ未タ折合不申候右御風聽旁當時之御様子等申上候間白崎公より私實家迄御順達可被下候以上

○年號月日欠ク天保十四年大山騷動ノ翌年弘化元年ナルヘシ

閏五月五日着之御書面七月十八日着一々致披見候然ル處其御地ハ閏五月五日頃ヨリ大暑之趣並七月廿日神田橋御屋敷御留守居役場に用向有之罷出候處同十七日御用飛脚着有之御用狀之趣ニてハ誠ニ其御地ハ至極時侯宜敷近年稀なる豊作之趣猶又各様ヨリ御書狀之趣ニてハ次郎左衛門方始菅原家其外御一統御揃御安泰之趣大慶至極ニ奉存候略中私義兼而御所替之節ヨリ覺悟ニも有之且者矢部公御家御一命ニ被爲替私存念被仰上御沙汰止ニ相成候ニ付てハ御同人様御尊体正一位いなり大明

神江奉祭置候へ共只今以て御相殿之御社も不相叶今度歲岡ニ於て御郡中一統ニ而正一位居なり大明神江殿様御儀奉壽候ニ承知仕誠ニ御郡中一統之志私ニ於ても難有仕合右一件之節ヨリ莖旗之銘ニかなにていなり大明神ニ奉祝候義尤至極格別之御儀ニ奉存候ニ付絹地ニ右之御神號能筆を以認貫只今以私手元ニ有之先以大物忌神社江太刀奉納之節矢部公之御尊体も太刀ニ爲打私大病中故家來取扱同箱ニ入レ差下し候處右太刀之裏銘ニ御郡中江相談も無之白崎之名前爲切候逆一統憤リ有之亂立候趣是等ハ全之間違ニ而私同様手段を以大和守殿江付ケ入候義是又矢部公御證人ニ而其後追々相分リ白崎氏ハ如以前再勤私儀ハ格別之御儀ニ而格式ニ不差構御家老衆へ時々御目通御政事向其外之義無遠慮可申上御内意ニて國家之爲メニ晝夜致心配居リ何卒上寺之いなり宮之御社ニ矢部公之御尊体を御相殿ニ奉願度猶又私拵置候懸物ハ今度小瀧鯉吉江相頼永泉寺迄差下し可申候間乍禪方丈ヨリ御郡中江私志願之趣委敷御申論可相成ハ右いなり御社之願主江御渡被下候様致度尤不納得ニ候ハ、永泉寺ニ御預リ置被下度右之否被仰下次第私身分之進退致決着罷下リ候之有無も是ヨリ可申上候へ共江戶表之義並私身分之儀前文之次第御座候間迎杯ニ申候義吳々も御斷リ申上候先ハ兩度之御返事旁此段得御意如是ニ御座候委細ハ鯉吉ヨリ御承知可被下候 以上

七月廿二日

佐藤々佐



菅原 太 藏様

佐藤次郎左衛門様

惣三郎様

以手紙致啓上候追々春暖之砌御座候處彌御揃御安泰可被成珍重御儀奉存候中略矢部公御義私義付入御所替之節格別之思召を以厚被仰立被下御所替御沙汰休被仰出候義誠ニ奉<sub>リ</sub>上始御家來衆百姓町家迄御恩譯を蒙<sub>リ</sub>候而御安堵被爲在候然ルニ右之御厚配故水越公榊主甲斐公之巧を以御家を被爲亡其上御一命ハ桑名之涯ニ而御終<sub>リ</sub>御遺骸ハ御捨物ニ被爲成候へ共漸く昨年二百石ニ被召出今度之日<sub>○正月十五</sub>係<sub>レ</sub>大火ニ而丸燒ニ被爲成候ニ付御上ヨリ何卒御類焼御見舞ニ百金も被遣被下候様致度ハ存候へ共御留守居共江致相談金五十枚も被下度ニ致評議奉願漸々銀十枚被爲進候金ニ直し候へハ聊七兩位ニ付誠ニ恐入面皮無御座殊ニ矢部公之義兼々申進候通稻荷大明神江祭<sub>リ</sub>且ハ御法號を桑名より内々取寄位牌迄私方ニ而ハ御内々御法事等も仕候へ共矢部公にてハ未タ右之御いとなみもなし被爲進兼誠ニ無縁之様ニ當時被爲成候間何卒御内々私御在所に罷下<sub>リ</sub>如何様にも取計私に被下置候御扶持方を以永々守護仕候様被成下度與御内々奉願候へ共御間濟無御座候私ニ於て聊之御扶持方ハ元ヨリ望ハ無御座候へ共御扶持方ニ而も頂戴不致候てハ御所替被仰出候最初與兵衛始銘々心得違又ハ御家中之内にも不辨之御人も有之勘辨もなく私義大和守殿

致同意御所替之取計いたしむはん人杯に被申善惡明白ニ不相分候てハ其御地ニ而ハ治郎左衛門始御一統之御迷惑甚私ニ於ても乍殘念聊之御扶持方身晴しノ爲メニ頂戴仕奉對矢部公候てハ聊之御恩報しも不仕此儘罷在候てハ私世上之聞へハ勿論矢部公御跡御相續之御方様始御後室様其外之様へも面皮無御座再御目通も出來不仕上ニ而ハ右等之事も乍恐得と御承知ハ被爲在間敷候へ共世上之聞へも如何可有之又ハ當時ハ兎も角も往々忠義之御家來出來候ても萬々一右様之義被爲在候而も私杯之様ニ馬鹿々々敷身を捨候所存之者も有之間敷左候へハ上之御爲メニも相成間敷と奉存候ニ付私義も御承知之通當年七十貳才來年ハ七十三才ニ而兼々申進候通夫迄之壽命與相心得罷在候ニ付來年一年ハ何事も思止<sub>リ</sub>只々上之爲メニ身を捨候迄之御奉公仕其上不行届ニ候へ共私申立候義等御内々上之御聞ニ達し其上ニも相分不申候節ハ乍恐御親類様方迄も申立私一命を捨無キ跡ニ而も御取用ニ相成候而も上之御爲メハ勿論之義御家來一統御領分一統之爲メ末代ニ名を殘し申度兼々之覺悟ニ付 下略

(弘化三年)

三月十日

藤佐晚年意ヲ殖産ニ注キ庄内ノ爲メニ物産ヲ蕃殖シ邦家ヲ經濟シ且人才養成風



俗矯正ノ方法ヲ計畫シ之レヲ藩邸ノ有司ニ建議シ大ニ爲ス所アラントセシモ去  
 來老痾ニ罹リ其實行ヲ見ルニ至ラサリシ嘉永元年三月八日病篤シニ男然僕ニ顧  
 命シ曰フ殘喘惜ムニ足ラズ而モ未タ慈訓ニ酬フル能ハズ考妣ニ負クコト太ダシ  
 汝チ我レニ代リ先塋ヲ拜シ又先妣ニ謝セヨト言畢リテ瞑ス享年七十四、小日向  
 日輪寺ニ葬ル播紳士庶遠近來リ賻スルモノ無慮三百餘人、配田邊氏二男三女ア  
 リ長子泰然佐倉侯ニ仕ヘ別ニ一家ヲナシ然僕祀ヲ奉シ三女各適歸スル所アリ

(同上)八月十五日附之御尊書松山屋敷ヨリ十一月六日着一々拜讀仕候然ルニ明八  
 日松山様ヨリ御飛脚御差立之趣須田舜之助殿御申越ニ付過ル五日ニ方丈様始升川  
 村之書狀相認右之御屋敷ニ相願候へ共此度之御返書相認メ差上申候甚寒之節ニ  
 御座候へ共方丈様始益々御繁榮御寺役御勤被爲在菅原氏久々御不快之處ニ御座候  
 處最早御全快之趣其外治郎左衛門一門親類一同御障も無御座珍重御義奉存候略中  
 而當表一門一統相替候義無御座佐倉表悻義も當春加増然僕儀ハ御家始外御大名様  
 共都合十八人扶持程之株ニ相成行々者百石位ハ大丈夫藥研堀之孫聲も當時水戸家  
 より十八扶持ニ而御紋服頂戴外様家より五人扶持都合十五人扶持ニ相成候泰然次  
 男ハ公儀之御醫師百石之株ニテ外様御扶持方十五人扶持之若殿様ニ相成其外目

出度事而已御座候へ共私儀ハ昨年以來之不快追々増長當春より別而不出來ニ而先  
 月末當月初兩三日以前迄ハ極大病之處漸々相仕上當月五日松山様須田御氏より上  
 寺大泉坊江之紙面一統永泉寺大方丈江次郎左衛門先祖代々兩親江種々結構御吹聽  
 御供養相願申度今度金五百疋入之手紙差出置候間着次第宜敷相願申候且先達而相  
 願置候いなり一軸ハ種々御厚配被成下御境内之丹山權現之御相殿敷又ハ次郎左衛  
 門空地内杯ハ同人よりも申越且ハ須藤記内よりも御城下之御糶藏屋敷内天神川原  
 杯江も建立之御假屋出來有之候趣ニハ御座候へ共先年私病中間違ニ而御神体州ノ  
異体之太刀相送置候處御百姓共亂立候趣ニ御座候へハ其後上寺へ殿様いなり之御  
 宮御建立之趣ニ付私儀ハ御郡中にて彼是申候逆何も違念無御座右壹軸ハ上寺江御  
 出來之御宮江相納可申敷と奉存候間相願候へ共其節も彼此御座候趣ニ付私ニ於て  
 ハ前文之通須藤氏よりも申越大方丈様治郎左衛門よりも申越候上ハ如何様ニも可  
 相成候へ共御所替之節御郡中之志ハ殿様いなり之御願ハ神妙至極於御奉行所も  
 厚御賞美被爲在御政事之儀不相分者共ニ付徒黨強訴町散等之義ハ三ヶ條之重キ御  
 法度猶又御領主ニ於て取おさへ不行届御府内迄差出候義御在所御不取締リ且ハ仁  
 性院様○深照院ノ假字ニテ酒井候ノ母堂ナリより御褒美等被下候杯與申義是又不容易御儀ニ而御家名之  
 御外聞ニ付是ハ彼之御方様○駿州ヲ云フ御打消御郡代石川氏より之褒美ハ是ハ下之路用之  
 たすけ與申紛關茂大夫徒党之義ヲ大壯ニ申立候處御奉行所にて甚御困之趣私江御



尋ニ付此頭取ハ天明度之飢饉之節ノ如ク湯殿山之錢さらい共諸國之惡者共集居御所替ニ付御郡中之騷ニ附入致頭取不知之者共御府内江差出候ニ私申上候間頭取不出無難ニ相濟分柄ハ致相違候へ共大山領之徒党強訴も何れも徒黨強訴之罪ハ同様ニ付既ニ大山表一條致牢死候ニ付左も無御座候ハゞ所ニ於て獄門ニ可相成處御家一條ハ今度御制し之上大勢出府御座候へバ公儀之御上ニ而不殘被召捕既ニ御家江も御障り可爲被在候彼御方様御取扱ニ而御所替御沙汰止と被仰出候乍併大和守殿ニ而大徳寺之御墓をあばき御引取被成候様致度ニ達而御願候ハゞ其節ハ御家之御家來よりも科人之墓所外あばき候義世上ニ無御座候儀ニ付キ一命ニかけ御願ハ勿論侍之專忠義之義ニ付御城を枕ニ討死之覺悟も勝利ハ無御座候其尤至極之義且私義ハ中々願候而も決御取上無御座候處天運ニ叶上意ニ付越前守様より矢部公江私父子共吟味被仰付私一命ニ替申立候義一々御直ニ口上ニ相成候間御取上覽ニ供ヘタルヲ云フ上掲八月十四日書翰参照スヘシ御沙汰止と被仰出候儀ニ御座候其節一命を捨候へバ乍憚天下ニ稀成義ニ而御所替御沙汰止御當家始而之御儀故天晴忠臣之美名末世ニ相殘候程之義萬端彼之御方様御一命ニ掛ケ御取計被遊候義故私義ハ矢部様御逝去之後じん死ナリ死ニも可致處御跡之御墓所御家内様方御浪々之御難義を何卒御見立申上度不<sub>ナリ</sub>惜一命を今日迄も打永らへ一昨年御跡結構相立昨年御普請も御世話も仕當年公儀江内々御家より御伺之上矢部様御義御間柄<sub>親戚御同様之御通路相濟此上矢部様</sub>

御跡御取續之御世話も奉願上右正一位之御神体ハ私より兼々御家老衆迄申立置候間新規致建立末代迄御宮守之相續迄私被下置候様御恩祿ニ替へ願上置候儀ニ御座候間最早此節ニ至リ候而ハ大方丈之御心添ニ而も大庄屋衆杯江相頼御鎮座之義取計候所存ハ決而無御座候間今暫御見合可被下候尤御所替之節之義ハ御郡中も私儀も殿様御所替之義一筋ニ殘念至極奉存候故之義ニハ相違無御座候へ共御郡中始御家中杯ニも公義之御法を不相辯重キ御法度を奉背候てハ却て御家之御不爲と相成候義を後悔先ニ不立之一心之心得違ひ之願ニ不心付私義ハ右之所を飽迄致心配徒党等差留一身ニ引受取計候所存之儀を御家來始御郡中ニ而も一向不心付御家來中御政道筋ハ勿論御吟味之儀一向御不案内ニ付何方も諸家孫ハ御同様とハ乍申御家ハ別て之義ニ付片言を以忠臣之白崎杯を非道之取計有私杯も事之外惡人ニ被取囉候へ共天上之覽之明成處ニて御家而已ニ不限當時私子孫之儀前文之通結構諸家様御用白崎杯茂歸役被仰付當時勢ひも彌増結構此上私義も申立<sub>白崎ノ勤功ヲ酒井家ニ申立ルノ義</sub>今一應同人義立派ニ見立候積リニ御座候

且私義是迄數十年來心掛候最上川堀割酒田湊取立候義ハ勿論御國益產物始諸國交易并御郡中町々共貧富平均大家貧を唯喰□今之如ニて結構之田畑武家町家長袖之所持ニ相成居候惡例も追々往古江立もどり御百姓ハ農業專一農間之稼職人ハ夫々□工致出精町家ハ運送交易諸國相働結構之御在所とハ乍申是迄之心得方ハ田畑澤



山ニ付食物ニ事足候へ共何故歟金銀不足之土地ニ相心得候段是ハ大間違にて人家近邊結構之土地も不相變雜木松林等ニいたし置四木並桐等植付候義も不心付結構之□□地も悪水ぬき又ハ養水等手段無之且ハ草苧野杯ニ申肥又馬飼料ニ差支候杯ニ申入合之地所杯ハ申争出來是又相開不申既ニ松山様杯ハ左澤領追々相開三草四木外からむしにて大壯之金納出來結構之御義今度銀山迄相始候由ニ御座候へ共是ハ種々分柄御座候物ニ付何共善惡當時相分リ申間敷候猶又私儀近年種々取調差上置候國益筋之義ハ大壯之箇條ニ付致分略候へ共紙類反物其外三草四木桐等取立木材ハ世上之入用品々可相成丈爲仕出藥種製施藥並調合藥等殊ニ御在所表鹽濱無御座候ニ付是を取立酒造増造外ニ石を燒立石灰並肥灰も出來田畑養ニも差支無御座様致工夫置候間來年ハ彌々松山様ヨリ始多分御取掛之積ニ御座候是又數多之分柄故致文略候

一天保度之飢饉之節御家之御所替之御模様無急度御尊御座候分ハ大殿様御儀大壯ニ御召遣御抱置被遊酒田御城下ヨリ酒田御用船にて大勢之御女中立派ニ作リ立本問家江被召連同人方ニて大壯花美之御催ニて同家江被爲入候儀天保九年九月二日忠器候本問家別荘ニ臨マレシコトナ云ヘルナラシ數度御座候趣御供之女中共歸府之上銘々宿下之節親類懇意之者江大壯ニ取繕致尊候ニ付右之御評判ニて庄内公之御おごり御時節柄余リ世の中を不憚御儀之御内沙汰ニ相成候由之處矢部公御儀女中ハ何方様ニても多少御抱置

壹兩人内ニて不相濟不埒之義有之家事向不取締之評判御座候ハ壹人にて不濟莊内家ニてハ御高も被爲在大勢女中御座候ても女中之義ヨリ事起リ家事不取締之評判も無御座候實母之御孝道ハ是又花美ニも相聞候へ共御母堂之事ニ御座候間不苦大勢小勢女中御召抱者五十歩百歩之論ニて壹人御役人様方之内ニも以外不評判之方も有之庄内家之義ハ格別惡敷風聞も無御座候御打消被成候へ共大山領之義永錢上納ニ被成下置候義飢饉之事ニ付米相場永錢之上納高照合見候へハ時之江戸相場ニ大違ニ相成候ニ付其節ヨリ大山領之義越前守様目を被付候由之處御内々私ハ御尊御座候ニ付服部新藏殿御郡代役所へ御詰之節ニ付御同人ハ可申上ニ奉存候へ共高慢顔ニて御りきみ強私杯をバ矢張百姓取扱にて中々御取上ケ之御様子にも無御座候間乍殘念申上兼候且御所替御沙汰之後も私義兩三年之間ハ逆謀人之様ニ御尊御座候ニ付心附候義も乍殘念差扣罷在候御所替御沙汰止ニ相成候節も拾萬兩之上納爲冥加被仰立差當内貳萬兩御上金殘八千兩ハ拾ケ年之間年々八千兩分之間御米御廻相成候へハ貳惣倍も御廻米之取計も出來候間御在所江戶之相場違も大壯之事にて八千兩ハ米數ニてハ格別之義ニても有之間敷違作難破船之分ハ御年延ニも相成拾萬兩之御上金ハ御大名之内庄内家ハ一番鍵ニ付格別之御賞美も可有之且又追々國主大名之上納金之手本ニ相成候義ニ付御内々御願筋ハ勿論萬端十分ニ致出來六萬兩相掛候印幡沼之御



手傳向柳原御中屋敷勤仕堀之御下屋敷差上候義ニも及不申御中屋敷御取もとし御手入等大壯之義ニて今度勤仕堀之替御下屋敷御求被遊此御引料七千兩余荒屋敷ニ付七八百兩ハ相掛リ可申外様御屋敷貳千五百坪相加ハリ居右御取入も千兩余も相掛仕上ケ候迄ハ貳千兩も相掛リ可申左候へバ彼是眼前是迄七萬兩之御散財ニて其上御儉約等被仰出人望ニも相障リ無據御儀トハ乍申來年品ニ寄御儉約被爲立候ても五萬兩位之御臨時も相見有之候間當春七八兩上方表ヨリ御繰入之上去年以來大夫服部公御郡代坂部氏も内々申上御米圍置之義相進メ置候處是迄之御相場ハ平年之倍増ニ御座候へ共來年御臨時百石三兩之御高役之外若し多分之御用金にても被仰出候ハ、御郡中にて難義之儀可申上ニ奉存候間乍恐思召違之御取計種々申上候へとも尤至極ニ御家老衆始被仰聞候へ共 御上迄ハ通り申間敷扱又扱上納杯之御利益之義聊之義ニハ御座候へ共初年之御上納之節半分許外御買上ケ不相成御在所表ニて御迷惑之趣御留守居大山御氏御尊ニ付私儀親類共ニ申談し取計貫其後ハ別て六ヶ敷候處私不快ニ付然僕ハ爲取扱來年之御上納之處も尾張様ニ上納爭ニ相成候處是亦然僕取扱此度も 御家にて十分之御勝利ニ相成候

一大山領並尾羽根澤料拾壹萬石余共御家預ニいたし最上川堀割酒田湊諸國之入津之船迄差支無御座儀仕法書上ケ置未々相談中ニハ御座候へ共迎も尾羽根澤料ハ

願出候力も有之間敷品ニ寄最上川酒田湊之義も貳段ニ相成大山領斗不相替來年ヨリ五ヶ年之御預位相願候積リニ相見候私病氣故御尋旁大夫甚三郎様ヨリも雁杯爲持御役人被遣猶又御留守居大山氏ヨリも交着附之酒壹本其外燒酎御上リ之分三十枚不映尋旁申立置候ト書面之間合旁御出有之候

御在所表御政事向旁御領分之御法是迄之通ニテハ余不取締ニ付人ハ萬物之靈ニて民之教育方ヨリ人民相増（戸口繁殖ノ義）國豊之仕法荒増相認メ第一不輕墮胎之罪ニ捨子制シ候ニ付親ノ一命も取リ候間違國產取立遊民無御座様國政嚴重相立諸國運送交易いたし御領分ニテ諸式事足他國之品入津無御座候ても間ニ合御在所之產物諸國ニ差出御國益ニ相成候義迄大凡書出候御家老衆ハ先皆々様荒増御承知之様ニも被爲在候へ共何分御在所表之義而已外諸國之義一向御存知不被爲在公邊之義ハ萬端御不案内ニ付一朝一夕ニ御手出來兼候間緩々工夫致し吳候様ニ之御内沙汰ニ付誠ニ殘念至極私義ハ七十三才ニテ今年限之命數殊ニ此節迎も大病ニ付此書面も遺言同様跡々迄相殘なき跡にても御尊之爲ニ奉存候大壯之事故致文略候先ハ此段申上度乍併升川村次郎左衛門之惣領ニテ幼年之内ヨリ大馬鹿者之行末先ハ前言之通相成行候者先祖親之申分ケ相成不孝不義之耻も相雪キ候儀ニ奉存候書取を皆々様へ申上候余ハ存命ニ候ハ、追々之行成可申上候 以上

(弘化四年) 未ノ十二月七日

佐藤々佐



菅原多藏様

佐藤次郎右衛門様

惣三郎様

以飛札致啓上候然者祖父藤佐儀久々病氣之處養生不相叶當月八日死去仕候然處當春ハ是非々々御在所表の御下之上御一門御一統様にも御面會可被成御心願之處御行届不爲在扱々私ニ於ても残念至極ニ奉存候右ニ付兼御下しニ相成候いなり一軸之義ハ大泉御坊永泉寺大方丈ニ御相談之上可然御取計被下候様御遺言ニ御座候間別て此一條私ニおゐて御頼申上候扱又此三幅對之義も貴所様の相送候様被仰置候御落手可被下候且舊冬永泉寺大方丈ヨリ御紙面ニハ兼て御注文御寄附有之候けいす○木魚等出來之御禮申來候ニ付相違も有之間敷候へ共何も遠路之事故猶又此段も貴所様の御問合申上候右之外萬々申上度義御座候へ共殊之外取込候ニ付文略仕候扱又父然僕義祖父様御余光を以神田橋御屋敷の罷出追々結構御扶持等頂戴被仰付候ニ付てハ猶又此上奉願上御在所表の御墓參旁御一門御一統御面會ニ罷下候様御遺言有之候間何レ壹兩年之内ニハ御屋敷御家來ニて罷下り候心得ニ御座候ニ付私ヨリ右之趣申上吳候様申聞候先ハ用事而已余ハ重便萬々可申上御一門御一統にも御傳聲被下度取込早々如是ニ御座候以上

(嘉永元年) 三月十三日

佐藤桃太郎

佐藤次郎左衛門様

参照

(林若吉筆記)

祖母○泰然ノ長女 林洞海ノ妻

在世の日藤佐翁の忌日ニハ此畫像○畫像ノ事然僕を傳ニ詳カナリ

床の間に懸け能代の膳に酒を足付の小コップに盛りて供せり翁ハ酒家且能代膳を好みコップにて飲用せられしを以てなり又鯪イワシを好み給ひしとぞ膳部に供せしを覺ゆ

藤佐翁ハ出府後田邊を名乗られし由又小生家の長持ニ和田林と並列しありしニ付先年林董叔○林男 爵ナ云迄問合申候處左之回答有之候

和田姓の義ハ拙者幼少の頃兩國藥研堀林家の門柱に右に**和田林**の二札を

かけ左ニ**田邊**の札をかけありしを覺え候其後とりはつし**林洞海**の札に改り

申候當時母泰然翁の夫人に其由を尋ね候處元來祖父藤佐翁ハ訴訟の都合ありて稻毛村

の田邊方へ養子となられたるに依り田邊を名のられたれ共江戸常住と定まり

稻毛ハ復田邊の家相續の必用ありしに付自身ハ祖母ちのの里方の姓をなのら

れ二男然僕に家人株を買與へて本姓佐藤を名のられたる由故に先考泰然君ハ

佐倉へ往かるゝ迄和田氏を名のり御祖父君洞も其始めハ依然和田氏を名の

られたれど後ニ泰然君の意にて本姓小林の小を除き林姓に改められし由尤も

右ハ拙者八九歳位の時聞きたる儘なる故うろおほえニ候間確實とハ難申松本

御叔父ハ定めて精處御承知なるへし云々



又泰然翁と然僕との間ハあまりしたしからさりし由藤佐翁ハ然僕の方を愛し給ひ然僕ニハ御家人の株を求め佐藤姓を名のらしめ常に同家ニ住して没し給ひしなり隨て其祭祀ハ然僕方にて執行し來りしなれども系統表の示すか如く同家ハ凋落せしを以て日輪寺の墳墓ハ如何の情況にや恐らく無縁同様ならんかと存候山村翁○泰然長子在世の時ハ時々參詣致されしを覚え居申候小生ハ未だ參りたること無御座候以上御參考迄申上候

(明治廿六年)  
癸卯五月

(佐藤進宛)

若吉拜

附記

佐藤泰然 名ハ信圭、小右衛門ト稱ス○松本順氏筆記藤佐ノ長子ナリ初メ幕府ノ小吏タリ年三十二シテ之レヲ辭シ長崎ニ遊ヒ蘭人某ニ就キ洋學醫術ヲ修メ其蘊奧ヲ極メ歸府ノ後チ兩國ニ開業シ大ニ行ハレ當時ノ大家ト稱セラル人名辭書交道頗ル廣ク皆一世ノ名流ニシテ高野長英伊藤玄朴トハ最モ親密ナリキ名聲嘖々遠邇ニ鳴リ就テ教ヲ受クルモノ甚タ多ク山口舜海林洞海伊東南洋三宅良齋等ノ俊髦ハ皆其門

ヨリ出ヅル所ナリ人名辭書總州佐倉ノ藩醫ニ西淳甫鏞水仙安アリ泰然ノ器ヲ重ンジ推舉シテ侍醫タラシム藩主堀田備中守正睦ハ當代ノ明君ニシテ銳意治ヲ圖リ松崎慊堂ヲ顧問トシテ藩學成徳書院ヲ創立シ諸士ノ子弟ニ文武ノ學術ヲ講習セシム泰然夙ニ宇内ノ大勢ヲ觀察シ之レニ英學ノ一科ヲ加ヘ以テ人材ヲ養成センコトヲ建議シ採用セララル是時ニ當リ歐米諸國交々來リテ通信貿易ヲ要求セシモ幕府ノ有司海外ノ事情ニ通セズ毎ニ之レガ處置ニ苦メリ安政二年御老中阿部伊勢守正弘、堀田氏ノ才幹アリテ且其藩士ニ洋學ヲ修メ彼ノ事情ニ精通スルモノ多カリシヲ以テ薦メテ幕政ニ參預シ專ラ外國事務ヲ領シ難局ニ折衝シ假條約ヲ締結セシム當時物論囂々タリシモ我カ文運ノ煥發ト維新ノ鴻業トハ實ニ之ニ胚胎スルモノニシテ泰然ノ國家ニ對スル功績モ亦偉ナリト謂フヘシ明治五年四月日歿ス享年六十九、三男四女アリ子男ハ出テ、他家ヲ相續セシム更ニ門人山口舜海ヲ以テ嗣子トナシ箕裘ヲ繼カシム舜海後チ尙中ト改メ大學大博士タリ岩佐純佐々木東洋渡部洪基長谷川泰ノ名士ハ皆其門下ニ屬セリ尙中子男アリシモ亦



師父泰然ニ倣ヒ各々別ニ生業ニ就カシメ姪進今ノ醫學博士ヲ養ヒ之レニ長女ヲ配シ更ニ門人岡本大道ヲ養嗣子トナシ佐藤舜海ト稱セシム人名辭書參照スヘシ

(大平洋第十二號卷劍隱士封建のおもかけ) 堀田正睦公も實ニ幕末の名君の一人である……成徳書院……是ハ有名の松崎慊堂先生を顧問として建てられたのである……此成徳書院ハ田中縫殿が總裁兼教授で弟の田中從吾軒も教授であつたと思ふ西村茂樹依田百川などいふ人ハ都講であつた英學科を置たのハ佐藤泰然といふ者の議を用ゐられたのだ佐藤泰然ハ出羽の人で○藤佐出府志を立て江戸ニ出てそれから長崎に行つて西洋人に就て蘭學や醫學を研究して江戸に歸つてからハ高野長英伊東玄朴など相親しかつた尤も高野ニハ蘭學を教ハつたといふ事である此佐藤を勸めて佐倉藩士にしたのハ藩の醫者で西淳甫鍋木仙安といふ人達である此佐藤ハ即ち順天堂の創立者であつて醫者の出來た斗でなく兼て君公の政治上の顧問であつた勿論西洋の事情も知つて居るし門人にも洋學者が追々出來た老中阿部伊勢守が堀田侯を勸めて老中となし外國御用掛にしたのハ堀田の家來ニハ西洋通の人が多から當時困難な外交の衝ニ當らせるハ此人ニ限るからといふのであつた泰然ハ頗る見識のあつた人で立派な男子が澤山ありながら實子ハ外養子ニ遣つて門人中から舜海を擇んで家を繼がせた此舜海が乃ち尚中大博士で岩佐純佐々木東洋長谷川泰渡邊洪基などハ

皆尙中の門下生だ泰然の實子ニハ次男の松本順軍醫末子の林董特命全權公使男爵などが最有名だ……

佐藤然僕 名ハ信庸喜惣次ト稱ス藤佐ノ二男ナリ父爲メニ御家人ノ跡式ヲ購ヒ之レニ與ヘ一家ヲナサシム後子更ニ醫ヲ學ヒ然僕ト稱シ於玉ヶ池ニ開業シ大ニ行ハレ終ニ酒井侯藩邸ノ表御醫師トナリ俸十口ヲ賜ハル藤佐ノ書翰ニ據ル但原文省略常ニ乃父ノ遺訓ヲ俸シ莊内ニ下リ先塋ヲ拜セントセシモ國家多事ニ際シ其志ヲ達スル能ハサリシカバ畫伯菊池容齋ニ囑シ乃父ノ肖像ヲ描カシメ之レニ小傳ト顧命トヲ題シ以テ其意ヲ效セリ畫幅林家ニ傳ハリシヲ明治十三年松本順氏藤佐ノ孫爲メニ之レヲ謄寫シ升川ノ生家ニ贈リ自ラ庄内ニ來リ先塋ヲ拜シ法會ヲ修メ乃祖ノ志ヲ成セリ

(茶農漫錄) 佐藤々佐翁履歷

先考諱信隆稱藤佐姓佐藤氏籍羽州庄内遊佐郷升川村以系出于三郎兵衛尉諱嗣信世免租稅焉先考幼孤性瑰瑋個儻不屑耕耘年未弱冠祖妣菅原氏察其異器授之金諭曰汝宜致力於國事以顯父祖此金所以爲資也先考感歡奉命乃來東都難辛累歲凡事占機



先百折不撓、果敢之氣、剛正之節、老而益壯、適天保年間任本藩緊切重事、焦思殫慮、遂達志願、赫著功烈、公賞賜金帛及廩餼、以終其身焉、時祖妣既沒、墓木拱、所謂樹欲靜而風不停者、深以為痛、憾矣、嘉永元年戊申三月八日、先考疾革、願命信庸曰、殘喘固不足惜、但未能大酬慈訓、罪負曷極、汝為我拜先塋、又代謝先妣矣、言終而瞑、享年七十有四、搢紳士庶遠通來賻者、凡三百余人、葬諸江戶小日向日輪寺之邱焉、配田邊氏生二男三女、長信圭、稱泰然、為佐倉侯侍醫、次則不肖信庸、初事大朝、後致仕、逃于醫、子信繼、稱桃太郎、襲其祿、信庸又繼先志、今食藩俸、三女各得所歸、及今內外孫子、振繩繁衍、及四十人、蓋皆先考之餘慶也、信庸嘗哀々罔極之德、謹令寫其真、今恭記其平生概略、永致事生之意云

不肖男信庸泣血頓首謹題

洞海曰、藤佐翁ハ予カ妻ノ祖父ナリ……肖照ハ菊池容齊ノ筆ニシテ方今ノ如キ寫真ノ影像ニ非ズト雖トモ其容貌真ニ翁ヲ見ルカ如シ容齋ノ寫真ニ巧ナルハ實ニ絶世ノ一人トイフヘシ今其彷彿ヲ寫シテ此書中ニサシハサむ

(林若吉氏筆記) 翁の肖照に二本あり一ハ林董氏○泰然ノ三男今特命全權公使男爵タリ一ハ予カ家ニ藏す祖父洞海役後山村惣三郎○泰然ヲ介シテ佐藤家ニ納む

安政五年九月十八日没ス二代桃太郎ノ書翰ニ據ル享年詳カナラス二男一女アリ長男桃太郎嗣

ク

桃太郎名ハ信繼、初メ藤太郎ト稱ス昇平變ニ學ヒ歲甫メテ十四ニシテ學問出精

ノ故ヲ以テ賞賜ニ與カリ上掲天保十一年正月六日藤佐ノ書翰ニ據ル安政二年高七十表五人扶持御徒オカチニ召

出サレ後チ百五十表十人扶持ニ加増シ永々旗下ニ命セラ桃太郎ノ書翰ニ據ル没年詳カナ

ラス長男喜惣司跡式ヲ襲ヒ桃太郎ト改メ役料五人扶持ヲ賜ハリ陸軍奉行並支配

評定所書物御用出役ニ補セラ桃太郎ノ書翰人トナリ氣節アリ幕府解体ノ際同志ト所

々ニ轉戦シ逃レテ庄内ニ來リ田川郡八ツ興屋村農半三郎ノ許ニ投セシガ明治二

年酒田民政局長官西山周碩ト順逆シ激論シ抗辯屈セス為メニ松山藩ニ幽セラレ

同年四月廿一日同志二名ト共ニ酒田ニ於テ斬ラル時二年十九年齡松本氏ノ筆記ニ據ル妙法寺

ニ葬ル

参照

佐藤氏系統略

林若吉氏編輯刊行ノ「藤のゆかり」ヲ主トシ旁ラ上掲ノ文書ヲ參照シ之レチ作ル

林洞海室

陸軍々醫監

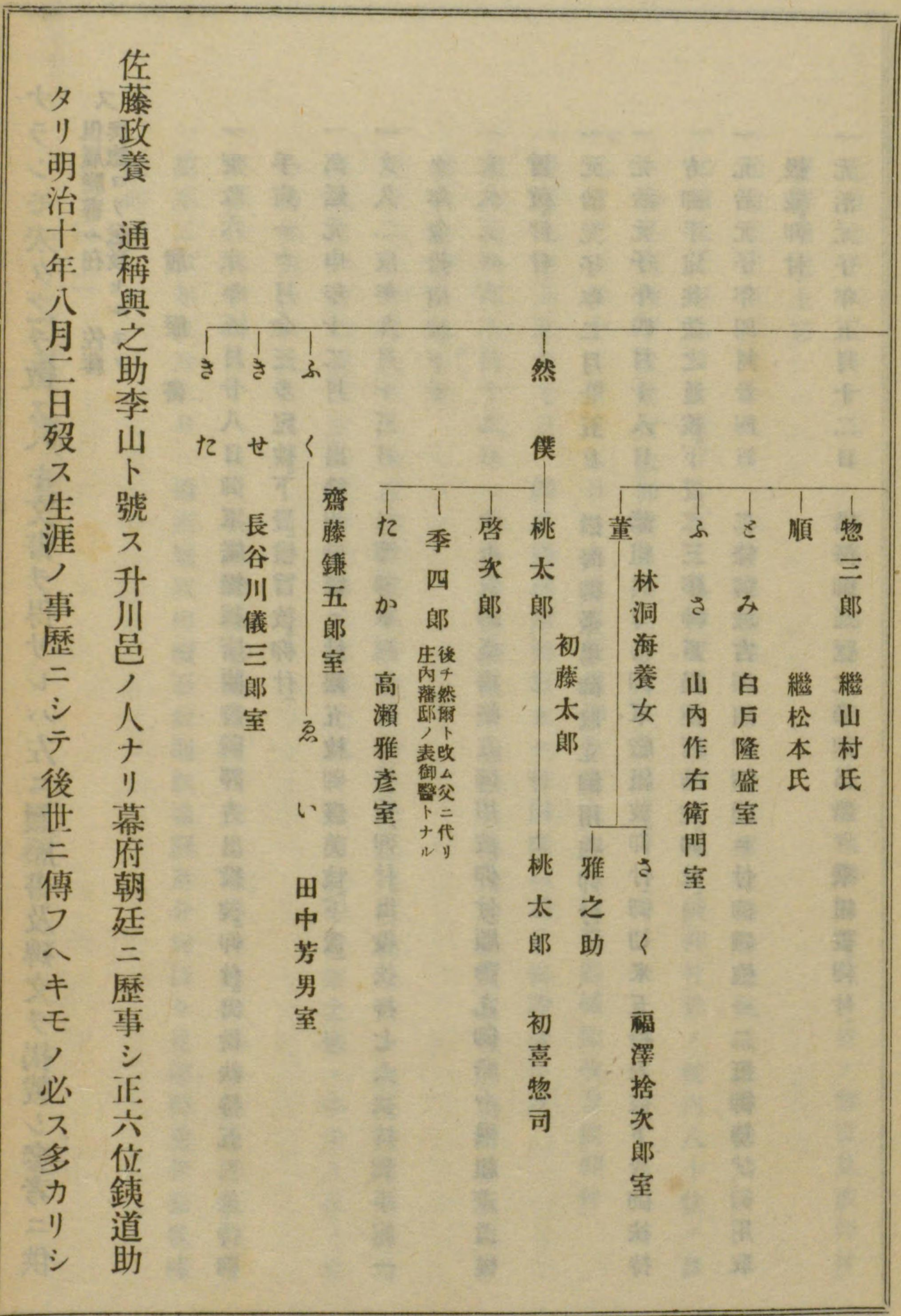
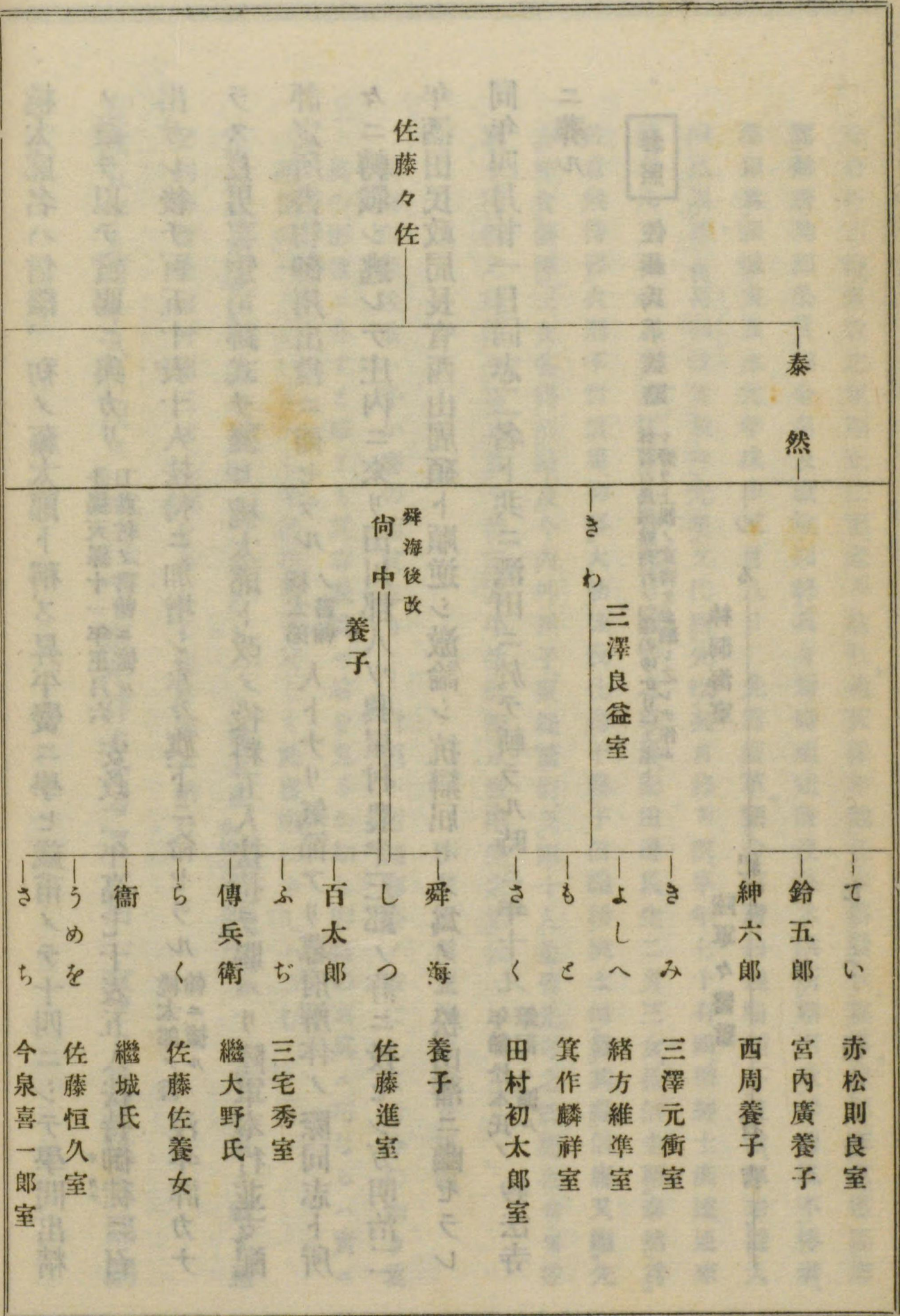
紀

若吉

彦二郎

榎本武揚室







ナランモ未タ之ヲ徴スヘキ文書ヲ得サレバ左ニ履歷書及碑文ヲ掲載シ參考ニ供ス但履歷書ハ在 佐藤 與惣ヨリ送致セルモノ

履歷書

- 一 安政六未年五月廿八日御軍艦操練所蘭書翻譯方出役被仰付出役扶持五人扶持御手宛一ヶ月金三步宛被下置候旨被仰付
- 一 萬延元申年十二月 出精相勤候ニ付銀五枚御褒美被下置
- 一 文久二戌年九月十三日 二等御軍艦出役替被仰付出役扶持七人扶持御手宛一ヶ年金拾兩被下置
- 一 文久三年亥二月十九日 大坂表御臺場築立御用被仰付順動丸御船乗組差遣候旨被仰付
- 一 元治元子年二月廿五日 攝海御臺場御取立御用被仰付
- 一 元治元子年四月十八日 諸組與力格御軍艦組被仰付御切米五拾表被下置御扶持方御手宛共並之通被下置二三年神戸操練所詰被仰付
- 一 元治元子年四月廿四日 二條御城古銅類御鑄換ニ付御鐵炮一二挺御鑄試御用取扱被仰付
- 一 元治元子年五月十二日 攝海御巡覽之節御召船乗組被仰付

一元治元子年五月十五日 御座之間格ヲ以大坂御城御白書院ニ於テ御目見被仰付蒙御懇之上意

一元治元子年六月廿八日 非常之節御城外大砲指揮役相心得候様被仰付

一元治元子年八月十九日 富士見御寶藏番格御軍艦組被仰付勤メ候内八十俵ノ高ニ御足高被下置候旨被仰付

一元治元子年十二月十五日 大坂表新規御製造大砲并附屬器械類改方被仰付

一慶應元年丑五月七日 神戸操練所御廢止ニ付同處詰差免候段被申渡

一慶應元丑年五月十二日 攝海砲臺築造大砲鑄造御用者は迄通相心得附在坂可致様被申渡

一慶應二寅四月九日 大坂御鐵炮奉行並被仰付勤之内百表之高ニ御足高并御合力米現米六拾石被下置候段大坂御城躑躅之間ニ於而被仰渡席之儀ハ小十人格ニ相心得候様被仰付

一慶應二寅年四月十一日 攝海御臺場築造方者は迄過并大砲御用相勤得様被仰付

一慶應二寅年九月二日 攝州鷹取山續石炭堀取場所見分尙折々見廻御用相勤候様被仰付

以上

履歷書



鶴岡縣士族

佐藤政養

- 一 明治元辰年二月十五日 攝海炮臺掛申付候事 大坂府
- 一 同二巳年二月廿八日 大坂府兵局御用掛申付候事 大坂府
- 一 同二巳年四月廿日 治河測量兼勤申付候事 大坂府
- 一 同二巳年十一月廿五日 準十一等出仕申付候事 民部省
- 一 同二巳年十二月十二日 改正掛申付候事 民部省
- 一 明治三午年三月十九日 鐵道係申付候事 民部省
- 一 同三午年四月二日 準十等官祿被下候事 民部省
- 一 同三午年六月廿一日 鐵道爲御用大坂出張申付候事 民部省
- 一 同三午年六月廿二日 民部省出仕被仰付候事 太政官
- 一 同三午年閏十月十一日 地理見分ノ爲東海道出張申付候事 民部省
- 一 同三午年十二月廿八日 工部省出仕被仰付候事 太政官
- 一 明治四未年八月廿三日 任鐵道助 太政官
- 一 同四未年十二月十八日 叙正六位 太政官
- 一 明治五申年十月廿八日 大坂在勤申付候事 工部省
- 一 同七戌年五月廿八日 西京在勤被仰付候事 工部省

一同九年五月廿日 依願免本官

太政官

正六位佐藤政養

鐵道創業以來格別職務勉勵候ニ付爲其賞別紙目錄之通下賜候事

明治九年五月廿日 太政官

一金參百圓

佐藤季山居士墓碑

海舟勝先生有所畏愛之門弟子曰佐藤季山焉諱改養通稱與之助季山其號也後改笙溪父曰文褒母池田氏文政四年十二月生於羽後國飽海郡遊佐鄉升川村性溫順事親孝名溢于郡中領主酒井侯屢賞之幼嗜彫刻三十四來江戶學其技於後藤恒俊優入奧窈既而入勝先生門學和蘭書及火技亡何業大進酒井侯命以炮術臺場諸職安政六年幕府徵君爲軍艦操練所蘭書翻譯出役後累進祿秩慶應三年爲大坂鐵炮奉行明治以後官於朝歷大坂府兵局出仕民部省工部省出仕鐵道助叙正六位後官於京大佛門外有遠祖嗣信忠信兄弟之墓地君購之爲父立碑明治十年八月二日病歿享年五十七葬於東京青山娶阿部氏先君沒有子曰與三嗣其家後娶村田氏所著有萬國地圖三角或問等行於卅鑛山地穀學秋乃寐覺稿藏於家君嘗嚴冬單褐力學弗輟勇氣益振云同門之友立石表其墓海舟先生俾余爲君作銘其辭曰

人能自樹立 無不由勵心 斯人而不銘 銘其將誰爲



明治十一年二月

東都中村正直撰

廣群鶴鏤

故鐵道助正六位佐藤君招魂碑

故鐵道助佐藤君既卒之明年其夫人村田氏至東京泣告余曰吾夫曩祖諱嗣信諱忠信之墓舊在京都方廣寺門外年久荒蕪吾夫之在世嘗慨之爲買其地若干步以修理舊塋且建考某碑于其側以爲招魂之所焉既而吾夫亦即世今者遺族等相謀欲新建吾夫之碑于其所以招幽魂願爲記其故余與君締交有年誼不可得而辭焉按狀君諱政養小字與之助酒田縣羽後人也爲人溫順和厚夙治荷蘭學最精於火技及測量術初任幕府後官于朝累遷鐵道助叙正六位以疾辭職彌留經月明治十年八月二日遂卒享年五十有七葬於東京青山靜岡縣人敬宇中村氏爲銘其墓焉余竊謂君之曩祖兄弟克盡忠處事見危授命事著青史君乃以其遠裔亦能竭力盡職立功王室以享朝爵之榮洵弗愧爲忠臣之子孫矣而曩祖兄弟之忠節亦俟君益顯焉嗚呼偉哉余既感君之舊誼尤有欽祖孫婉美之故因叙其大略如此若夫君之性行履歷與學術功業之可大傳者自詳於墓誌家譜茲不復贅明治十一年四月京都府大書記官正六位國重正文撰

正四位勝安房題額

海石村田壽書

中山新田

寬文二年ノ開發ニ係レリ

山崎高橋家代記

貞享ノ初メ四十四石五斗三升壹合四勺

貞享村組付

後千五十四石四斗三升貳合七勺

免四ツ五分四厘

トナル

樽川新田

寬文二年ノ開發ニ係レリ

山崎家代記

貞享ノ初メ四十五石五合四勺

貞享村組付

後千

四十五石八斗八升四勺

免四ツ五分四厘

トナル

菅野

西山一帶ハ本ト樹木繁茂セシモ沿海ノ諸村製鹽ニ從事セシヲ以テ漸次伐

採セラレ延享ノ比ハ既ニ不毛ノ禿山トナリ烈風起リ毎ニ土砂飛ンデ田畑溝渠ヲ

埋メ頗ル慘狀ヲ極ム是レ藤崎山植付ノ舉アル所以ナリ然ル其効力ハ植付區域ノ

方面ニ止マリ其以北ニ於テハ新林繁茂スルニ隨ヒ一層風害ノ度ヲ高メ十里塚吹

浦地方ハ最モ被害甚シカリキ茲ニ酒田中町ノ人碇屋六藏ナルモノアリ深ク之レ

ヲ慨キ安永八年冬大宮田村肝煎六郎左衛門方ニ引移リ植付ヲ計畫シ翌九年此地

ニ移住シ千辛萬苦二十四年ニシテ享和二年其功ヲ竣ヘ當時既ニ子八戸ヲ有スル

ニ至レリ同年此名ニ因ミ菅野村ト稱ス實ニ是レ本邑ノ創始ナリ

(大井眞嶋氏文書)

乍恐以書付奉願候

遊佐郷西濱山之内先年不毛之場處年々毎ニ砂吹烈敷船通ハ勿論御田畑共砂埋水溝ニ相成村々一統悉行泥候体相見候ニ付自分物入を以諸木植塞見申度段其節申上候



處早速被<sub>レ</sub>仰付候ニ付酒田中町家屋敷親類共ニ相讓廿四年以前亥暮大宮田村肝煎六郎左衛門方ニ引越翌子春中菅野ニ引移植付ニ取懸見候處莫大之場處手不足ニ而植塞兼依之數寄名子共家作仕時々夫食等取續ケ連々仕立來候處拙者共ニ都合九軒之居家ニ相成諸木次第ニ繁茂仕當時村立ニ相成候へ共是迄村名無御座何共歎ケ數御儀ニ奉<sub>レ</sub>存候間何卒以御威光今般菅野村ニ新村名被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置度奉<sub>レ</sub>願候彌奉<sub>レ</sub>願候通被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置候ハ、重々難有仕合奉<sub>レ</sub>存候爲<sub>レ</sub>其乍恐以書付奉<sub>レ</sub>願候 以上

(享和二年)

戊三月

碓屋六藏

肝煎六郎左衛門

今野喜七殿

前書之通承届候處相違無御座候間被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置度奉<sub>レ</sub>存候 以上

前同月

今野喜七

御郡奉行所

御代官所

覺

遊佐郷西濱山先年無毛之地ニ而季秋之比より春子ニ至迄風ニ隨<sub>レ</sub>砂吹敷舟通御田

地共ニ一圓之泥ニ至ルノ所藤崎村植付長茂之蔭を以村々無難凌候得共右村はつれ此前より吹浦渡船場迄之間不毛之沙山藤崎植付茂ミ立ニ隨<sub>レ</sub>冬風倍吹入烈敷小際谷地ニ限らず舟通御田地共沙埋ニ相成如何共難忍之處然に碓屋六藏義町家之産業を不厭代々之住居を離<sub>レ</sub>格別之志願を興<sub>レ</sub>樹木植付試度之願申立酒田中町より廿四年以前亥暮下<sub>レ</sub>地村六郎右衛門へ所縁を求家内引越翌春菅野ニ引移小家しつらひ手を盡し植付見候得共廣大之場處悉植塞兼依之數寄名子共數軒自分物入を以家作夫食等迄仕送多年莫大之物入仕粉骨を盡出精仕候故廣大之場處植塞樹木長茂仕當時藤崎同客之村立ニ相成格別之患を除候も畢竟六藏精勤ヲ盡候故と奉<sub>レ</sub>存候殊年來之長病老衰ニ至<sub>レ</sub>露命旦夕之程をも難測之間何卒存生之内以御憐愍今般新村名被<sub>レ</sub>仰付被<sub>レ</sub>下置度奉<sub>レ</sub>存候是等之趣何分宜敷御沙汰被<sub>レ</sub>成下度奉<sub>レ</sub>存候爲<sub>レ</sub>其添口上書仕申上候 以上

戊三月

今野善七印

御郡奉行所

御代官所

藩主其功勞ヲ嘉<sub>レ</sub>シ特ニ帶刀苗字ヲ聽ルシ年々廩米五表ヲ賜ヒ且南北千五百貳拾五間東西六百間ノ地ヲ永クコレニ預ケ向後田畑ノ開墾アラハ年貢高役ヲ免ジ



村里ヲ置カバ其支配タルヘキノ裏書圖面ヲ下附シ後證タラシム

飽海郡遊佐郷田畑并川筋砂除之ため二十三年以前安永九子年西濱山藤崎村植付境より吹浦迄之間至而吹亢之場處植付之事酒田町人碓屋六藏奉願菅野ニ申處ヨ引越自分米錢を用ひ人家を置數萬之諸木を植追年新林繁茂其功顯然たるによつて繪圖之通境を定永御預被仰付候後年境内田畑新發あらバ町歩を改年貢高役を免すへし村里を置バ六藏支配たるへし仍而後証之ため繪圖裏書與置もの也

享和二年戊七月

白井矢太夫印 杉村文大夫印

服部八兵衛印 松宮儀八郎印

松平多宮印 三浦正藏印

諏訪部權三郎印

當邑曾根原順藏ハ其後裔ニシテ家ニ先人ノ植付日記ナルモノヲ藏スト云フモ何故カ秘シテ之レヲ示サ、レバ植付ノ顛末ヲ述フルニ由ナシ

菅野城 筆の餘ニ菅野村丸子村ノ間ニアリ吹浦ト纔ニ吹浦川一筋ヲ隔テ方六十四間今纔ニ堀形殘レリト見ユルモ河身ノ變遷ト風砂ノ散聚トニ依リ今其地分明

ナラズ

城主ヲ板垣兼富ト云ヒ永祿七年八月十三日没落シ之レニ死ス遺腹ノ兒由利郡大竹村ノ修驗トナリ壽福院ト稱シ子孫相承ケ維新後神職ニ補セラレ現ニ祇園神社々掌タリ板垣氏ト稱ス系圖一卷、佛体一軀銅製丈ケ四尺貳分短刀一口八寸五分銘ニ相州住正次ヲ傳フ  
(由利郡大竹邑壽福院系圖)

仁王五十六代 清和天皇……………賴光 忠賴 一條次郎ミ曰也

兼 信 板垣冠者ト云フ也 (中略) 兼 富 十六代 義榮公師ク 清和四代之末賴光末

葉十九代後庄内菅野城主永祿七年 申子八月十三日落城壽廿六才討死

竹生山大聖寺開臺 權大僧都大越家法印宥範 慶安元戊子十二月廿八日卒壽八十四

月三日誕生是以小瀧村鳥海山別當於宿生ル是ハ庄内菅野城主末也主之妻女胎内仁入男子來リ龍山寺之成後妻出生ス此ヲ宥範ト號ス城主本名板垣丑次郎兼富ノ正子今ノ宥範也九才摘髮廿五才娶廿七才大竹邑ニ來



リ三十才大峯ニ入ル文祿三年午七月ニ入ル福圓坊ト云改號壽福院ト申  
ス也

二世權大僧都阿闍梨法印永情ト申ス  
萬治二年己亥六月廿四日  
壽四十三卒ス  
(下略)

○此系圖ハ寶曆中進藤重記モ披閱セラレ其大要ヲ大社考ニ掲載セリ但何人ノ爲  
メニ没落セシヲ詳カニセズ筆の余ニハ武藤氏ナラント云ヘリ

庄内要覽ニ由利郡大竹村祇園ノ別當地福院ハ其昔菅野大膳ノ胤也ト云ヘルハ  
非ナリ壽福院ハ板垣兼富ノ子孫ニシテ大膳トハ自ラ系統ヲ異ニセリ

永祿七年板垣氏没落後當城ニ係ル事歷文書ノ徵スヘキナシ天正十八年上杉景勝  
庄内ノ城主楯主ニ城壘ヲ避ケシメ越後ノ將士ヲ以テ之レヲ守リ川村彥左衛門ヲ  
シテ檢地セシムルヤ當城ニ在番セシモノハ實ニ信州川中島海津組ノ部將市川對  
馬守ナリ奉迎寺年代記ニ據ル第一卷惣說參照スヘシ同年九月庄内地侍ノ窃ニ欺ヲ最上ニ通スルモノ或ハ  
武藤ノ遺臣ニシテ上杉氏ニ平カナラサルモノ民心ノ動搖ニ乘シ反旗ヲ翻カヘシ  
頻リニ諸城ヲ陷レ勢甚猖獗ナリ觀音寺城在番寺尾傳左衛門之レニ死シ當城亦没

落セリ同上

土寇等之レニ據リ兵ヲ吹浦女鹿ニ配置シ三崎ノ險ヲ扼シ景勝ノ南上ヲ支ヘ其間  
ヲ以テ尾浦城ヲ陷レントス城將島津淡路之ヲ嬰守シ勢旦夕ニ迫レリ景勝仙北ノ  
大森ニアリ遙ニ變ヲ聞キ急ニ兵ヲ南シ同月廿四日小砂川ニ至リシモ土寇ノ爲メ  
ニ支ヘラレ三崎ニ進ム能ハス爲メニ留ルコト四日、更ニ道ヲ桑之森ニ取り廿八  
日庄内ニ入り當城ヲ陷レ行ク土寇ヲ攘ヒ尾浦ノ圍ヲ解キ終ニ之ヲ平定ス事第一卷  
總說ニ詳  
カナ  
リ

(下野澤菅原政次記慶長十四  
年筆記) 天正廿二年庚子○此記錄ハ政次晩年ノ筆ナ  
レハ年代ニ往々誤リアリ七月朔日景勝公御内  
衆七手組之衆御越ニテ庄内之域共ニ城番被成御檢見惡敷被成候故庄内之百姓共一  
揆おこし打はたし申候追付其年の内ニ景勝公御入馬被爲成候事ハ小田原陣納リ候  
而仕置ニ關東ヨリ中仙道を秋田まで御下向被成候則同年九月廿四日ニ小砂川村ヘ  
御着被成候庄内之百姓共集三崎山御馬を五日かゝへ置候中略油利之百姓御先立仕候  
ハ金銀を被下候同廿八日に御馬被爲成候下略  
(最上先亡藤田丹波高名覺書)小田原落城の時庄内みさきのしたにすが野と申城御



攻の時本城のへいニ付土肥半左衛門と申人十七ニ而鎧仕候半左衛門鎧へいより内へこみ申候を敵ほさきをどらへ内ヨリ又鎧を出し申候を拙者鎧を取、鎧を貳本おしおひ候へ共此城かたく持候間さるの刻ニ上げさせ被申候ぬく井○温井ノ假字、と申人イ苗字ナリしみにあたりほりにしつみ候を又某返しほりよりひきあけ申候此中まで大山にて半左衛門かたり申候間おのく聞およひ申候

慶長六年四月志田川村東禪寺籠城ノ際當城ヲ取立テ酒田地侍ニ町在ノ兵ヲ添ヘ

升川落伏吹浦女鹿等ノ切處ニ之レヲ布キ三崎ノ險ニ據リ北口ノ敵ヲ防カシメシ

ガ志村伊豆守鮭延典膳最上眞室城主後チ越前守ト稱ス秋田仙北由利ノ兵ヲ率キ同月二日桑之森ノ

間道ヨリ升川落伏ヲ略シ一手ハ二崎ヲ破リ吹浦ニ亂入シ當城ヲ攻ム衆寡敵セズ

同月十一日城ヲ開キ且ツ戰ヒ且ツ退キ東禪寺城ニ入ル此役永田若狹粕谷宮内ヲ

初メ酒田ノ地侍多ク戰歿ス既ニシテ東禪寺モ亦開城セリ天正慶長ノ戰役ニ於ケル當城ノ事歴尙記スヘキモノ多カル

モ編纂ノ便宜ニ依リ第一卷總說ニ掲載セリ宜ク參照スヘシ爾後當城ニ係ルコト記録ニ見所ナシ

庄内物語引ニ慶長六年ニ於ケル當城主ヲ菅野大膳トナセリ大膳出ツル所ヲ詳カニ

セズ與羽越軍記ニ 鮭延越前守仙乏勢ヲ率キテ攻登ルヲ防カント遊佐八日町ノ地侍長馬大膳ハ熊坂

太郎鈴木次郎同龍若、鎌倉權内、荒瀬代太郎伊勢小治郎杯云侍共を相從其外酒田卅六騎ノ地侍ニ平田荒瀬遊佐の郷民三千余人菅野の原ニ城を取立楯籠其折志田修理其功ヲ賞シテ菅野大膳ト改メシムト云々然ニ由利仙北ノ大軍諸方ノ口々ヨリ責込當城ヲ取卷テ晝夜ヲ不分攻立ル城中ニモ爰ヲ先途ト防カシム數日ノ籠城終ニ力屈シテ城ヲ開酒田ヲ指シテ引入タリ此亂治テ後大膳故郷ニ引込後年酒井家入國後月俸を給ハリ九十余才迄長命セリ

ト見ユ之レニ據レバ大膳ハ遊佐八日町ノ地侍長馬氏ニシテ此際新ニ城將ニ命セラレシモノ、如シサレド此書ハ稗史ニシテ悉ク信スヘカラサレバ今之レヲ取ラス

西遊佐村 比子青塚服部與屋十里塚菅里藤崎ヲ管ス

青塚 明曆二年檢毛帳ニ高六十貳石七斗壹升九合九勺青塚村、高九十九石壹斗

四升五合五勺同村宮内高ト見ユ後チ村高廿八石四斗四升八合七勺免三ツ宮野内村

高四十七石七斗七升六勺免五ツ八分貳厘外野村高五拾貳石貳斗九升九合三勺免六ツ貳分七厘トナ

ル外ニ網役監年貢等アリキ

(延享三年巡見使御用覺書若王寺杉山氏所藏)

青塚村 肝煎多七長人 百姓與左衛門 高百四拾壹石八斗貳升六合六勺内四拾壹石壹斗七升八合七勺

免三ツ貳分本村高 内拾八石六升五合丑ノ御手擬引 同四十七石七斗七升六勺免五ツ八分貳厘 同村宮内高 内壹石七斗六合



丑ノ御手擬引 同五拾貳石貳斗九升九合三勺 免六ッ貳厘七分 同村外野村高 内三石六斗 丑ノ御手擬引 一寺壹ヶ寺淨土眞  
 言願專寺 一家數五十三軒 一人數貳百四十五人内 男百三十八人 女百七人 一海獵船九艘 一  
 金貳兩三步錢壹貫貳百八文諸役金内壹兩三步 いなし網役 同壹分壹貫貳百八文 手くり網役  
 同貳步 指網役 同壹步 川いくり役 一鹽釜貳拾四枚 此年貢鹽十八石 一米貳表壹斗 各地御年貢  
 一貳表壹斗四升 笹札年貢

酒井家御土藏記録寫ニ慶安五年本村ヨリ宮内外野兩村肝煎ニ係ル訴訟目安及ヒ

答辨書アリ事兩村越石ニ關スルモノナルヲ以テ左ニ載シ參考ニ供ス

慶安五年辰九月十四日 進佐之内青塚村之肝煎清藏其外百姓共目安指上宮内村

喜右衛門外野村又右衛門返答書其外書付入置候

乍恐遊佐之内青塚村百姓書付を以訴訟申上候事

一青塚村之義ハ鹽御年貢海役海道之役仕候へ共外ニ村々之御田地あまり申候と被  
 申高六十四石余ふり地ニ被仰付候并外之村地方之内高拾貳石六斗每年より作り  
 申候右之御田地共たいてん所ニ御座候へハ終ニ稻刈取不申候處も御座候へ共御  
 年貢萬事之諸役共ニ年々不殘相究申候へハ青塚村之百姓つゝき可申様無御座候  
 間古荒之義御披露可被下候由毎年より度々肝煎又右衛門所ニ申候へ共合點不仕  
 候間何共惣百姓迷惑仕候事

一右之高六十四石余ふり地之内ニ高三十七石程之處能田ニ御座候得共其高之諸役  
 青塚村之百姓ニ爲仕御田地をハ外野村にて作り申剩へ我等共之方より石ニあた  
 り御年貢取申ほと三十七石ノ高ニ米も納不申納方之内我等共ニ辨へさせきも入  
 又右衛門我まゝ仕候事

一肝入又右衛門卯秋中鶴岡へ登申二三日居申その遣ひ又ハ水そん之遣ニ御座候と  
 て米四十表余のわりニ申かけ取申候へハ迷惑仕候并水そん御引目ノ帳面も見せ  
 不申又ハ御免相をも知らせ不申我かまゝニ斗申かけ候へハ惣百姓つゝき可申様  
 無御座候外之村々にてハ御田地あまり不申候へ共ふり田ニ仕其ノ内ノ田地作り  
 申其上他村ニ迄御田地作り申候間右より外之村ノ本田ニ御座候間外之村へうけ  
 取可被下候由毎年より度々又右衛門所へ申候へ共合點不仕候間以御意右之ふり  
 田外之村へ御返し被下度候事

一宮内村ノ田地あまり申候迎百表ほと出申處ニふり田ニ被仰付候へ共たいてん所  
 ニ御座候へハ年々稻をも刈取不申候へハ年々御引目も御座候様ニ承候へ共御帳  
 面をも又ハ御免租をも見せ不申肝入喜右衛門我かまゝニ斗水そん御免租申さか  
 せ御年貢究させ申次ノ年ニ罷成前年ノ水そん御免租引過申候とて五割之利足を  
 かけ明年之霜月米納させ申候閑様ニ自由成儀仕候間惣百姓迷惑仕候事  
 一右之御田地たいてん所ニ御座候へハ年々稻をも刈取不申御年貢諸役相究申候ニ



付青塚村ノ百姓共迷惑仕候間古荒之義御訴訟可被下と肝入喜右衛門所へ毎年よ  
 り度々申候へ共終ニ合點不仕候今度宮内村之百姓中も古荒ニめいわく仕候而喜  
 右衛門さきニたて御披露申上候古荒書上申ニも喜右衛門高下仕書上申候へハ漬  
 通之百姓迷惑仕候外之村ミヤ内村兩村より高百五十石余之ふり地たいてん所ニ  
 御座候へハ年々稻をも刈取不申處過分ニ御座候へ共御年貢諸役共ニきわめ申候  
 ニ付而百姓つふれ申候へハ相殘百姓共つゝき可申様無御座候事  
 右之條々少もいつわり御座なく候是々かきらす又右衛門我かまゝ仕事かつゝ御  
 座候間出合口上ニ而可申上候爲後日之仍而如件

辰九月十日

青塚村きも入 清 藏印  
 百姓 仁 助印 七右衛門印  
 金 十郎印 久 藏印  
 助右衛門印 源 藏印  
 與 二郎印 彌右衛門印  
 彌 藏印 新 藏印  
 勘 十郎印 與兵衛印  
 彦 四郎印 惣右衛門印

御奉行所

仁右衛門印 仁左衛門印  
 彌右衛門印 與さく印

御目安返答書指上申事  
 一ミヤ内村御田地あまり申ニ付ふり地ニ仕候と申上候事いつわりニ御座候先方之  
 御代より田主とあいたいたし作り申ふり地ニ無御座候扱又御免租もきかせ不  
 申と申上候右之御田地ハ表ニ相定申より外ニハ米壹升も濟し不申候ミヤ内村之  
 御免租高下御座候共青塚村之者共かまひ御座有間敷候又ハ御引目之帳見せ不申  
 候由申上候いつわりニ御座候水損御引目之帳參候へハ皆々よびよせめんゝニ  
 見せ申候水損之引過御座候とて次ノ年ニ五割の利足をかけ取申由いつわりニ御  
 座候縦水そんニかきらす勘定など違候ハゞさん用方も取引仕候ても喜右衛門む  
 りニハ御座有間敷候事  
 一御田地たいてんの所ニ御座候へハ水帳書上ケ申候て御引目被下候表ニ相定申候  
 間諸役ハかけ不申候ニ諸役いたし申候由いつわりニ御座候扱又たいてん所を小  
 辨あれニ書上ケ不申候事喜右衛門いたつら者と申上候義當年迄仕付申所ハきんみ  
 いたし惣別書上不申候青塚村にて作り申候御田地ノ内ニも毎年よりあれ申所高  
 七石貳斗三升九合右をも書上ケ申候百五十石九升九合ノ内へ書上ケ申候ミヤ内



村御田地作り申上青塚村之御百姓つふれ申候と申上候事いつわりニ御座候事  
右之條々少もいつわり無御座候しなく之儀ハ口上ニ而可申上候爲後日之仍而如  
件

辰ノ九月十九日

喜右衛門印

百姓 貳右衛門印

御奉行所

御目安返答書指上候事

一青塚村御百姓衆きも入又右衛門我かま、仕候と御目安指上申候拙者義ハ二三年  
以前迄あに罷在きも入仕候が彼の者相果申候ニ付而其以後我等きも入仕候青塚  
村へ參候御田地之義ハ高拾貳石七斗四升之處三十年以前之いの年元和九年青塚村百  
姓衆新田ひらき則其年御さを入にて御檢地帳ニも青塚村ノ百姓衆之名付御座候  
其上外野村たいてん仕御田地過分ニあまり申ニ付而武右衛門様甚十郎様御披  
露申上候へハ高拾壹石白木村同十三石八斗四升服部からや村同六十三石八斗八  
升ハ青塚村へ貳拾四年以前之巳年寛永六年以御意御越被下候右之御田地之義ニ付外  
野村きも入百姓と言分御座有間敷候并ニ右之御田地ノ内水いかり少あれ申處御

座候ニ付切替を仕候へと敷度申候へ共合點不仕あらし指置申所御訴訟不被申上  
候と申候得共御目安ニ指上申候ハ永代ニすて可申たくみ仕加様ニ我かま、なる  
義申上候御百姓御座有間敷候事

一青塚村地方之内高三十七石程之所去年中も田ならびの者共中間にて相談仕作り  
申候へ共御年貢諸役共相究申納方之内わきまへさせ申と申上候義いつわりニ御  
座候事

一きも入又右衛門卯ノあき鶴岡へ登申二三日居申遣水損之遣ニ米四十表余之わり  
ニ申かけ取申と申上候事いつわり御座候扱又水そん御引目之帳參候へハ惣百姓  
寄合勘定仕毎年御物成納申候并ニ外野村御田地あまり不申と申上候儀爲ニ御座  
候年々高五十石六十石ツ、あまり申候へ共才覺仕他村ノ小作ニたろし爲作申候  
事

右之條々少もいつわり無御座候しなくの義口上ニ而可申上候爲後日之仍而如件  
辰ノ九月十九日

この村きも入 又右衛門印

百姓 太郎左衛門印 刑部左衛門印

右馬 亟印 助右衛門印

長九郎印 與五郎印



御奉行所

次兵衛印	喜藏印
彦右衛門印	萬吉印
平右衛門印	左衛門九郎印
仁藏印	仁藏印
喜三郎印	新五郎印
甚九郎印	六藏印
彌八郎印	六兵衛印
左六印	

服部興屋 明曆二年檢毛帳ニ所見ナキモ寛永六年外野村ノ内高十三石八斗四升ヲ當村ニ配附セラレシコト慶安五年外野村肝煎ガ目安返答書ニ見ユレハ寛永以前ノ村立ナルコト自ラ明カナリ貞享村組付ニ高三十石四斗六升四合家數廿一軒内十八軒御役下 大與頭 彌八郎トアリテ即チ濱組八ヶ村ノ組本ニシテ大組頭土門氏コ、ニ住シタリキ後チ高卅一石八斗八升五合四勺 免三ッ トナリ外ニ網役鹽年貢アリ

(延享三年巡見使御用覺書) 服部興野村 肝煎彌太郎 百姓次兵衛 高卅壹石八斗八升五合四勺 免三ッ 内

七石三斗貳升 手擬引 一家數四十軒 一人數二百十三人 内百十八人男 九十五人女 一海獵九艘

一金壹兩錢壹貫貳百拾九文内三步銀七匁五分 いとし網役 七匁五分 手くり網役 八百三十壹文 同役 三百八十八文 さし網役 一鹽釜拾壹枚 此年貢鹽七石貳斗貳升五合

十里塚 明曆二年檢毛帳貞享村組付ニ所見ナシ高ヲ有セサルニ因レリ後チ高四十石八斗七升 免三ッ 外ニ海役鹽年貢等アリ

(同上) 十里塚村 肝煎九助、長人 百姓太郎兵衛 高四十六石八斗七升 免三ッ 内六石八斗七升 手擬引 一家數四十三軒 一人數貳百十三人 内百十八人男 同九十五人女 一海獵船八艘 一金貳兩八百拾壹文 諸役金内壹兩三分 いとし網 壹兩五百壹文 手くり役 三百拾文 さし網役 一鹽釜拾枚 此年貢鹽七石五斗貳升貳合 一米壹俵壹斗六升 谷地年貢 一同壹表貳斗四升 笹札年貢

藤崎 藤崎山植付ノ成立ニニアリ一ハ領主住民ヲ募リ藩費ヲ給シ之レヲ助力シタルモノ即チ藤崎村ノ起原トナリ一ハ個人ノ資財ヲ投シ獨力之ニ成功セルモノニシテ所謂佐藤々左衛門父子ノ事業ナリ今公私ノ順序ニ依リ先ツ一村ノ成立ヨリ述ベ然ル後チ佐藤氏ノ事歴ニ及ホサントス  
抑モ西山一帶ハ往時樹木繁茂シタリシモ沿海諸村ノ人民製鹽等ニ從事セルヲ以



テ漸次伐採セラレ終ニ不毛ノ赤地トナリ風伯咆哮スル毎ニ土砂ヲ捲キ田畝ヲ埋  
メ宮内大井服部等被害最モ劇シク且西山ニ沿ヘル所謂「船通」ノ溝渠○租米運送ノ爲  
メ開墾セルモノノ路ヲ失ヒ春夏出水ノ際汎濫シテ土田ヲ浸シ一大湖沼ヲナシ  
八年々埋モレ疏通ノ路ヲ失ヒ春夏出水ノ際汎濫シテ土田ヲ浸シ一大湖沼ヲナシ  
瀦溜久シキニ亘リ常ニ村里ノ大患ヲナセリコ、ニ挿入スルハ享保六年施設セル  
砂際簀垣ヲ示スモノニシテ以テ當時ノ形勢ヲ想見スヘキナリ

是ニ於テ有司數ク植付ヲ試ミ或ハ數萬ノ人夫ヲ發シ埋溝ヲ疏通セシムルモ朔風  
一タヒ起レハ稚樹倏チニシテ埋没シ溝渠モ亦處ヲ易ヘ拮据經營ノ功勞モ徒爾ニ  
屬シ寛保延享ノ際ニ馴致シ被害最モ太タシカリキ時ノ御郡代服部外右衛門深ク  
之レヲ慨キ藩主ニ稟申スル所アリ延享二年六月當時名僧知識ノ聞エアル鐵文長  
老了重和尚ニ内命シ川北ヲ巡錫シ盛ンニ風砂ノ慘害ヲ説キ志士仁人ヲ奮起セシ  
ムルノ手段ヲ取ラレシガ酒田ノ佐藤々左衛門父子爲メニ百年經營ノ目的ヲ以テ  
挺身之レニ當ランコトヲ請願セラレシ事下ニ詳カナリ同年秋外右衛門更ニ老農  
四郎兵衛中野  
侯村安右衛門飛鳥  
村ニ植付方法ヲ諮詢シ即チ農民ヲ募リコ、ニ土着セシメ







藩費ヲ支給シ植付ニ從事セシムル方法ヲ計畫セラレタリ

○四郎兵衛佐藤氏平田郷中野俣村ノ人ナリ天性播種ヲ好ミ嘗テ各種ノ樹子ヲ培養シテ遠邇ニ分與シ之レヲ試育セシメ常ニ造林ヲ以テ唯一ノ目的トナセリ寛保二年十一月藩主其篤志ヲ嘉ミシ特ニ植付役加勢ニ擢ンテ年々米三表ヲ賜ヒ之レヲ獎勵セラレシモノナリ

(御郡方御用留帳渡部九十 九所藏) 平田郷ニ申達候中野俣村百姓四郎兵衛義青木ハ勿論諸木植付之義數年致出精三組諸人勝○精ノ假字數萬本植付段々生立申候猶又此末植付可申覺悟ニテ苗木等年々過分ニふせ申候依之今般植付役加勢申付爲手擬平田木柴代米之内ヨリ三表ツ、來亥之年ヨリ右四郎兵衛爲取可申候間此旨左治兵衛縫殿助○平田大庄屋ヨリ御申渡彌々此末相勵ミ植立候様御申含可有之候植付場之儀ハ來春迄之内評議之上可申付候間各々も相考御申聞可可有之候尤右之三表木柴代米ヨリ内引取可被申候

戌十一月朔日

(御郡奉行)

伴 幸右衛門

(大庄屋)

川北八人殿



此時募二應シタルモノハ彼四郎兵衛安右衛門及ヒ鹿野澤村天神八十郎福升村善三郎外野村清七ノ五人ニシテ同年十一月家作料且各々米五表植付料貳拾八貫文ヲ支給セラル

(舊例秘録)延享二年丑十一月濱山引越之五軒之者共壹人ニ付米五表宛可被下置旨被仰付候右之者共家作入用積御郡代御披見相成候尙又可成程入目を省き段々取掛候様被仰付候

(佐藤四郎兵衛書留)延享二年丑之秋遊佐郷濱山砂留植付ニ服部外右衛門様ヨリ被仰付拙者ハ御頼ニ付參候安右衛門ハ御郡奉行所伴幸右衛門様へ奉願候而九月節句ニ御同道ニテ參リ候西山見分ニ來リシヲ云フ居宅御公義様ヨリ作り被下其上壹人ニ付米五表宛被下置候植付日用錢貳拾八貫余宛五人ノ者ニ被下候ゆさ郷ニテハ八十郎清七善三郎加へ五軒濱山寅春ヨリ越申候

同三年三月六日安右衛門先ツ砂山ニ移リ翌七日四郎兵衛來リ尋テ八十郎等移リコ、ニ初メテ荒漠不毛ノ赤地ニ六戸内一戸ハ佐藤々左衛門ノ代家守ノ民居ヲ見ルニ至レリ實ニ藤崎村ノ起原ナリ斯クテ植付ニ着手セシガ會々同月十五日朔風吹荒ミ幾層ノ辛酸

ヲ嘗メ子育セル稚樹悉ク砂中ニ埋没セラレタリ然レ志氣堅忍數々風砂ト戦ヒ銳意コレニ從事シ毫モ倦怠ノ色ナシ遠近其志ヲ壯ンナリトシ苗木酒食ヲ齎ラシ慰問スルモノ頗ル多カリキ

(佐藤四郎兵衛書留)ひのへ寅延享三年ナリ遊佐濱山三月七日ヨリ參候四郎兵衛安右衛門ハ六日ヨリ夫婦共ニ參申候七日ニハ山楯組ヨリ拾九人肝煎植木手傳ニ御出被下候其節ハ舟通リ御座候而御郡代奉行所も御下リ被遊候植付山御覽被遊候其後ハ庄司左次兵衛殿田澤組大庄屋同道ニ而刑部左衛門四郎左衛門權兵衛清兵衛共ニ五人被參候而一夜泊リニ被成候御酒代被下候一肝煎嘉兵衛酒代持參仕御出被下候一川原村與助儀右衛門兩人酒代外ニ小豆貳升ツ、持參ニ而見舞被下候一杖突治助酒代ニ而見舞被下候一本多權藏様五月十二日吹浦御出被遊候御歸リニ御立寄被遊候にしん壹束御持參被下候以下見舞人名物品等省略ス  
(同上)大下リ風三月十五日ヨリ十六日迄同風十九日ヨリ廿二日迄此風ニ而植木大分そんじ申候是ヨリ二番木の出申候而やうやく五月ニ成直リ申候  
一拙者屋敷ハ巾八十間長舟通より海のきわ迄通中筈ニ御座候一安右衛門屋敷ハ巾四十間長同斷一ゆさ衆三人ハ巾貳拾間ツ、成



同月廿一日四郎兵衛等五人ニ各飯料五表ヲ増シ拾表ヲ賜ヒ且薪料トシテ當分最寄官林ノ木材ヲ給セラル

(舊例秘録)延享三年丙寅濱地方に引越之五人之者共飯料壹軒ニ付拾表宛五十表被仰付三月廿一日御書替扎ニ而相渡候 右引越之者共薪拂底ニ而致迷惑候ニ付當分向最寄御林之笠木惡木被下度旨申上被仰付候

(佐藤四郎兵衛書留)寅ノ年藤崎村五軒並喜兵衛傳三郎○此二人ハ佐藤々藏ノ代屋守トシテ西山ニ居住セシモノ共ニ七人ニ薪被下候是ハかの澤山御林ニ而六軒ハ被下候善三郎一人勝手之由ニ而上野澤山にてもらい申候壹人ニ付三本宛本廻貳尺五寸御座候へ共四尺余りも廻り申候

爾後植付ノ成績觀ルヘキニ至リシカバ同八月藤崎村ト命名セラレ初メテ一村里トナレリ

(同上)

御用之儀有之候間明三日傳太郎宅へ可被參候 以上

八月二日

傳太郎 (阿部)  
次郎右衛門 (石山)

八兵衛殿 善三郎殿 清七殿

四郎兵衛殿 安右衛門殿

急御用申達候濱山引越之者共居候處此度藤崎村と村名被仰付候右村へ此狀相届ケ可被申候 以上

八月二日

傳太郎

村々肝煎衆

向暑氣ニ候へ共各可爲御無異珍重ニ候我等不相變今以飛鳥砂越御普請所に相詰居候扱ハ先月鶴岡へ罷登候處ニ其元藤崎と村名被仰付候由承候千秋萬歳目出度存候此上ハ尙以被入御精力遂其功候様可被遊候秋中見合河をも一宿之つもり大儀申度候無申迄候へ共砂除工夫尤ニ候右御祝詞爲申入如是ニ御座候去年迄砂々たる砂山各方ヨリ事數右之仕合ハ誠以生涯之本望ニ候折角御祝可有之丁場ニ而紙墨も乏早々如此ニ候 以上

八月九日

(山楯組大庄屋)  
佐藤縫殿助

藤崎村

四郎兵衛殿

安右衛門殿



備考 (佐藤藤藏書留) 延享四年植付育宜とて一村開名之事

遊佐郷西濱ハ久敷したり砂山にて風はけしく草木も育かね御上にてもいかんとも難被成場處なりしを藤左衛門父子前後自分をかへりみず最初ニ植付の志を出し夫ヨリ人々趣候へバ誠ニ砂山の開基なりとて服部外右衛門殿鐵文長老と御相談にて佐藤々左衛門父子の藤の字を取り一村の名をゑらみ藤之生村藤崎村兩號を書上候處ニ御上ヨリ藤崎村と被仰付候

九月中野俣村惣四郎外野村傳七ナルモノ亦移住ヲ請ヒ木材等ヲ給セララル

(舊例秘録) 延享三年丙寅平田郷中野俣村肝煎與惣右衛門植付願出被仰付候弟惣四郎引越之義も被仰付御材木等御林ヨリ被下置候 外野村御百姓喜助倅傳七引越候而植付情働仕度旨申上御手擬米五表被下置居宅之義も御材木等被下置候九月中也 (佐藤四郎兵衛書留) 寅ノ暮ニ藤崎村に引越願申候所ニ被仰付候ものハ大工傳七是ハ半扶持ニ而願申候中野俣村惣四郎義ハ諸扶持ニ而願申候處ニ被仰付候是ハ右々ヨリ譯有候而之事故宅も五間ニ作り被下候諸邑不殘被下候 (寶曆六年藤崎村軒數書上ニハ惣四郎傳七ノ移住ヲ延享四年ニ係ク即チ三年ノ秋之レヲ聽サレ移住ハ四年ニアリシナリ下掲四郎兵衛書留以テ證スヘシ)

同十一月十八日鎮守觀音假堂入佛式ヲ行フ是歲藩費ヲ以テ藤崎植付場ニ砂除簀垣ノ設ケアリ天神新田ノ老農彦左衛門爲メニ其用材トシテ松杉栗各長一丈ノモ

ノ合計一本本ヲ献ス事鹿野澤ノ下ニ詳カナリ

(佐藤四郎兵衛書留) 觀音堂かりに建立仕候而御みど入ハ寅之十一月十八日其節宮内村寶珠院様御出被下大工傳七同圓右衛門同半藏同道ニ而被參上候大工傳七ハ濱藤崎村之人數ノ御座候殊ニ別當なり内子八人四郎兵衛安右衛門清七八十郎善三郎喜兵衛傳三郎傳七共ニ合八人拙者所ニテ酒食持寄ニテたへ申候雜用一人前錢百三十壹文宛當申候

備考 (佐藤々藏書留) 寬延三年午藤崎村に鎮守堂建立致度願申出候處早速被仰付候同時ニ傳七山伏相成鎮守堂守村方且家ニ致度願申出候處是亦被仰付候藤崎村鎮守ニ觀音菩薩尊像立ル

○延享三年堂宇ヲ建立シ佛像ヲ安置シ假リニ鎮守トセシテ是ニ至リ更ニ造替シ始メテ鎮守堂ト公稱セルモノナルヘシ

延享四年五月始メテ肝煎長人ヲ置カル

(舊例秘録) 乍恐以書付奉願候事

遊佐郷濱山近年別て草木植付被仰付被下置候ニ付平田郷遊佐郷兩組ヨリ植付情働之爲御百姓之内引越被仰付藤崎村と村號迄被下置難有仕合奉存候就夫奉願候一ヶ村ニ相立申候上ハ肝煎役之者壹人長人百姓壹人被仰付被下置度奉存候右引越者之



内四郎兵衛八十郎義ハ少々文筆も相成人柄等も宜者ニ相見申候間肝煎御役義ハ四郎兵衛長人百姓者八十郎ニ被仰付被下置度奉存候左候へハ以來村中御百姓共へ植付情働爲仕其上船通堰筋諸事取計申付候爲ニも甚相成申候彌々奉願之通被仰付被下置候者難有仕合可奉存候爲其以書付願申上候 以上

卯五月

石山次郎右衛門

阿部五郎兵衛

御郡奉行所

右之通被仰付候

御代官所

寶曆二年二月遊佐平田ノ大庄屋相議リ植付ノ功績ヲ不朽ニ傳ヘントシテ建碑ノ舉アリ碑今尙存ス是歲鶴岡總穩寺末門葉軒ヲコ、ニ再興シ一村ノ菩提所トナス即チ門葉寺ノ創始ナリ 但門葉寺ニ係ル事 歴下ニ詳カナリ

(藤崎村碑)

總ヘテ碑文ノ通弊トシテ文釋ノ爲メニ事實ヲ失スルノ嫌アリコ、ニ載スルハ石辻邑阿部某所藏ノ記録ニ收ムルモノニシテ石碑ト少ク異同アリ蓋是レ草本ニシテ寧ロ實ヲ得タルモノナルヘシ

往古ハ此地も草木茂リ東山に對し西山とよびしとぞ然るに究民の爲に枝を伐られ根を掘れて砂山となり西風に吹立る砂近村ニ落留ること年ニより四五尺ニ及ヘリ

船通も年々埋りて田畠ニたゞゆる水湖水の如く是を防かんために數十年植付に手を盡し且三郷數萬の人夫を以て年々水を治めけれども是又功なし故に惣郡の長服部昌勝○外右衛門翁寢食を忘れて是を病へられ延享二年丑秋平田郷四郎兵衛安右衛門等に植付の不可を尋とハしめ則 上聞ニ達せられて翌年彼等をこゝによひて植付のため一村を興し給ふ仰せを蒙るの徒其勞譬ニ詞無し爰ニ當郷彦左衛門と云ひし老農世を利するの志深く此事を聞てまつ己か植付の松五百本を出して砂除の具に備ひ彼等が志氣を勵す齡九十にして末期の一言も多くハ是なりとぞ又酒田藤左衛門父子年來此志ありしとて南方四十町四方を乞預リ此地ニ居せしめ○代屋守ヲ置キシチ云フ植付に金銀を盡し千辛萬苦す此時山崎正良○坂之助下稱ス翁當郡の長ニ命せられ先船通ニ心魂を碎かれ昌勝翁と談和して所々の曲りを直にして日向川をせき入水勢に船通をほらしめ湛を落さて貢船の通路も安からしめんとて是を計給ふ漸にして其圖ニあたり只今も堀入ニ人夫を以てせとも昔年の十ヶ一なり植付水治の兩計實ニ的當し家屋も拾軒ニ及ひ且村堂の造營彼是大君の財を散し給ふこと勝けて言難し誠ニ利世安民の時といふへし僕等兩翁の後に侍りて近く其勞を見遠も聞て知るならし往を以て來を考るに人情安ニ至れハ先の勞を忘る後の究民亦伐盡さん事を恐れて遙ニ此石を求め旨趣を彫刻して無窮ニ貽す後人は是を見て一木一草も己か指の如く痛り船通の流行も己か氣血を療するか如くすへし村名を藤崎といへるも茂りを願ハセ



給ふ祝號なり慎て犯すへからす

寶曆二申二月

遊佐郷大庄屋

阿部源五兵衛豊昌

同

石山重藏 懋積

平田郷

佐藤縫殿助信豫

御郡手代

渡邊喜助 定矩

同四年下當村三十郎大服部村善太郎岩川村八右衛門移住植付ヲ出願シ聽サル之レヲ中之三軒家ト稱シ江地村藤内清助道心亦移住シ之レヲ下之三軒家ト稱ス

但此三人ニハ植付料ノ下附ナシ○佐藤々藏書留

同五年八月十九日是レヨリ先キ酒田ノ佐藤々藏植付ヲ出願シ之レニ從事セシガ

此日舉家移住ス事下ニ詳カナリ同六年正月廿四日四郎兵衛ノ功勞ヲ嘉ミセラレ廩米七表

ヲ賜フ同十一月藤崎村戸數異動調書ヲ上ル當時廿四戸ト注セラル

(舊例秘録)藤崎村肝煎四郎兵衛砂山諸木植付老年之上數年致出精候ニ付當時悉旨

植付成就ニ相成候ニ付舟通堰筋砂埋不申先年ヨリ御普請人足も過分相減候段御郡

代衆ノ寄々得貴意候ニ付御家老中ニ被御申上候處甚四郎兵衛大切ニ思召御褒美之

御沙汰御座候ニ付御郡代衆被申候ハ御米五表被下置度由申上候處御家老中御評議之上御米御増七表被下置其上出精御喜悅之趣此上猶以植付村方者共にも申合致出精候様被仰出一昨廿二日於會所御郡代衆四郎兵衛ニ直ニ右之段々委細御申渡重々四郎兵衛難有仕合可奉存候此段各へも委細口上ニ可申達由申合候へ共尙又爲承知申達候此未別て相勵候様可被御申渡候 以上

正月廿四日

山崎坂之助

石井幸右衛門

山中彌右衛門

阿部源五兵衛殿

石山重藏殿

(佐藤四郎兵衛書留)

延享三寅之年引越申候人々付

四郎兵衛



卯年引越

安右衛門  
清七  
八十郎  
善三郎

惣四郎

大仙坊

豊次郎

新太郎

市内郎

專太郎

與平

傳三郎

喜兵衛

平吉

孫助

喜平

是ハ勝手ニテ鶴岡へ引越申候  
是ハ潰申候

藤藏代屋

寶曆三酉年

喜平

三十郎

藤内

清助

禪門

又右衛門

藤藏

御寺

此七軒ハ四年以前酉年引越申候

是ハ三年以前戌年越

去亥年引越申候

五年以前申年立申候

惣家數貳拾四軒

内三軒ハ藤藏同代屋共ニ

右之通藤崎村中名子宅共ニ書出申處相違無御座候 以上

寶曆六年子十一月

肝煎 四郎兵衛

阿部源五兵衛殿

石山平内殿

安永五年二月大庄屋ヨリ上下江地兩村ノ百姓藤崎村植付区域内ニ移住ノ交渉アリ一村協議ノ上之レヲ承認シ家作移住セシム實ニ是レ江地分民居ノ始メナリ



(佐藤々藏書留)安永五年丙申二月朔日村々方大庄屋より被<sub>レ</sub>仰遣候ハ今度上江地村下江地村右兩村之者共藤崎村植付御林之内石山氏寄々引越始終ハ當村共村替仕度之趣願出候ニ付指障も無之哉其段村中打寄相談之上何れニも明二日迄返答致し其上覺書を以申上候様ニと四郎右衛門へ御申渡被<sub>レ</sub>成候ニ付御尋覺書寫

御尋ニ付以書付申上候

今度上江地村下江地村御百姓共藤崎村植付御林之内寄々引越始終ハ兩村共ニ村替仕度旨願申上候ニ付藤崎村ニて指障之義も無御座候哉御尋之趣承知仕候依之申上候右兩村引越之義ハ乍恐上之御益之筋をも相考又ハ御百姓共農業之仕合等宜永續之義を兼相考申上候處ハ拙者共指障之義申上候筋無御座候乍去御金御物入を以植付仕候儀ニハ御座候へ共拙者共引越數年出精仕後年ニ至植付御林之間々ニハ砂畑を開麥之一作も仕候ハハ何様ニも子孫少々相續之足リニも可相成哉是迄心を盡し骨折情働仕候義ニ御座候然處近年御植付暫御手を被<sub>レ</sub>爲引候趣被<sub>レ</sub>仰渡其節再應願申上候へ共御取上無御座候乍恐御時節柄をも奉察強て奉願候義差扣罷在候義ニ御座候左候へバ此末御植付場處廣ク可相成様も御座無候ニ付只今拙者共出精仕候内下藤崎村迄之間ハ何様ニも防留見申度奉<sub>レ</sub>存候間此旨南江地村引越之者共ハ右下藤崎村より下之方ハ引越被<sub>レ</sub>仰付候様ニ御沙汰被<sub>レ</sub>成下度奉願候爲其連判書付を以申上候 以上

申 二月

藤崎村  
長人百姓 連判  
肝煎

阿部專八殿

寛政九年八月植付切程ト戸數調書ヲ上ル此時既ニ戸數廿四アリシモ村民一畦ノ田畝ヲ有セサリシヲ以テ往々飯料ニ欠乏ヲ告クルモノアリ是ニ於テ田畠開發ノ必要起リ同八年之レヲ請願セラレタリ其願書ハ開村以來ノ經歷ヲ縷述シ頗ル有益ノモノナレハ功程書ト共ニ左ニ之レヲ掲載スヘシ

(藤崎佐藤四郎太文書)

覺

一遊佐郷西濱冬中沙吹越御城米船通沙埋勿論草荊谷地又ハ御田地へ砂吹入最早砂除所無之候ニ付諸木植付之御沙汰ニ而拙者親四郎兵衛飛鳥村安右衛門兩人御郡奉行山崎坂之助様被<sub>レ</sub>召呼植付試候様被<sub>レ</sub>仰付四十□年以前延享三寅年引越申候尤遊佐よりも清七八十郎善四郎惣四郎都合六人引越家作入目飯料拾表宛被<sub>レ</sub>下置候



一翌卯年大仙坊御林松木五十本飯料五表宛被下置引越申候  
 一翌々辰年文右衛門松木七拾本飯料五表被下置引越申候  
 一同年名子多七與三郎又右衛門小四郎松木十五本宛被下置引越申候  
 一四十年前寛延三年壬午平吉平七權四郎長吉藤内喜助三右衛門八士郎右八人松木七十本飯料三表宛被下置引越申候外ニ名子四人自分物入を以追々引越都合廿四軒ニ御座候  
 一引越候年より十九年以前明和八年卯年迄百姓分之者十四人ニ木苗代爲植付料錢三拾百文宛名子之者五ノ文宛被下置百姓ハ合歡木五千三十壹本宛名子ハ六百三十本宛年々植付申候へ共當時百姓分ハ貳千本名子ハ貳百本宛植付申候  
 一貳拾壹年以前安永元辰年より植付料不被下置飯料米六十五表を百姓分十七人ニ分散被仰付則別紙申上候

〔別紙〕 覺

一米六十五表  
 内八表ツ、  
 同四表  
 同三表ツ、  
 飯米料  
 (四郎右衛門 惣四郎 安右衛門  
 清七 八十郎  
 大仙坊 假名傳七  
 八太郎 善四郎  
 權四郎

同貳表ツ、  
 同壹表ツ、  
 右之通飯料今以被下置候 以上  
 西八月  
 高橋儀 六殿  
 肝煎 四郎右衛門  
 (文右衛門 長吉  
 藤内 助  
 與三郎 又右衛門  
 小四郎 多七

一肝煎爲御設料御米壹表宛被下置候處兩度御減少被仰付當時貳斗五升六合宛年々被下置候  
 一長人百姓八十郎へ五百文宛被下置候處御減少ニ付當時三百廿文宛被下置候  
 一佐藤々大夫地境より村方植付之間數巾三百間余長三千四百間余御座候右之松植付五ヶ所有之左ニ申上候  
 一松植付五ヶ所  
 内壹ヶ所 上村之上 内壹ヶ所 右村下  
 但巾四十間長四百間 但巾貳拾間長貳百五十間  
 村中植付 右同斷  
 同壹ヶ所 中村之上 同壹ヶ所 下村ノ上  
 但巾拾間長六十間 右同斷  
 右同斷



内壹ヶ所 村下

但長巾五拾間四郎右衛門  
自分植付

一 鹽出尻藤大夫地境北酒田道東四百間程先年植付置申候

一 村下三百五十間程先年植付申候前申上候通四郎右衛門自分松植付御座候

一 初年ハ木苗用意も無之候ニ付藤其外取交植付候處藤宜敷ニ付藤崎村ニ村名被下

其後合歡木宜敷一統植付申候

一 元來人々植込ニ仕候へ共繁茂仕候而ハ人々居屋敷限西東ニ支配仕根草等刈取申

候下藤崎村下ハ一統之支配ニ御座候

一 寶曆年中植付出精ニ被思召爲御稱譽ニ村中へ御米七表被下置其後四郎兵衛年行

一 隱居仕候節同人へ御米三俵被下置候其外米錢被下置候儀無御座候

一 門葉寺三十八年以前寶曆二年申三月松木五拾貳本被下置建立仕飯料六表宛被下

置候近年ニ相成貳表宛被下置候

一 鎮守觀音堂四十一年以前寛延二巳年建直仕村中申合傳七を堂守ニ仕則奉願修驗

ニ被仰付候

一 藤大夫地境より江地下迄四千貳十間簀垣被仰付右垣下ニ植付仕候當時ハ簀垣代

錢被下置立杭八千本余ハ遊佐中より指出簀當人足ハ藤崎村ニ而差出し簀垣仕候

尤砂吹立候處垣無之候而ハ一向植木根付不申候

右御尋ニ付覺書を以申上候 以上

寛政元年酉八月

肝煎 四郎右衛門

高橋儀六殿

覺

一 惣家數貳拾四軒

藤崎村

内拾七軒

上村

四郎右衛門

大仙坊

惣四郎

安右衛門

清七

八十郎

善四郎

多七

權四郎

文右衛門

與三郎

平吉

又右衛門

小四郎

三郎右衛門

傳助

八太郎

同 四軒

中村

千太郎

平七

兵七

長吉

同 三軒

下村

藤内

喜助

三右衛門

右之通ニ御座候 以上

酉八月

肝煎 四郎右衛門

高橋儀六殿



(谷地一件書 大井眞 嶋氏藏)

乍恐書付を以奉願候

五拾壹年以前延享三年寅年迄遊佐郷濱山僅之草木茂無御座一圓之砂山ニ御座候ニ付仍而右山より西北之風ニ遊佐郷村之御田地ハ砂吹入或ハ當時藤崎村前之船通ニ申大堰ハ右山より一面ニ沙吹入候ニ付此堰年々砂埋ニ相成候ヘバ水湛候而村々御田地南北二里斗沼之様ニ相成其上冬ニ罷成候ヘバ御田地一面ニ氷候而西風はげしき時分ハ氷之上を傳ヘ砂山より東山岸迄一圓ニ砂吹寄候ニ付村々御百姓春ニ相成候ヘバ苗代并御田地ハ吹入候砂を引のけ手間取且又場所ニ寄畔計リ見候程沙吹入候御田地茂有之候ニ老若罷出砂引のけ候ニ粉骨を盡し無用之手間ヲ費し其上船通リ年々砂堀上ケ御普請御座候ニ其通難爲指置哉ニ御思召兎角砂山より吹飛候砂諸木植付ヲ以防留不申候ヘバ末々不得止事義ニ被爲遊御思召依之當肝煎四郎右衛門親四郎兵衛并同村安右衛門御郡代所御普請御見分ニ御出郷被爲遊候節右兩人ハ被召出御郡代所服部外右衛門様御郡奉行山崎坂之助様御代官所中世古嘉右衛門様本多權藏様萬年傳吉様御揃之上御逢被成下置被仰渡候者遊佐郷之御田地ハ濱山より吹入候而耕作難相成候ニ付今度其方共兩人遊佐之砂山ハ引越粉骨を盡し諸木植付飛砂防キ留メ候様ニ被仰付家作村木并作料金として御金九兩貳分宛外ニ爲飯料米御米拾表宛被下置其上苗木代錢として御錢三十貫百文宛被下置不毛之砂山ハ兩

人家を立引越諸木植付申候其後追々面々引越家數七軒ニ而日夜心を盡し諸木植付砂防キ候處段々年を重ね御林相茂リ當時遊佐郷村々御田地ハ砂一切吹入不申候ニ付御百姓耕作安ク相成候ニ付村々一同安堵仕其上年々貳萬人余宛相掛候船通り堰堀人足相よとみ當時村々一方ならぬ助ニ相成申候依而拙者出精仕御林植付候印も相見候者第一御上より御助情被成下置候故ニ難有仕合奉存候依而奉申上候先年盛ニ砂山より砂吹立候節白木青塚兩村之御百姓山岸ニ御座候處毎年砂埋ニ相成其上船通り堰より水湛ニ而全体沼ニ相成候ニ付耕作難相成段兩村より御歎申上候處御見分之上御年貢永引ニ被仰付藤崎村ハ永ク御預被成下置候段被仰渡是迄藤崎村ニ而自由仕候此場處其比ハ前段之通船通より水湛ニて沼ニ相成居其上年々沙埋ニ相成候ヘ共今度者藤崎村御林茂リ候ニ隨ひ只今ニ至リ自然と谷地之様ニ相成草蘆之類生ヘ其余ハ今以沼ニ相成居申候依之奉願候兼て藤崎村之義ハ遠所之平田郷はしめ所々より引越候者共ニ御座候得者壹歩蒞之御田地も持不申候ヘ共其節者壹軒之家内ニ人數兩三人宛ならて無御座候ニ付御上より被下置候御飯米ニて何様ニも相續仕御林茂出精仕植付來候ヘ共最早五十年相立候ニ付只今ニ至家内大勢ニ罷成何様ニも可仕様無御座候ニ付近年ニ至表田等少々宛作リ肥等モ澤山ニ入隨分精ヲ入段々田も肥候様ニ相成候ヘハ地元より作田被取揚幾年之心當間違或ハ不作等之節ハ差引之次第ニ寄地元江差上ニ致候ヘバ小米并しいな之類も手ニ入不申必至



難儀仕候間依之村方自分之御田地少々も切興植付簀垣之隙ニ妻子を始取掛リ耕作仕候て御林植付飯米之足リニ仕度奉存候間以御慈悲右拙者共へ御預被下置候永地今度御田地ニ開發被仰付被下置度奉願候彌奉願候通被仰付被下置候ハ、子孫永續仕御林彌以出精仕植付可申與一統難有仕合ニ可奉存候

右之趣乍恐幾重ニも厚く御願被仰上被下置度村方一統奉願候爲其先年御渡被成下置候繪圖面寫し取差添乍恐書付を以奉願候以上

寛政八年辰六月  
藤崎村惣名代 御百姓 安右衛門  
惣 四郎  
長人百姓 八十郎  
肝煎 四郎右衛門

岡本善作殿

コノ願ニ對シ利害ヲ異ニスル白木青塚宮野内三村連合シ異議ヲ稟申シ一條ノ紛紜ヲ惹起シ葛藤結ンテ久ク解ケサリシガ享和二年ニ至リ本村ノ利運トナリ尋テ堤二ヶ所用水堰三筋ノ堀割ヲ許可セラル事ノ顛末谷地一件書ニ詳カナルモ繁キ

ニ依リ之レヲ畧ス

爾後戸口繁殖シ文化六年ニ至リ四十三戸ノ民居ヲ有セリ往時荒漠不毛ノ砂山ニシテ世舉リテ絶壁ノ赤地ト委シ去リシヲ僅カ六十余年ノ間ヲ以テ鬱蒼タル森林トナシ附近ノ村民藉リテ永ク風砂ノ害ヲ免レ各々其生業ニ安ンスルヲ得ルノミナラズ遠近コ、ニ移住スルモノ年一年ヨリ多キヲ加へ終ニ郡内有數ノ村里トナレリ必竟スルニ藩主ノ施設宜シキヲ得且年々風除簀垣ノ費用ヲ補助シ其成功ヲ速カナラシメシノ致ス所ナリト雖抑亦四郎兵衛等及佐藤父子挺身着鞭シ堅忍不拔ノ氣慨ヲ以テ斯業ニ盡悴セシニアラサレハ焉ゾ能クコ、ニ至ルヲ得ン

(佐藤四郎太文書)

遊佐郷諸木植付砂除簀垣入目錢之内被下置受取申事

一錢拾三、八百八十四文

右者遊佐郷藤崎村并青塚村仁助曾根原傳藏植付共簀垣入目遊佐中より出方無御座候分郷御普請金之内より被下置請取申候處實正ニ御座候相渡申候様御末書被成下置候 以上



文化十年酉十月

藤崎村

長人百姓 八十郎

肝煎 四郎右衛門

青塚村

長人百姓 嘉左衛門

肝煎 仁助

同 多右衛門

曾根原傳藏

加判

今野喜七

齋藤隼之助

御代官所

文化十一年戊三月御家老中御下り被成候節書上申候扣

覺

一三百七拾六間

但享和元酉年迄藤崎村に二重簀垣被仰付候分七百貳拾間之内三百四十四間曾根原安藏の御預ヶ地ニ相成候ニ付仕様

此御入用

一七百五拾三本

長八尺立杭間數三百七十六間之場處壹間ニ付二本ツ、代壹木ニ付九文ツ、

此代金六ヶ七百七十七文

一大繩七束五把貳分

ふち繩并釣繩共間數右同斷但壹間ニ付六尋ツ、代壹把ニ付三文ツ、

一中繩壹束八把八分八厘

下ふち繩并結繩共間數右同斷但壹間ニ付七尺五寸ツ代壹把ニ付壹文六分ツ、

此代錢三百文

一簀百八十八枚

高六尺長貳間々數右同斷代壹枚ニ付十八文ツ、

此代錢三ヶ三百八十四文

一藁七十五把貳步

間數右同斷拾間ニ付貳把宛之積代壹把ニ付貳文ツ、

此代錢百五十文

錢ヶ拾貫五百六十七文

右者藤崎村御林之内砂山吹亢之場處二重簀垣七百貳拾間之内三百七十六間砂留簀垣御入用積書差上申候 以上

戊三月

長人百姓 八十郎

肝煎 四郎太

加判 齋藤隼之助

御代官所



同月書上ケ候藤崎村大寶垣間數之覺  
一長貳千七百八拾間  
藤崎村濱山植付場處寶垣間數

右ハ五十八年巳前寶曆七年丑ノ年内四百三十七間享和二年亥年曾根原傳藏ノ御預ケ地ニ相成申候  
残り間數二千三百四十六間ニ御座候所當年相改申處貳千貳百五十四間ニ御座候

一錢貳拾七、七百六十八文  
右寶垣入用錢  
年々被下置候

内拾三、八百八十四文

上より被下置候

内拾三、八百八十四文

遊佐中より差出候分

右之通濱山植付場處寶垣間數如此ニ御座候

戊三月

佐藤氏 藤左衛門名ハ重光酒田中町ノ人ナリ東禪寺城代志田修理亮ノ末裔ト稱ス  
家頗ル富ミ醸造ヲ業トナセリ

參照 (家記 佐藤々藏自筆ノ記  
録ナリ以下同シ之)

天明二寅年御代官御内衆より紙面之寫

幸便を以得御意候彌御堅固御勤珍重ニ奉存候然者別紙之寫杉山金右衛門様 ○御家  
老ナリ

ヨリ御聞被成度由御内々兩人御頼ニ御座候近日幸便之節被仰遣度候右之趣私共  
ヨリ得貴意候様兩人被申付候 以上

四月五日

佐藤多四郎

小野伊惣治

(藤藏改名)  
佐藤々大夫様

別紙之寫

一藤崎村佐藤々大夫先祖ハ上杉家酒田城代たりし志田修理なるよし實説ニ候哉  
書物又ハ聞傳書等有之候ハ、委敷御書付可被下候書物ハ寫ニて見申度候不束  
ニても不分明ニても申傳成共御書付可被下候 以上

五月七日出之貴書九日ニ相届拜見仕候然者先祖書早速指上可申處相尋候事有之延  
引罷成候則別紙横折世悴半内を以差上申候間宜敷御取成被仰上可被下奉願上候以  
上

五月十二日

佐藤々大夫

小野佐藤宛

横折 覺

上杉景勝ヨリ酒田城代として被指置候志田修理最上勢と戦負吹浦間道觀音森を越  
下筋へ落行被申候節幼男子一人有之酒田ニて兼々知音之和尙へ養育之義頼置被申  
候和尙幼息召連平田郷金生澤村に忍居候て年月を過し候て此幼息へ出家を勸候へ



共得心不仕候ニ付止事を得ず十二三歳の時酒田染屋小路佐藤九郎左衛門と申者和尚俗縁有之ニ付右男子を子分ニ差遣候處九郎左衛門娘を娶せ男子一人出生仕藤々左衛門と名付候て九郎左衛門家持ニ致し染屋家業爲致候右藤左衛門義者拙者曾祖父ニて拙者迄代々實子ニて相續仕候右之次第躰ニ仕候書物等ハ無御座候へ共志田修理幼息を和尚へ相頼候節譜代相傳之家來兩人付置候處年立候て右男子も九郎左衛門子分罷成候節兩人之内壹人ハ酒田安祥寺塔頭ニ罷成雲正寺と申候て今以相續仕壹人ハ由利郡小瀧村修驗ニ罷成龍山寺と申候て是又今以拙者家へ主從之摺挨ニて出入仕候右兩人所ニハ近年迄體成記録も御座候處何茂度々之類燒ニて燒失仕候由金生澤村治兵衛と申御百姓長命仕拙者幼少の頃前段之次第委敷物語仕候拙者方へ修理幼息へ讓申候由之作佛如來一体祐定之馬手指壹腰今以所持仕候右ハ御内々之御尋ニ付乍憚以書付申上候 以上

寅 五月

佐藤々大夫

○此覺書ハ杉山氏ノ庄内御郡中古事舊跡書ニ收メラレ共事跡ハ人口ニ膾炙スル所ナリ然レ志田修理ハ酒田開城ノ後チ直チニ會津ニ歸リ上杉氏米澤ニ移サル、ニ及ヒ亦コレニ從ヒ子孫永ク同家ノ重臣タリシコト既ニ惣説及酒田城ノ下ニ述フル如クナレバ觀音森ノ間道ヨリ下筋ニ落行ト云ヘルハ頗ル疑フヘシ

人トナリ個儻ニシテ大志アリ常ニ以爲ラク男兒世ニ在ル當サニ邦家ノ爲メニ功

名ヲ圖ルヘシト會々延享二年六月三日鐵文長老林泉寺了重和尚有司ノ命ヲ衛ミ川北巡錫ノ歸途酒田二次ス藤左衛門其旅宿ヲ訪フ兩僧備サニ風砂ノ慘狀ヲ語り之レガ救濟ノ方法ヲ諮問セラル藤左衛門感慨ニ禁ヘズ斷然決スル所アリ爲メニ百年經營ノ事業ヲ畫策シ其方略ヲ説ク兩僧歸リ之レヲ有司ニ復命ス越エテ十一月十七日了重有司ノ旨ヲ齎ラシ來リ翌十八日嫡子藤藏名ハチ携ヘ歸リ有司ノ間ニ幹旋シ同月廿九日ヲ以テ藤藏ヲシテ西山植付ヲ請願セシム

(家記) 往古ハ此地も草木茂りし事

七八十年已來までハ樹木ありしを民枝を伐り根を掘られて砂山となり西風はけしく砂吹立ること數十年にして近村之田畠悉埋又濱畑ニ船通とて諸山より流れ落る水筋有りしを冬より春の風に砂飛入て川筋埋水の落口もなくして湖水ニ見えしこと宮野内新田村ヨリ吉出川迄南北大概其間二里程之御田地一面水湛諸鳥の寄ること湖水を塞く近村之民早朝ニ水邊をまわれハ鷹すりの鳥日々四五羽宛ひろいしとなり又川北郷之獵師此地ニ集りて鳥を打つこと年久し水邊に鳥打小屋とて數十ヶ處かけならべ春の風はげしき時ハ浪之立事蒼海ニもおとらし萬町之田面も植付ならず貢船の通路もならざるにより三月ヨリ四月末ニ至迄數萬の人夫を以て川筋を



尋掘りて水を落し他村の田植の比漸田をらちしとなり然を防かんと服部外右衛門殿寢食をわすれて是を御病ツレられ鐵文長老林泉寺了重和尚を並應御頼ニ付兩御僧延享二年丑六月二日ニ酒田の御下り翌三日遊佐郷西濱の御出吹浦村迄御通り御返リニハ酒田中町富樫七左衛門と云者ニ御一宿被成候節我父藤左衛門致見舞西濱之様子御尋申候處兩御僧被仰候ハ先年とハ大ニ違ひ御田地の砂飛入年々作毛も悪く殊ニ上御物入尙又川北御百姓の人夫の費數萬人也今三四年の内ニハ遊佐郷亡所ニ及ふべしとて甚御歎有りしかハ藤左衛門申せしハ御上之思召いかと御尋申候ハ御僧被仰候ニハ御百姓迷惑之筋度々申出候へ共御上ニて如何共難被成場處ニて御難澁ニ被思召依之御頼故罷下り候其許彼山の植付之萌も有之哉と被仰けれバ父藤左衛門答候ニハ御上ニて御難澁ニ被思召其上御百姓難儀筋依之御植付被成度御思召之段承知仕候拙者兼々心懸候ニハ一生之内何かをして世上の調法ニも相立可申儀を望居候間遊佐濱植付之義試可致段申候ハ植付の趣御尋被成候ハ藤左衛門答候ニハ先年ヨリ植付致度被仰付候へ共諸木付兼候義植はなしニ致置候故と存候拙者ニ被仰付候ハ代家成共右場處ニ作夏冬共ニ植付見續爲致候ハ成就可致と申候ハ兩御僧被仰候ハ兼て承候ニハ貴殿ハ名有武士之未なりと聞承候ハ彌々植付致くれ候ハ御上へも其許先祖之品をも申上此度之義ハ萬民の苦みを救植付なれば成就之上ハ嫡子藤藏義如何様にも取持可申とて兩御僧鶴岡の

御歸也

一同年荒瀬郷市神村西砂山を海の新川堀通し不申候へバ遊佐郷滅亡之趣申上候處荒瀬郷ヨリ申上候ハ新川堀切被仰付候てハ荒瀬郷砂埋ニ相成候事遊佐郷ヨリ迷惑之趣申上候ニ付同年秋御郡代服部外右衛門殿川北御檢見之節御郡奉行伴幸右衛門殿御代官中世古嘉右衛門殿同本多權藏殿同萬年傳吉殿其外川北三組之役人砂山の寄集リ御評議之上新川堀切人足積リ等御沙汰有之候處凡貳拾萬人にても出來無心元様子其節服部外右衛門殿平田郷大庄屋佐藤縫殿助御郡手代渡部清八兩人を召て舟通御普請様子御尋被仰候ニハ酒田中町藤左衛門中通リ濱山の家を建植付致し夏冬見續爲致候ハ、可然思召ニて平田郷中野俣村四郎兵衛同郷飛鳥村安右衛門兩人を被召遊佐郷濱山の居村相立植付可相成哉と御尋被成候て御歸也一同年十一月十七日鶴岡荒町林泉寺了重和尚御出被成被仰候ニハ兼て遊佐郷濱山植付之義御郡代中の申上候處御満足ニ被思召就夫此度可被仰付様子ニ候間明日拙僧同道ニて藤藏爲登候様ニ被仰候ニ付翌十八日鶴岡へ罷登同日鐵文長老服部外右衛門殿へ御内意申上候處御代官中世古嘉右衛門殿へ御添狀一通被遣明日藤藏へ爲持嘉右衛門殿へ參リ候様被仰下候ニ付拙者嘉右衛門殿御宅へ參御狀差出候處廣間へ參候様ニ被仰候故廣間へ參候處植付願書草案被成下兩御僧の掛御目明朝此方持參致候様被仰渡候故翌十九日嘉右衛門殿草案持參候處御郡奉行所御



代官衆御揃御郡代所の御内見ニ被指出候處御披見後則草案拙者に被下候て被仰渡候ニハ酒田歸り本書相調御町役人共ニ加判爲致勝手次第ニ此方の持參可致旨被仰付候就夫酒田御町奉行豊原多助殿の御郡代所ヨリ御狀壹通被遣候其節願書之扣

乍恐書付を以申上候事

遊佐郷砂山之内植付段々被仰付候趣奉承知候依之申上候右砂山之内植付場被下置植付見申度奉存候植付之義ハ兼々拙者好き申方ニ御座候且又成就致候ハ遊佐郡御百姓之爲ニも相成候義ニ心付申候間乍恐如是申上候願之通被仰付被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候委細ハ別紙を以申上候 以上

丑十一月

酒田中町

年廿八 藤藏

肝煎 清助

栗林新右衛門

かゝや圓次郎

御郡奉行所

御代官所

横折 覺

一長四拾町程 幅ハ海際迄有次第 但御用地ヲ除

一右地方被下置候ハ、來春中打杭成仕指置申度奉存候

一來春中右地方之内に小屋成共作り置折々罷越植付之工面仕度奉存候

一植付急ニハ成兼可申候間來年ハ少々も植付可申候先ッ苗木等之支度取掛可

申と奉存候

一貳三年之内ニ家業を弟ニ相渡シ拙者儀植付場處へ引越精働可仕ニ奉存候

右奉願候通植付場所被下置候ハ、難有仕合可奉存候 以上

丑十一月

酒田中町

願人 藤藏

肝煎 清助

栗林新右衛門

かゝや圓次郎

宛所同斷

右願書中世古嘉右衛門殿へ持參候處兩御役所御揃同廿九日御會所ニ願書被差出候處御家老中ヨリ兩御役所へ被仰渡候ハ宜敷願ニハ候へ共大切之御地方故江戸表へ



申遣 御聽ニ達し追て可申付と被仰出候由嘉右衛門殿被仰渡候藤藏ニハ今度ハ勝手次第ニ引取候様ニ被仰渡候故引取申候

同年十二月十二日藩主深ク其篤志ヲ嘉ミシ四十町ノ區域ヲ藤藏ニ下附セラル是ニ於テ一面ニハ廣ク各種ノ苗木ヲ蒐集シ一面ニハ代家設立ヲ計畫シ其敷地ヲ點檢セントシテ翌三年正月十六日藤左衛門父子了重和尚等相携ヘテ西山ニ趣クノ途鹽出尻ニ於テ烈風ニ遭遇シ果サスシテ歸リシモ翌十七日了重ノ歸鶴ニ托シ家作ヲ出願シ十九日之レヲ聽サル廿六日代官立會シ植付區域ヲ檢分セラレ同三年九月三日四郎兵衛等ト共ニ植付場所ヲ踏査シ各境域ヲ區劃シ相侵スナカラシム同月十七日代屋建築ニ着手セシガ烈風ノ爲メ用材ヲ埋没セラレ地面ノ高低一ナラズ敷地ノ位置ヲ易フルコト五六度毎ニ非常ノ困難ヲ極メ廿六日ニ至リ功ヲ終ヘ樽川新田嘉兵衛ナルモノヲ代屋守トシテ之レニ移住セシム是時ニ當リ四郎兵衛等ハ既ニ移住ノ準備ヲナシツ、アルモ未タ之レヲ實行スルニ及ハズ廣漠不毛ノ赤地ニ初メテ一棟ノ人家ヲ點スルニ至レリ實ニ之レ西山氏居ノ嚆矢ナリ

斯クテ下當村傳三郎ヲシテ同居セシメ藤佐衛門父子交々來リ是レニ起臥シ植付ニ着手セラレシガ吹荒ム土砂ハ戸壁ノ間隙ヨリ侵入シ幾ント湯茶ヲ飲ムニ堪ヘサラシメ甚キハ大澁紙ヲ張り之ヲ防キ晝夜寢具ヲ被キアリシト云フ當時ノ辛酸想フヘシ遠近其志ヲ壯ンナリトシ諸木人夫ヲ寄贈スルモノ頗ル多カリキ

(舊例秘録) 右者 ○前項掲載ノ植付願書ヲ云 酒田中町藤藏植付場所奉願候處延享二年丑閏十二月十二日願之通江戸表ヨリ被下置候由申來由服部外右衛門殿ニ被仰渡候右願書寫ナリ本書ハ御郡奉行所衆ノ差出置候 右願之通藤藏ニ植付場相渡候ても今度五軒之者植付場之障ニハ相成不申候哉藤藏各ノ參リ候筈ニ付對談之上評議候様御代官衆ヨリ申參リ候

(家記) 延享二年丑閏十二月十一日夜九ツ時半飛脚參着ニ付翌十二日早朝鶴岡ヘ罷登候御狀之寫

以飛脚申達候然者先達て被相願候遊佐濱之内植付場處彌々願之通可被下置旨今度江戸表ヨリ申來候段今日御郡代所ヨリ被仰渡候難有可被存候右爲可申達如斯ニ御座候明日中ニも御禮被相登可然存候 以上

閏十二月十一日



中世古嘉右衛門  
進藤 宇十郎

中町 藤藏殿

右御禮相廻り候御役所扣 御郡代服部外右衛門殿同進藤谷六右衛門殿御郡奉行進藤谷惣兵衛殿御代官中世古嘉右衛門殿同進藤宇十郎殿 右御役所御禮相仕廻同  
月十三日酒田罷歸候 同十四日ニ遊佐郷大庄屋石山次郎右衛門方へ届ニ參願之趣  
御咄申候尙又翌日傳太郎方へ參届申候 延享三年寅之正月十一日中世古嘉右衛門  
殿へ年禮ニ參候節申上候ニハ檢地御奉行御下不被成候へ共植付見申度段御咄申上  
候處早速願書相認可差出旨被仰候間願書草案相調本書追て差上可申由ニて同十二  
日林泉寺和尚御同道ニて酒田罷歸候同十三日ヨリ大荒ニて十六日大風吹候へ共和  
尙右砂山に御出御見分被成候其節人數付親藤左衛門藤藏又三郎代家喜兵衛家頼仁  
兵衛以上六人ニて鹽出尻迄參候處大風ニて右今之難儀 不明 休候同十七日和尙鶴岡  
へ御歸り被成候故願書相認和尚を以願書差出申候

願書之扣

一家壹軒

下當村

傳三郎

家内三人

母一人

娘一人

一家壹軒

樽川新田村

喜兵衛

右同斷

妻一人

右貳軒植付場之内へ家作仕濱植付場に爲引越精働仕度奉存候彌被仰付被下置  
候ハ、難有仕合ニ奉存候 以上

寅正月

酒田中町

藤藏

御代官所

右之願被仰付候趣同十九日御代官所ヨリ御狀被下候御狀之扣

先般相願候遊佐郷濱植付場之内御百姓貳軒引越致家作候義申上候處願之通被

仰付候間勝手次第ニ早々家作可致候右爲可申達如此ニ御座候 以上

正月十七日

中世古嘉右衛門

進藤 宇十郎

酒田中町 藤藏殿

正月廿六日御代官衆酒田御下り被成候由承御見舞罷出候處今度御巡見様御用ニ付  
青塚村へ罷越候其許同道可然候大庄屋共も可參候間家作場處致相談場處見置可然  
旨被仰候間青塚村へ參致一宿候處大庄屋衆も御用取込ニて植付場處立會成兼候ニ



付宮野内村肝煎半内を差遣候間指障も無之場處御見分可被成と被申候間半内同道ニ砂山見分致し酒田へ罷歸候  
 二月二日急村繼を以吹浦村ニ可參由大庄屋衆ヨリ申參候故吹浦へ罷越候處平田植付人共參候て砂山植付境見分置候由御代官衆ヨリ被仰出候間同三日ニ四郎兵衛安右衛門惣右衛門宇兵衛同道ニ砂山見分致酒田歸候  
 二月四日遊佐郷山崎村善三郎方へ參リ樽川新田喜兵衛ヲ呼寄彌々砂山の家作致候其方家直段何程ニ賣申度承候處米五表ニ賣拂申度段申ニ付米五表買求申候同十日ニ家取ほごし小服部村出道橋邊迄相届申候  
 同十七日小服部村又左衛門參濱山の家作致候内宿借リ居申候家ほごし候節手傳人數合廿人○人名右家材木いかたニいたし同十一日手傳人數四人ニ引登同十二日手傳四人雇六人ニて丸子村出道橋迄引付る同十三日手傳三人外雇十一人同十四日手傳三人雇十一人ニて小服部村出道橋邊迄引付……廿五日より廿六日迄……家立候節濱山へ始て家立候事故萬端不自由成事難筆紙候喜兵衛家出來後傳三郎も喜兵衛同宿ニて植付致居候其後四郎兵衛安右衛門等家作之砌喜兵衛宅ニ居候て普請取掛候  
 一喜兵衛家材木地取屋敷取運ひ之節西風はけしく砂吹寄屋敷ハ不及申材木等砂埋ニ相成爰かしこと尋堀出し地形を仕直し候事五六度ニ及ひしとなり

一諸木植付致候内了重和尚親藤左衛門喜兵衛參居候て植付出精致し候節春風はけしく家内ニ砂飛入朝夕湯茶等吞兼ること數度ニ及ひ候事晝夜々着蒲團をかむり大澁紙を以飛入砂をしのさしなり  
 植付苗木諸方より集りし事

- 一指柳貳荷井うつ木壹荷酒田新地東町 兵助より手傳 一同壹荷荒瀬郷安田興屋村善右衛門 より手傳但酒田迄届候テ 一同壹丸明寒坊より手傳
- 一同壹荷酒田八軒町金三 郎方より手傳 一同壹荷酒田古米屋町九 助方より手傳 一指柳壹荷中町善九 郎方手傳 一同壹荷福升村嘉助方 福升村八藏方より 植付場ニ而手傳 一指柳外諸木共ニ壹荷下小松村宗泉 寺植付手傳共 一合歡之實壹升下當村久五郎 方より音物 一藤ノ實三升女鹿村孫右衛 門方より同斷 一唐土きび四斗買求候代六百文但植付場之内 二まき申候
- 一芳之實壹表傳馬町彦次郎 より實申候 一帯の實四升きば木の實貳合明寒坊より實申候 一柳二本大井村 子供
- 一柳壹本草根小服部子 供實申候 一柳壹荷下野澤村次左 衛門方手傳 一諸木根付貳駄尾伏村永泉 寺より手傳 一唐土きび三升代百五文買求申候 一柳壹荷橋本村喜八方より手 傳但植付場届候而 一楸九十本下當村清八方 より手傳同斷 一藤木三荷
- 買求植 一植付手傳山崎村仁助同村九助同會兵衛同村佐次右衛門同村彌左衛門中野目村鴨石衛門同村市左衛門同村惣 助郡山村彌五兵衛櫻林村かけ左衛門瀧之澤村四郎兵衛天神堂村勘兵衛茨野澤村甚右衛門小眞木村 新田村八右衛門北興屋村兵右衛門都合十八人 一松木千本平田郷三之宮觀音講中 手傳但酒田迄届候而 一諸木四十本宮野内村 茂右衛門
- 九郎左門堀之内村四郎左衛門本川村助五郎茨野 方より 一合歡木三十五本泉新田村勘三郎 方より實申候 一楸柳取合壹荷下野澤村惣吉方より 植付場迄届候而手傳 一楸柳取



合壹荷 同村勲十郎 方より同断  
 一 諸木壹荷 落伏村彦左衛門 方より同断  
 一 諸木壹荷 宮野内村彌左衛門 方より同断  
 一 同壹荷 同村勲十郎 方より同断  
 一 柳壹荷 同村新右衛門 方より同断  
 一 柳壹荷 同村甚 衛より同断  
 一 同壹荷 同村甚 衛より同断  
 一 同壹荷 同村小太郎 方より同断  
 一 合歡木 同村甚 衛より同断

一 同壹歇 同村五郎左衛門方より同断  
 一 同壹歇 同村彦左衛門 方より同断  
 一 同壹歇 同村小太郎 方より同断  
 一 合歡木 同村甚 衛より同断

四本 宮野内村權四郎 方より同断  
 一 諸木壹荷 同村彌五右衛門方より同断  
 一 楸木壹荷 下當村惣右衛門 方より同断  
 一 柳壹荷 外楮 方より同断

丸千村五郎左衛門方より同断  
 一 同壹荷 同村五右衛門方より同断  
 一 同壹荷 同村甚左衛門 方より同断  
 一 同壹荷 同村甚左衛門 方より同断

一 楸壹荷 下當村清八方より同断  
 一 植木取合貳荷 八日町本願寺 方より同断  
 一 同壹荷 宮野内村惣左衛門 方より同断

壹荷 外野村藤四郎方より同断  
 一 茅の根壹荷 酒田迄屆候而實申 八軒町金三郎 方より同断  
 一 西海地木卅本 右同断 寺町與惣右衛門 方より同断

歡之實三合程被下候 遊佐郷御代官中 世古嘉右衛門殿  
 一 植木壹荷 此人足遣實候 外野村喜三郎 方より同断  
 一 同壹荷 八日町村本願寺 方より同断

一 柳壹荷 砂山迄屆候而實候 荒瀬橋本村喜八  
 一 うつき貳荷同貳荷 此方より人馬遣候而 實候山崎村善三郎 方より同断  
 一 合歡木七十本 砂山迄屆候而實候

宮野内村 茂右衛門  
 一 植付木壹荷 右同断 下當村常恩寺 方より同断  
 一 小豆餅壹鉢 三月廿七日植付爲見舞 實候平田横代村丹十郎 方より同断  
 一 しらじ木五十本 此方より人遣候而實候宮野

本 砂山迄屆候而實候 丸千村五郎右衛門  
 一 同壹荷 右同断 同村 方より同断  
 一 植木壹丸 植付手傳二日 福升村嘉助 方より同断  
 一 茅の根貳荷 此方より人遣候而實候宮野

内村惣左衛門  
 一 植木壹荷 砂山迄屆候而實候 候山崎村善三郎 方より同断  
 一 菓子箱壹ツ 但貳百入砂山迄見舞 教壽院いかりや庄兵衛 方より同断  
 一 植付手傳 一日 福升村嘉助 方より同断

一 植木四十本 此方人造候而實候宮野内村彌五右衛門  
 一 草之根壹荷 砂山迄屆候而實候 山崎村善四郎 方より同断  
 一 木の實壹升 大内目村 文内 方より同断

同年四月十八日御郡代服部外右衛門植付場ヲ巡視ス酒田町奉行豊原多助爲メニ  
 きばノ實ヲ贈ラル此月民家ヲ購ヒ西山ニ移建シ代家トナシ傳三郎ヲ住セシム五  
 月廿四日了重和尚ニ托シ植付成績ヲ御郡代所ニ稟申ス

(家記) 服部外右衛門殿寅四月十八日ニ植付場處御見分其節酒田へ御歸り豊原多  
 助殿へ御咄被成候へばきばの木之實三合程被下候  
 一 古家壹軒買取候 但傳三郎 家ニ成 代錢貳貫貳百文……………手傳者落伏村藤右衛門より二人北  
 目村五兵衛より二人富田村善兵衛より壹人其外喜兵衛傳三郎兩人ニテ傳三郎家  
 相立候

寅五月廿四日鶴岡林泉寺和尚植付場御覽植付場處草之實候場處横折ニ相調御郡代  
 所へ御内見ニ入候  
 一 植付場處東西貳町南北貳町但木數拾萬位  
 但此間ニきびほうきの實まき候  
 一 きば木の實三町之場壹返まき候 但長壹寸程生  
 一 唐きび東西五丁南北壹丁 植付場之南ニ蒔 但長サ壹寸五分程生  
 一 同東西壹丁南北貳丁 但植付場處より西方へ藤  
 一 同東西壹丁半南北三丁半 但右場處より尙又西方へまく



右三ヶ所種六升

- 一 藤木の實貳升但長六寸程生候
- 一 合歡の實壹升三合但長貳寸程ニ生候
- 一 西海地の實壹升但長貳寸程生候

右之場處九間ニ三拾間

- 一 五合麥貳升共吹飛少茂生不申候
- 一 稻きび貳升但長サ壹寸五分程生候
- 一 ほら木實壹斗貳升但長五分程生候
- 一 木之實取合壹升少々生候 但さんじゆの實多し
- 一 八幡いもの實壹升不殘生候へ共鹽風ニ而葉枯候
- 一 竹根八荷植候場處へ竹の子生候

右寅年植付場處草木實蒔候場所如斯ニ御座候

此秋藩費ヲ以テ藤崎村植付場ニ風除簀垣ヲ建ツ施設宜シキヲ失ヒ土砂藤藏力植付區域ニ堆積シ幾辛酸ヲ嘗メ子育セシ諸木悉ク埋没セラル同四年二月更ニ諸木苗實ヲ採集シ青塚服部興屋ノ東方南北大凡三百間ノ處ニ植付ケシモ成績不良ニ

屬セリ

(家記) 延享二年秋植付場處の砂除簀垣被仰付候へ共濱山の引越之者共何と心得候哉拙者植付場處へ簀垣不致拙者境ニ東西ニ簀垣折まげ致候故簀垣之南の砂吹寄拙者植付候諸木指柳等ニ至迄砂埋ニ相成候又南端之植付柳諸木ハ砂吹飛根あらはれ育兼候

延享四年丁年去寅之年植付砂埋ニ相成候ニ付植付場處を無據取換青塚服部興屋兩村之東の南北長サ三百間程諸木植付候苗木取寄せ候事

- 一指柳壹荷二月十七日中嶋村吉右衛門方より實候植付場迄届候而 一切柳壹駄二月十八日下當村甚太郎方實右同斷 一 藤木二百四十本二月廿四
- 日買取候實主 一指柳壹駄三月二日山崎村善四郎方 一指柳壹荷三月十一日下當村與右衛門方より手傳同斷 一 藤木四
- 下當村與次郎 千七百本買取候下當村佐兵衛より買求候 一同千九百本買取候實主下當村惣治郎 一同千三百本買取候實主下當村善三郎
- 一同六百本買取候木賣同村惣右衛門 一同千八百本買取候木賣同村作十郎 一同九百五十本買取候木賣同村清八
- 一同千五百六十本買取候木賣北福升村八錢 一同六十本下當村彌助方より手傳候但植付場迄届候而 一 諸木合壹荷下當村重助方より手傳右同斷
- 一指柳壹駄山崎村善三郎方より手傳右同斷 一 藤木千百六十本買取候木賣下當村與次郎 一同貳千百本買取候木賣山崎村善三郎
- 一同八百本買取候木賣下當村彌助 一同貳百本買取候木賣同村與次郎 一同五百六十本買取候木賣北福升村八藏



- 一同五百四十本 買取候 木賣下當村清八
  - 一同千拾本 買取候 木賣同村彦兵衛
  - 一同三千三百本 買取候 木賣同村惣右衛門
  - 一指柳壹荷 下當村惣右衛門方より 手傳植付場迄届候而
  - 一藤木六百本 買取候 木賣下當村惣七
  - 一同貳千貳百本 買取候 木賣同村九左衛門
  - 一同貳千三百本 買取候 木賣同村彌助
  - 一同百本 買取候 木賣同村惣次郎
  - 一同五十本 買取候 木賣同村惣七
  - 一同五百本 買取候 木賣同村久五郎
  - 一諸木壹荷 下當村惣次郎方より 手傳植付場迄届候而
  - 一諸木取合貳駄 尾伏村永泉寺より御 手傳植付場へ届候而
  - 一諸木取合三荷 丸千村五郎左衛門 方より手傳右同斷
  - 一諸木取合貳駄 尾伏村永泉寺より御 手傳植付場へ届候而
  - 一茅之根貳荷 宮野内村吉左衛門 方より手傳右同斷
  - 一がざ木五百本 酒田細肴町久三郎 方より手傳右同斷
  - 一茅之根壹駄 同村次兵衛方より 手傳右同斷
  - 一指柳壹駄 中嶋村吉右衛門方 手傳右同斷
- 右卯春中植付木數拾荷馬にて七駄外ニ木三萬三拾本
- (明和六年丑四月植付横折 佐藤々々 藏書上) 延享三年秋 御上ヨリ植付被仰付候場所ハ砂除簀垣不被仰付候故拙者植付悉砂埋罷成候依之翌年より青塚服部與屋兩村より東之方ニ諸木植付仕候
- 一廿三年以前延享四卯年諸木植付候場所服部與屋青塚兩村ノ東ノ方江南北長サ三百間程東西者百五六拾間より六七拾間程ニ植付仕候
  - 一同年代家共兩人二月より四月迄楸藤山よりコガセ植申候
  - 一諸木取合廿六荷知音者より貫植付仕候
  - 一合歡木貳萬五千本買求植申候

一同年右諸木ノ内白木村より東北ノ方へ試植付仕候へ共育兼候

一同年宮海村より東ノ方へ諸木萱根等植付候得共合歡木計育候外ニ茅萱少々育申候

一去年中植付諸木砂埋ニ相成草木育兼候段了重和尚へ相歎候へハ和尚被仰候ハ至テ難澁之地故自力計ニテハ中々成就ノ程遅リ可申此上ハ神佛ノ力ナラテハト被仰候間何佛ヲ信スルモノト相尋候へハ地藏菩薩ト被仰候ニ付則石地藏六体代屋前ニ相建候

开モ成績ノ不良ナルハ土地輭鬆ニシテ風力ノ支フヘキモノナキニ因レリ是ニ於テ同年七月十六日人ヲシテ精靈ニ供ヘシ濱茄子ヲ拾取セシメ其他各種ノ草子ヲ採集シ之レヲ播植シ土砂ノ飛散ヲ防キ且ツ植付區内ニ家作シ藤左衛門之レニ住シ親ラ保護監督ノ勞ヲ取り拮据經營ノ餘稍々成績ノ見ルヘキニ至レリ寛延二年藩主藤左衛門父子ノ精勵ヲ嘉ミシ廩米七俵ヲ賜フ

(明和六年植付横折) 延享四年七月十六日了重和尚人夫ヲ頼川原ニ出鶴岡中ニテ流候濱ナス御拾被成拾表船ニテ被遣候拙者義も同日酒田中ニテ流シ候濱ナス八表拾取合十八表翌春濱山へ親藤左衛門大勢ヲ以テ蒔申候其種所々生出植付林ノ中ニ濱



ナスノ木多ク御座候

- 一 同年秋濱松ノ種六斗大山大瀧藤左衛門ト申者相頼置求蒔候へ共一切生不申候
- 一 同年秋諸方より濱草種用意仕候
- 一 同年秋酒田妙本寺相頼寺中より合歡之種三拾表用意仕候
- 一 廿二年以前寛延元辰年植付之義去年場所へ植添植出仕候
- 一 代家共義二月ヨリ四月迄楸藤山ヨリコカセ植申候
- 一 諸木貳拾荷知音ノ者ヨリ貫植付申候
- 一 濱松ノ根拾八駄買求植付申候へ共一切育不申候
- 一 萱根三拾三荷買求植候へ共甚育惡敷御座候
- 一 合歡木壹萬四千本買求植申候
- 一 同年三月廣野谷地ヨリ柳萱根七カマトノ木コギ集獵船壹艘相頼青塚村迄積下青塚村外ヨリ服部興屋村カゲマテ植付申候
- 一 同年春植付ノ後濱草種服部興屋村端ヨリ宮海村南之方迄草種蒔申候大概不殘生出八九年前迄畑ノ様ニ相見申候近年ハ一面ニ草生ニ罷成候風吹候節蒔候草種飛散植付林ノ内ニ止リ先年無御座候濱草多ク御座候ハ親藤左衛門草種蒔候故ト奉存候
- 一 同年秋植付場處の家壹軒相建植付致候内親藤左衛門罷越居候

- 一 同年三月合歡ノ種酒田高野濱邊の中町畑ニ申テ拙者所持ノ畑御座候右場所ニ合歡種蒔置其後年々植付場迄苗木コギ取植申候
  - 一 同年秋ヨリ拙者植付場處江砂除糞垣被仰付候
  - 一 廿壹年以前寛延二巳年代家共兩人二月ヨリ四月迄楸藤山ヨリコカセ植申候
  - 一 諸木拾貳荷知音ノ者ヨリ貫植申候
  - 一 合歡木貳萬五千本買求植申候
  - 一 同年御郡奉行所ヨリ被仰出候ハ壹ケ年ノ木數書出候様被仰付候節四萬本余ノ木數言上申候
  - 一 合歡木千本平田郷大庄屋佐藤縫殿助當年ヨリ縫殿助存生ノ内壹ケ年ニ千本宛年々植付手傳致吳候其場處今ハ若林ト名付申候
  - 一 廿年以前寛延三午年年代家共兩人二月ヨリ四月迄楸藤山ヨリコカセ植申候
  - 一 諸木取合廿壹荷知音ノ者ヨリ貫植申候
  - 一 合歡木貳萬本買求植申候
  - 一 同年喜兵衛家砂吹寄及大破ニ候ニ付米三表擬仕爲致修覆候
  - 一 同年傳三郎家砂吹寄及大破ニ候故米三表擬仕爲致修覆候
- (御郡方例帳) 酒田御町人佐藤々左衛門並梓藤藏兩人遊佐郷濱山江自分物入を以諸木植付申度由志願有之ニ付延享丑二月○丑ノ下十字ヲ脱ス右兩人江濱山之内四十町之場處被下



候て植付被仰付候依之右場處江代家貳軒相立父子共ニ精勤いたし追年新林繁茂仕候旨御家老中江申上候處寛延二己年爲御褒美御米七表被下候  
 寶曆元年三月廿九日東風烈ク植付ニ從事スル能ハズ林中ヲ巡視セシニ會ク酒田方面ニ火アリ馳至レバ其家既ニ烏有ニ歸ス此際酒田ノ過半焦土トナリ親戚故舊ノ類燒ニ罹ルモノ頗ル多カリキ四月字瑠璃之壺ニ合歡木五千余ヲ植付ケ且賜フ所ノ廩米ヲ以テ畑地ヲ購入シ苗圃ニ充テ以テ斯業ノ擴張ヲ計畫セリ

(家記) 寶曆元年未三月廿九日東風はけしく吹立候故植付も成兼代家共も山ニ遣兼候て植付林之内處々見廻リ候處酒田の方ニ當リ出火相見候故代屋喜兵衛同道ニテ酒田江かけ付候殘之者追々參候大火にて東西ニ燒通し我家燒失致候故植付四五日延引ニ相成候其後右届候苗木 ○本書ニ據ルニ本數二萬五千本 植付候此年西南ノ濱山之内青塚村ヨリ宮内村通り之道筋ニ瑠璃之壺とて先年松浦音右衛門殿御郡奉行之節植付候砂埋リ之殘分合歡木十本斗育有之候故此場處江合歡木五千本程植付候是を若林と號す一己年御褒美として被下置候御米七表を以去午の年平田郷濱畑とて泉新田村邊ニ有之候畑貳割買取前々ヨリ持知之畑貳割都合四割ニ四月七日八日兩日ニ合歡の實貳斗余蒔候

是レヨリ先キ林泉寺了重和尚植付ノ事業ニ幫助シ時々西山ニ來リ其成績ヲ視察セラレシガ行程遠隔返往ニ不便ナルヲ以テ山楯村長久寺ニ轉住シ藤崎村ニ一寺建立ノ志願ヲ發シ百方苦心鶴岡總穩寺塔頭門葉軒再興トシテ此歲十一月請願シ翌二年ニ至リ之レヲ聽サル是レ即チ門葉寺ノ創始ナリ藤左衛門爲メ二年々米三表ヲ寄附ス

(家記) 近年了重和尚年ニまし鶴岡ヨリ植付場へ通ひ候事不自由ニ相成候とて平田郷山楯村長久寺江入院致被居候其後未ノ年藤崎村へ寺を建立せんとして御上江御願立られ候處ニ被仰付候則江戶三ヶ寺へ之願書ニ通左之通  
 乍恐以書付奉願候事

拙寺末鶴岡門葉軒ニ申古跡在之候處且那田地等も無御座候寺役茂勤兼候程之儀ニ付先々住石門代享保十二丁年拙寺配下本末帳ニ廢寺之趣書上候故去寅年茂本末帳相除指上申候處此段藤崎村百姓共村方ニ寺無之大雪之節者亡者等取置候事數日捨置及難儀依之門葉軒再興仕向後二三年も相暮兩本山之勸化其他門役相應ニ相勤以後退轉無之様ニ御領主表江相願申候御領主表之義ハ藤崎村惣百姓難儀之段尤ニ御開濟願之通被爲仰付候此上門葉軒再興仕御三刹御帳面ニも御載被下



置並拙寺配下廻狀等ニ相加申度奉願上候以御慈悲願之通被爲仰付被下置候ハ、  
難有仕合可奉存候 以上

寶曆元年辛未十二月

羽州庄内鶴岡

總 穩 寺

關三ヶ寺

御役宿中

一 門葉軒開山者正保四丁未年拙寺五世葉屋和尙

一 開基者小出正順ニ申候然處延寶二甲寅年小出氏致斷絶候依之及廢衰天和中拙寺

八世關鐵和尙代退轉仕候

一元和中酒井宮内大夫殿被致御拜領夫ヨリ領主御領分之義ハ大小之寺院共ニ寺

屋敷ニ申候テ諸役免許御除地同前ニ御座候尤先住龍石代御除地御改之時分も領

主役人神戸十郎御宿寺江被申上相濟申候此度門葉軒寺屋敷之義ハ領主役人中吟

味之上相濟申候

右拙寺願ニ付依御吟味書付差上申候 以上

寶曆元辛未年十一月

總 穩 寺

大 中 寺

御役宿中

寶曆二年藤崎村ニ寺建立あるへしとて了重和尚心勞被成候事筆紙延かたしとなり  
其比親病氣之爲め夏より秋迄藤崎村へも不參委敷事ハ不存候寺材木松木ニて御上  
より被下寺作料金として金十五兩御上より被下候由茅石等ハ遊佐郷中より之人夫  
を以相調候由寺普請出來候へバ且家ハ藤崎村に引越者斗尙又新寺の事なれハ諸法  
事とても御座なく候依て遊佐御代官所より米三表宛御寄附之由藤藏方より米三表  
宛惣旦家より三表宛都合九表宛ニて致相續候

同年八月廿一日藤左衛門病歿ス享年六十一、臨終ノ際諄々藤藏ニ遺命シ斯業ヲ  
失墜セズ精勵大成ヲ圖ラシム

(家記) 親去年出火後より病身ニ相成七月より病氣重晝夜付添居候て藥用等様々  
致候へ共養生不叶八月廿一日晝四ツ時過ニ病死被成候戒名心譽了安信士と號す御  
年六十一才十八日夜御氣色も重く見へ候故しばらくもはなれず付添居りしに藤藏  
へ抱かれてみたと被仰候早速御後へ立廻り二時斗リ御腰を抱へし内に先祖の被  
仰置事を言聞かすへし……我死しても跡にて植付を怠ることあらバ子孫たへる  
べし又植付に晝夜心を寄出精あらバ我か靈彼山にとまりて朝夕守神となりて禍  
貧苦わつらひの難を遠さけ子孫繁昌なること濱の草木のしけるか如しと被仰我か  
手をしつかと御しめ被成候



同年十月廿三日門葉寺中興開山了重和尚温海ニ遷化尋イテ代家守喜兵衛夫妻病死ス因テ山楯村長助ナルモノヲシテ之レニ移住セシム

(家記) 寶曆二年八月下旬親病死之砌了重和尚御出十日斗御逗留夫より温海の御湯治被成候連小國鍋倉邊の數日御逗留ニテ其後御入湯被成候處御煩被成御養生不叶十一月廿三日温海ニテ遷化也同年代家喜兵衛夫婦共病死 同年春山楯村長助云者了重和尚ヲ以藤崎村の罷出度申候ニ付壹ケ年ニ給米六表宛ニ定家作料として錢三貫文相渡候其後代家喜兵衛夫婦共ニ病死子共ハ親類方の引取候義故代家明家ニ相成候故長助を喜兵衛ニ差置候其後改名して多兵衛と申候

四年藤藏將ニ明年ヲ期シ舉家藤崎ニ移住シ疇昔ノ志ヲ成サント欲セシモ年來ノ植付ニ巨額ノ資金ヲ投シ類焼ノ損害亦少カラス爲メニ家屋建築ノ用脚ニ欠乏ヲ來シ窃ニ憂色アリ舍弟佐次兵衛人トナリ孝悌ノ志厚ク嘗テ父兄ノ事業ヲ助力セシガ深ク其心事ヲ察シ親戚等カ藤藏ノ前途ヲ危フミ分家ヲ勸ムルニモ拘ハラズ切ニ懇懇シ自己ノ所有セル田地ヲ沽却シ其用途ニ充テシム藤藏大ニ之レヲ德トシ其顛末ヲ家乘ニ特書シ子孫ヲシテ永ク厚意ヲ忘レサラシム

(家記) 寶曆四戊年此間脱葉佐次兵衛申候ハ此間之御様子段々相考候ニ至テ御難澁被成候様見請候箇様節御田地賣拂御難儀御凌可被成候尙又泉谷地田兩村御田地ハ買仁も有之間敷候拙者へ被下候とて差置かれ候平田分不殘御拂可被下候此間親類共内々ニテ拙者の別宅致候様ニと様々進メ申候へ共兄之難儀を見捨壹分之嗜を望申事さらし無御座候間早々田地御賣拂被成進メ申候其節答候ハ其方心底近比過分ニ存候也乍去其方へ讓可申金子をも失ひ其上田地迄賣拂事不仁之至と申心中可申譯様無之と申候へハ佐次兵衛涙を流御存之通拙者病身ものにて親とも兄とも御壹人斗を力ニ致居候御難儀之節ハとも手をつなき御祝ひ時ハとも祝ひ申候より外無御座候ケ様ノ事ニ御苦勞を被成御煩其上萬一之事有之候へハ拙者ハ生きて居申所存無之候間早々田地御賣拂被成御苦勞不成様ニと申ニ付天正寺町四郎右衛門方相談いたし平田分四十九表半渡リ内拾貳表御年貢米殘三十七表立上米ニ有之場處金百拾五兩ニ賣拂其節之大成難儀を凌し事佐次兵衛忠孝の志なり永く子孫ニ申殘置へきものなり

同年七月家作工事ニ着手シ同五年八月十九日舉家新宅ニ移徙ス

(家記) 寶曆四年七月下當村所持之地續之内間剪之木を以家普請致度遊佐郷大庄屋へ横折ニテ覺書相調指出候覺書省略ス



同五年八月十九日吉日なりとて家内不殘藤崎村江引移中略人數藤藏夫婦佐次兵衛夫婦喜六次郎助五郎治おとく五六喜八彦左衛門

六年正月十四日故藤左衛門以來ノ功勞ヲ嘉シ藤藏ニ苗字帶刀ヲ聽サル四郎兵衛亦賞賜ニ與カレリ

四郎兵衛ノ賞賜ハ上ニ詳カナリ

(家記) 寶曆六年正月十五日御郡代平山勘之允殿より一通石山平内方より相届候紙面之寫

候紙面之寫

一筆致啓上候然者舊冬御奉行被差上候其元様帶刀御免之覺書御郡代中御加筆ニ出候ニ付調直被差上候處彌願之通被仰出之旨江戸表より被仰遣昨十三日於御會所御家老中より被仰渡候依之早々爲御禮御登可被成候尤御郡代中御加筆調直覺書寫指進候御祝納可被成置候此段御奉行被申付候之旨如此ニ御座候以上

正月十四日

石山勘之允

佐藤々藏様

向々麻上下御持參可被成候以上

遊佐郷濱山砂吹立御田地并御年貢運送之堰砂埋ニ相成年々壹貳萬人之御人足を

以堰浚御普請仕候又者砂除簀垣等仕候へとも無其功御百姓共甚及難儀相歎申候

ニ付拾年以前寅年より右砂山へ諸木爲植付號藤崎村一村御建上之御物入を以

植付被仰付候處同年○延享二年五月十一日係レリ酒田中町佐藤々左衛門梓藤藏と申者父子共御百

姓之難儀を救申度志願ニて藤崎村續砂山四十町被下置候ハ、自分之物入を以諸

木植付申度旨申出願之通被仰付右場處自分物入を以代屋貳軒相建置酒田より三

里之處相通壹ケ年諸木四萬本程宛年々植付申候親藤左衛門儀四年以前病死仕梓

藤藏儀親之志を繼無怠慢出精植付申候所藤崎村同前諸木増長仕甚砂除相成其上

林下ハ草生ニ相成連々畑方等茂可相成様子ニて遊佐郷御百姓共一統大慶ニ奉存

候藤藏儀此上植付出精仕度存念ニて酒田家屋敷賣拂右砂山居宅普請仕當春家内

引越彌以出精仕候藤崎村之義御物入を以植付申候藤藏へ被下地之義ハ自分物入

を以不毛之砂山林ニ相仕立申候義藤藏大功畢竟後年上之御爲ニも相成申候義

ニ御座候依之申上候右場所へ名子差置近年中ニ一村ニも相成四拾町之地方支配

仕候義ニも御座候間數年勤功之爲御褒美藤藏帶刀御免被成下度奉存候佐候ハ、

別て規模ニ奉存益出精可仕奉存候奉願候通被仰付被下置候ハ、藤藏同前拙者迄

難有仕合可奉存候右之段宜敷御沙汰被下度奉存候以上

(寶曆五年)

亥十二月

山崎坂之助印



藤藏ノ事業稍々條緒ニ就キ斯特典ニ預リ大ニ面目ヲ施セシモ爲メニ巨額ノ財産ヲ費シ既ニ資金ノ欠乏ヲ告ケ他借流用辛ウシテ之レヲ繼續シツ、アルニ去歲作毛熟ラス近古未曾有ノ凶歉ト稱シ是歲三月下當村ノ代屋燒失シ米穀ヲ烏有ニ歸セシムルカ如キ不幸相踵キ家計頗ル困難ヲ極メ酒田宅地土藏釀造器具ヲ沽却スルモ尙之レヲ償フ能ハス歲末ニ至リ所有ノ田地ヲ賣リ而モ負債百金ヲ剩セリト云フ

(家記) 寶曆五年不作ニテ新田邊毛無ニ相成候泉新田谷地田兩村ニテ野引被下候へ共御年貢三十八表不足ニ付金拾兩ニ付拾六表替札米調御年貢皆濟致候秋中飯米無之うむし米此邊ニテ米壹俵錢壹百九百文より外貳百文余ニ迄買申候其後段々直段引上ル

六年三月十二日夜下當村代家七之助燒失致し候と十三日朝飯時爲知人參候米取合五六十表燒失致候 去年家屋敷土藏酒道具共金七拾貳兩賣拂候へ共家普請等其上至テ惡作之砌飯米買求代家共種粃も無之ニ付買求代家共へ遣候故右金遣切候依之當年利金等ニ差支申候故極月ニ罷成候て本間久四郎方谷地田分八十四表渡之内御田地十四表御年貢引殘七十表揚米立上米有之候處金百拾三兩賣拂借金結候へ共

借金百兩残り候

七年九月廿七日有司藤藏ニ命シ曩ニ下附セル植付場繪圖面及ヒ植付出願ニ係ル書類ノ謄本ヲ差出サシム蓋是レ父子ノ勤勞ヲ嘉ミシ更ニ裏書繪圖面ヲ交附セントスルニアリ

(家記) 寶曆七年<sup>丑丁</sup>九月廿七日夜九ツ時急村繼ニテ申參候先達て地方繪圖<sup>○家記ニ依ルニ植付場繪圖ニテ</sup>面ノ下附ハ延享四年四月ニアリ并帶刀御免之書付先年地方願之節書物等不殘持參候様ニ御郡方より申參候明四ツ前ニ右書付等持參酒田へ相廻リ可申由御郡奉行中被仰聞候御口上之趣とも有之由石山平内方ヨリ申參候故夜中取懸繪圖諸書付等書寫翌廿八日早朝出立致候

「書付之寫」

覺

十三年巳六月二日酒田中町七左衛門方江鶴岡ヨリ林泉寺和尚並鐵文様御同道ニテ御出翌三日ニ遊佐濱通御檢分被成吹浦御泊ニテ同五日ニ酒田へ御歸リ被成候其節親藤左衛門見舞被致候て御尋申候處ニ御兩僧様被仰候ハ遊佐郷濱山砂吹立ニテ御百姓迷惑之由度々申上候へ共 御上ニテ如何共難被成場所ニテ御難澁ニ被思召候ニ付御上ヨリ御頼ニテ罷下リ候其許思召も有之候哉被仰候其節親藤



左衛門申候ニハ御上ニテ御難澁ニ被思召其上御百姓難儀筋依之植付被成度思召之段承知仕候拙者兼々存候ニハ一生之内何かして世上調法ニも相立可申義を望居候間遊佐濱植付試ミニ可致段申候へハいか様ニと植付様子御尋被成候親藤左衛門答申候ニハ先年ヨリ植付被仰付候へ共諸木付兼候儀植はなしニ致置候故ニ存候拙者ニ被仰付候ハ、代家成共右場處江作置夏冬共ニ植付見繼爲致候ハ、成就可致ニ申候へハ尤之由ニテ御歸リ被成候

丑十一月十七日鶴岡林泉寺和尚御出兼て遊佐郷濱山植付之義御郡代所 申上候處此度可被仰付様子ニ候間明日同道ニテ登候様ニ被仰候ニ付翌十八日鶴岡に拙者罷登候同日鐵文様服部外右衛門様御内意申上候處ニ御代官中世古嘉右衛門様御狀壹通拙者に御渡是ニテ願書相調候様ニ被仰付則嘉右衛門様江參右御狀差出候處ニ則御廣間ニテ嘉右衛門様草案被成下林泉寺和尚へ懸御目明朝此方江持參致候様ニ被仰渡候則十九日御郡奉行所御代官所御揃被成御郡代所江御内見へ被差上御覽之後則草案拙者へ被下候て被仰付候ニハ酒田へ歸リ相調御町役人共へ爲致加判勝手次第ニ此方江持參可致と被仰付候就夫酒田御町奉行豊原多助様へ御郡代所ヨリ御狀壹通被遣候

願書之寫○既ニ上ニ掲載スルモノト同文

右願書酒田ニテ相調御町役人之加判を請同月廿七日ニ罷登中世古嘉右衛門様へ

差上候處御郡奉行所御代官所御揃廿九日御會所ニ拙者願書被差上候處御家老中ヨリ兩御役所江被仰渡候ニハ宜敷願ニハ候へ共大切之御場所故江戸表に申遣達御聽追て可申付ニ被仰出候由藤藏ニも今度ハ勝手次第引取候様ニ被仰渡候旨嘉右衛門様ヨリ拙者へ被仰渡候

一 閏十二月十一日夜九ツ半時飛脚參着ニテ十二日ニハ早天鶴岡へ登候御狀之寫 代家願書之扣 御代官所ヨリ御狀之寫○三通同上

覺

一 當年藤崎村へ拙者家内不殘引越候ニ付此末酒田中町人別相除拙者一判ニテ宗旨御改入別證文御奉行所御代官所御未書ニテ相濟候様ニ仕度奉存候尤先年拙者に被下置候地形之義ニ御座候間只今迄指置候代家共其外此末右被下地に相望出候者御座候ハ、人別御改拙者加判ニテ相濟候様ニ仕度奉存候  
 一 被下置候地形内ニテ倒者等御座候歟其外變成義も御座候ハ、早速相斷申上候様ニ仕度奉存候

右奉願候通以御慈悲被仰付被下置候ハ、難有仕合可奉存候 以上

(寶曆五年)

亥 五月

御郡奉行所

佐藤 々々藏



右之趣横折ニ相調同廿八日兩御役所ニ只今着仕候趣御届申上候へハ明日御會所ニ可罷出候様被仰付候翌廿九日罷出候處兩御役所御揃被成先年之繪圖並地方願帶刀御免之節書付 上ヨリ御尋被成候間指出可申被仰候間横折指上申候

八年正月廿八日格例ヲ以テ年札出鶴ス會々御郡奉行山崎坂之助病ム同人ノ冀望ニ依リ之レヲ看護ス藤藏滯鶴ノ事藩主ニ聞ユ乃テ植付ノ功績ヲ嘉ミシ裏書繪圖面ヲ下附セントシテ更ニ實測繪圖ヲ進達スヘキノ命アリ二月廿二日歸村シ新ニ圖面ヲ製シ之レヲ代官所ニ上リシガ時々遊佐ノ大庄屋亦事ヲ以テ鶴岡ニ在リ其稟申ノ結果、地元役人等立會シ實查ヲ遂ケ別ニ之レヲ調製セシメラル

(家記) 寶曆八戌寅鶴岡ニ年禮正月廿八日ニ登候處前年之通相濟候其比御奉行山崎坂之助殿御病氣ニテ御引籠被成候間御容子窺ニ參候處此間不快ニ居候乍近比病中看病致くれと御頼故坂之助御宅ニ數日逗留致候處追々御病氣重歸ル事成兼候依之川北御郡奉行加役土屋渡留殿御勤被成候兩御役所ヨリ被仰出候ニハ藤藏此地ニ永々逗留致居候由 上にて被爲及御聞候て其方へ被下置候地形繪圖御裏書可被下置旨被仰出候間一先立歸先年之繪圖方角分限共ニ相改差出候様ニ被仰付候仍て二月廿二日罷歸リ右繪圖方角分限共ニ改新繪圖仕立同月廿七日罷登御代官所ニ差出

候處其比遊佐大庄屋兩人登候故御役所ニテ右趣被仰聞候へハ兩人申候ハ此度方角分限等御改御裏書被下置候てハ此末相定申事故地元役人尙又拙者共立會再吟味之上繪圖仕立度旨申上候へハ尤ニ被思召御役所ヨリ右之趣被仰渡候

三月四日故藤左衛門藤藏ガ多年造林ニ盡瘁セシ功勞ニ依リ實測繪圖面成ラバ裏書ヲ與フハクノ旨ヲ命セラレ且ツ地方ノ内田畑ノ開墾アラバ租稅ヲ免レ併セテ歲時ノ觀札、藩老ノ謁見其他身分ニ係ル特典ヲ與ヘラル是レヨリ先キ藤藏ノ移住スルヤ肝煎ノ支配ニ屬シ願届等悉ク其加判ヲ要セシガ是ニ至リ初メテ之レガ支配ヲ脱シ大庄屋ノ加判ヲ以テ直チニ御郡代々官所ニ進退スルノ資格ヲ享用シ以テ年來ノ冀望ヲ達スルヲ得タリキ

(家記) 寶曆八年三月四日麻上下ニテ御會所ハ大庄屋同道ニテ罷出候様申參候則日御會所ニ罷出候處ニ兩御役所御揃被仰渡候ハ親藤左衛門數年植付出精其方親之志を繼今以植付出精致候由依之地方繪圖出來次第御裏書可被下置候旨其上別紙之通被仰出候間難有可奉存旨被仰渡候別紙之扣

野下覺田殿御書被對候ハ大庄屋立會 藤崎村 藤藏圖面之數四十四



右藤藏親藤左衛門義拾四年以前丑年遊佐郷西砂山之内奉願別紙繪圖面之通四十町被下置候内田畑等開發致候節ハ大庄屋立會相改可書出候御年貢御免被仰付候  
 一諸願並吉凶之注進申出候節大庄屋加判之書付御郡奉行御代官宛所ニテ差出可申候  
 一宗旨證文者自分證文ニテ大庄屋加判ニテ御郡奉行御代官宛所ニテ差出可申候名子人別之儀ハ六月中御改之節別帳ニいたし藤藏名印江大庄屋加判いたし差出可申候  
 一親藤左衛門ヨリ今以自分物入ニテ砂山諸木植付出精致候段奇特ニ被思召候依之年々五月節旬御家老中御逢被成候筈  
 右之通可相心得者也

寶曆八年寅三月

同月十三日實測繪圖面成リ十四日之レヲ進達ス五月廿一日乃父ノ第七回忌日ニ當リ親戚故舊ヲ請シ法要ヲ營ミシニ會ク鶴岡ヨリ飛札アリ翌廿二日出鶴シ藩廳ニ於テ裏書繪圖面ヲ受領セリ

(家記) 寶曆八年三月七日罷歸リ○同月四日同九日ニ地元役人大組頭源八同多七同傳次郎其外肝煎長人百姓大勢立會繪圖方角分限相改候

同月十三日大庄屋兩人書役壹人召つれ右方角分限を改繪圖書付等爲致候  
 同月十四日鶴岡へ罷登御役所へ差上候

五月廿一日父了安之七回忌法事執行致候節林昌寺柔阿和尚之御歌ニ  
 時鳥また此頃としのふまにはや七年乃ねをのみそきく

うゑおきし庭乃草木もいろまして名も榮えゆく藤崎乃里  
 兄弟親類大勢相寄居候處同日朝飯後鶴岡より飛札ニテ江戸表ヨリ繪圖參候間早々登候様ニ兩御役所ヨリ申來候翌廿二日鶴岡へ罷登リ御會所ニテ繪圖申請候御裏書  
 文言

飽海郡遊佐郷田畑砂除之爲延享二年西濱砂山人家を置藤崎村と號し年々費用米錢をあたへて木を植林を造る爰ニ酒田町人藤左衛門其子藤藏父子砂山四拾町を申おろし町家を去此所ニ住居し年々自分米錢を費し數萬之木を植年々新林漸茂り其功顯然たるに依り今度繪圖之通境を定め後年田畑新開あらバ町歩を改年貢並高役を免すへし村里を置かバ藤藏支配たるへし依て爲後證繪圖裏書與置候也

寶曆八年寅三月

服部外右衛門 鈴木策大夫  
 久米五郎兵衛 山崎坂之助  
 山中彌右衛門 石井新三郎



十年九月廿二日嫡子喜六男子ヲ舉ク家記是レヨリ先キ本間久四郎酒田西濱砂除樹木ノ植付ニ從事セシガ是歲覺壽院等ヲ介シ濱畑ナル苗圃ノ合歡木ヲ乞フ爲メニ之レヲ寄贈ス横折覺書十二年四月廿一日弟佐次兵衛病死ス家記

(明和六年植付横折覺書)寶曆十年高野ノ濱邊畑へ合歡木苗蒔置候畑ノ邊へ本間久四郎殿植付被成候ニ付覺壽院村山與四兵衛ト申者ヲ以右木苗ヲ貫度段御頼被成候故無據苗木不殘進申候

明和六年六月廿一日藩老作内八郎右衛門植付ヲ巡視ス創業以來ノ經歷ヲ具狀スヘキノ命アリ因テ植付横折覺書ヲ上ル十月廿九日植付出精ノ賞トシテ俸五口ヲ賜ハル

(御郡方例帳)明和六年丑六月竹内八郎右衛門殿藤崎村植付御見分被成右新林仕立候最初ヨリ之次第於江戸被仰上候間委細書付上候様ニ平太夫被仰付同年九月八郎右衛門殿御出府前右植付之次第並藤藏奇特之志共有之趣一冊ニ認メ申上候處同年十月廿九日藤藏ハ五人扶持方被下置候

(家記)

遊佐郷藤崎村

佐藤々藏

右藤藏義廿五年以前濱山之内被下置地方ハ植付出精仕漸々ニ繁茂いたし候最初ヨリ奇特之志を以植付精働いたし候段申上候依之五人御扶持被下置候可被御申渡候

丑十月

藤左衛門父子ノ志業幾ント成リ爲メニ風砂ノ害ヲ免カレシメ藩主ノ之レヲ待ツ斯クノ如ク厚カリシモ事業擴張スルニ隨ヒ家計漸次蹙マリ債主ノ督促交々至リ安永三年ノ歲暮ニ其消息ヲ家乘ニ記シ和歌ヲ以テ自ラ之レヲ慰メタリ洒落寧口掬スヘシ

(家記) 安永三年ノ……兎角する内極月ニ相成候へとも爰かしこ借方共さわき申來候

年久しく世話をはなれ植付のみを勤として草木乃增長せしを樂みて居たるに心ならず世話を預りてよめる  
苦は樂の種とハ今ぞ思ひしる樂乃すゑとて苦勞なるなり  
又年の暮ニ成候へとも借方處々に拂殘ければすゝをものはかれまじとてやめけるをよめる  
借しも乃なさですゝをものはかれまじとふで拂乃殘る身なれば



かゝる折ニも春の來るをよめる  
 すみかたハ残れど春ハ來りけりなさざる人に何とこたえん  
 思ひ内にあれバ色外にあらはるとやらん春來れども悦ふ心もなし又斯と云ひ明  
 すへき友もなければ只心計を勞しけるを思ひ直して春の風はけしけれども厚き  
 氷をふみならし田面ニ打のぞみ豊年乃作を待受借かたを濟しきらんと心をはけ  
 まし士卒をいさめはたらかせしに日も西にかたむきければ士卒と共に家にかへ  
 り皆々に酒をすゝめ我ものまん盃ににこりを受けて  
 春かすみにこりもすむの縁あれバ秋ハ借りをすましきるらん

四年二月四日藤大夫ト改名ス家記六年三月廿日藤大夫ガ植付區域ノ内ヲ荒瀨郷新  
 田目組廿一ヶ村ニ貸附ス是レヨリ先キ有司藤大夫植付區内ヲ借地セシメ荒瀨郷  
 砂除トシテ樹木植付ノ計畫アリ爾來兩郷大庄屋御郡手代等宮野内新田村ニ相會  
 シ藤大夫ニ商議ノ上實測ヲ加ヘラレ去申十月十四日御郡奉行豊原多助上市神村  
 ニ出張シ之レニ係ル事項ヲ調査シ更ニ其面積ヲ丈量シ歸鶴セシガ是歲正月利害  
 ヲ異ニスル宮海上林與屋兩村ヨリ陳情スル所アリコ、ニ至リ藤大夫之レヲ調停  
 シ條件ヲ附シ貸借ノ契約ヲ締結セシム是レ荒瀨郷砂除植付ノ端緒ナリ

(家記) 安永四年御奉行所植付思召も有御座候哉四月廿一日ニ阿部專八御郡手  
 代土田作右衛門大組頭 右衛門其外割役喜四郎同役平四郎荒瀨ヨリ堀善藏御郡手  
 代平山傳大夫大與頭壹人其外割役肝煎大勢罷出候ニ付同日宮内新田迄罷出右之衆  
 中へ植付の相談致吳候様御奉行所ヨリ御頼被仰出候由申來候ニ付罷出見分荒瀨よ  
 りハ分見ニテ方角改間數繩引ニテ改遊佐郷砂除ヨリ小湊川傳迄間數合貳千貳百間  
 夕飯堀善藏方ニテ支度致候て給罷歸五年丙申十月十四日御郡奉行豊原多助様荒瀨上  
 市神村ニ御出ニ付十五日早朝ニ上市神向御出迎ニ罷出候處荒天ニテ植付濱山御見  
 分相止候ニ付御宿上市神村重右衛門宅へ參川向迄罷詰候へ共御出無御座候ニ付御  
 機嫌伺として罷出候趣申入候處堀善藏被罷出御用ニ付御尋も可有御座候間上リ候  
 様被申候ニ付罷上候へバ荒天ニテ濱山へ御出ハ明日と相究リ其後ハ被下地之内荒  
 瀨郷新田目組ニテ借地致植付申付致度段兼々及相談候處今日相極度段及沙汰阿部  
 專八林曾右衛門堀善藏御郡手代渡部喜助土田作右衛門等取集リ評議之上ニテ借地  
 證文案案相調御奉行所ニ入御覽候處可然と被思召無腹藏内知之上相究リ候事ニ候  
 ハ、草案を以御家老中御郡代中へ入御内見候其後相究候て可然之趣被仰出候則草  
 案相調御奉行所へ善藏方ヨリ差上候十五日ハ御宿重右衛門へ一宿いたし翌十六日  
 日和ニテ御奉行所濱山植付宮内新田西之方へ御出方角等御尋就夫簀垣南外レ御  
 出是ヨリ南廿丁程拙者に被下地之由申上候是迄北ハ廿丁程植付仕候被下地之趣申



上候夫ヨリ藤塚向邊迄御出南地境御尋被成候ニ付此場處之由申上候ハ其所ニテ堀善藏方角等相改其後善藏宅へ御奉行所御出御夕飯之義ハ善藏ニテ支度有之御馳走成事ニ候市神村へ相詰候御役人不殘御供ニテ善藏振舞

六年酉丁 乍憚書付を以奉願候

御手前御地形之内上市神新田村川西端道上藤塚村近所迄川端ヨリ幅百間程宛川筋通借地仕度奉存候只今拙者共地方同前ニ相心得稻等取仕舞ニも心克自由仕其上年々春出水之折々川端ヨリ流寄候木柴等迄も拙者共大勢罷出拾ひ上ケ朝夕之薪ニ燒續罷仕候然處ニ今度荒瀬之方へ御貸被成候之御相談有之候様ニ及承候左様ニ相成候てハ此末流寄候木柴之分ハ不及申稻上場所迄も不自由ニ相成可申候左候てハ濱方之者共必死之相立不申迷惑至極ニ奉存候間前段申上候通以御慈悲拙者共へ御預ケ被成下度奉存候右之段乍憚奉願度如斯ニ御座候 以上

安永六年酉正月

宮海村  
上林興屋村

惣村中

長人百姓 連判

きも入

大組頭多七

佐藤々大夫殿

二月九日酒田迄罷出同十一日鶴岡へ參○本書ニ據ルニ年始御郡奉行所其外御郡代所迄不見ノ爲メ出鶴セシ也御郡奉行所其外御郡代所迄不殘御届申上候其節宮海上林興屋兩村願之書付御郡手代渡部宇八ニ内談を蒙候處阿部源五兵衛兼帶役致居候間壹通源五兵衛へ御沙汰被成其上御奉行所へ被仰上可然趣乍去御尋ニ御座候ハ御咄ニ被仰上可然被申候ニ付幸御尋被成候ニ付願之趣不殘申上候處御奉行所被仰候ニハ夫ハ後ニ相成候去年中荒瀬へ内々あら約束ニテ借地之趣御家老中ニも申上候事ニ候乍去荒瀬ニテ地形望事ニも無之近年砂吹立はけしく川ヨリ砂吹入尙又御田地へ砂飛入候て地心もあしく夫故不作致候事故砂止乃爲に植付可致之願ニ候へハいか様ニも善藏へ内談致川傳通リ流寄候木柴ハ勿論稻上等ニも障リ不申様とくと相談可致之趣被仰候ニ付善藏へ其趣申聞候へハ早速承知も無之何れにも追て御相談可申趣申候  
十三日御目見首尾能相濟……十六日御扶持米申請御書替致候ニ付御代官所林九右衛門様へ參候處濱方願之趣多助殿ヨリ段々承候ニ付濱方之者共難儀之筋尤ニ候然者内々ハ兎も角も表向ハ于今相究不申候事ニ候へ共此上ハ善藏へ對談致し濱方迷惑之筋無之様ニ幾重ニも其許可致旨被仰出候ニ付又々善藏へ參此末之趣申聞候へハ御尤之事ニ候然者川端通へ流寄木柴等ハ勿論稻上又ハ谷地茅等上ケ候節彼是申間敷之趣寄木等拾ひ上候ニも相障申間敷之趣貴様方ヨリ拙者へ一扎御渡可被成旨



申聞候へハ承知之趣申候ニ付則九右衛門様へ此段申上候へハ其許申通宜敷早速承知相見致大慶候乍去一札取候ハ一通此方ハ差出可申候後世之事故品ニより加筆致可申候間此段相心得候様ニ被仰候則濱方願書付差出候様被仰候節未源五兵衛對談不申候趣申上候へとも不苦候間早々書付差出可申と被仰候ニ付濱方之書付九右衛門様へ差上申候

三月廿日荒瀬郷貸地相渡候其節立會阿部源五兵衛御郡手代渡邊喜助早坂角次郎林曾右衛門大與頭何右衛門肝煎四郎八同彦右衛門上林與屋村肝煎其外荒瀬肝煎大勢罷出間敷相改渡ス右振舞人數善藏方晝飯振舞念入候事ニ候

致借地候證文之事

一遊佐郷濱山御手前被下地四十町之内繪圖之通諸木植付致借地候處實正ニ御座候右ニ付間敷之内此末何等之儀有之候共早速御手前御斷申人夫其外諸雜用等入用之分此方ニて引請御損失相懸申間敷候

一民家指置候節ハ御手前御斷可申候間人別等名子帳御書載御支配可被下候

一末々植付致成就萬一借地之内畑仕付等仕候様ニも作物取入候事ニ相成候節ハ

遂御相談御手前ヨリ上御斷被仰上檢地御改之上御年貢御免合之義被仰上次

第御手前へ急度爲指出可申候

一諸木之儀ハ何程繁茂致候共御手前ヨリ彼此手を入又ハ一切剪取候儀被成間敷候

此方植付候者共猶又爲伐取申間敷候草芦等之儀ハ地所預リ候者共勝手次第苜取候ても御構被成間敷候

右之通御相對之上相定申候處相違無御座候末々右定之通急度相守可申候爲後證借地連判證文仍而如件

安永六年酉

廿一ヶ村肝煎

大組頭

大庄屋

佐藤々大夫殿

一札仕候事

此度御手前地形之内借地致植付候へ共洪水之節寄木其外寄物取候義ハ只今迄仕來候通宮海村上林與屋村之者ニ爲取植付候村々より手を入申間敷旨承知仕候乍去植付諸木ハ勿論作物等ニ決て障不申候様ニ被仰付度候萬一植付成就不仕候歟又ハ何等之儀ニ付右場處へ民家指置候節ハ其者共宮海村上林與屋村之者共入會候て取候様可仕候總て横死又ハ溺死之者其外何ニ而茂川行の寄物者ハ右兩村之可爲引請筈ニ御座候爲後證一札仍而如件

安永六年酉



きも入  
大組頭

參照 (家記)

安永七年九月今度石原源四郎様石川小兵衛様御代官横山八兵衛様  
氏家門右衛門様御同道ニ而御立寄被下植付之次第段々御尋只今頃何木を植候哉  
と御意被成候御答申上候ハ植付始より三十三年之間初年拾年程之内合歡木楸藤  
斗植立其後松櫻榎檜其外諸木取集ノ夫より楮桑漆等植付其後廿三年以前より梅  
李梨桃くるみ栗柿夏楸小梅ゆすらの類迄數萬木乞求植付候處増長仕候尙又茅谷  
地年々此間三字蟲食かり壹ヶ年ニ第四千把余リ宛取申候木實彼是取集賣拂申ものニ候  
ハゞ錢百ハ文程宛年々手取可申様子相考申候是より二三年過候ハゞ錢三百ハ文  
余程宛取可申木生ニ罷成候と申上候其節最早親子勤之願致候て可然趣被仰下候  
答御意之趣難有奉存候先年植付願之節被仰渡候ニハ植付成就致候ハゞ藤藏義い  
か様ニも取立候様ニと 御前より被仰出候間難有奉存植付出精仕候へ共近年不  
作打續被下地四十丁之内廿丁程植付仕殘地二十町程植付兼居候處去々申之秋堀  
善藏殘地植付致度段申ニ付去西之春より植付爲致候處當此間三字蟲食出精仕植付致候  
此分ニ候ハゞ二三年之内ニハ植付成就可致様ニ相見へ候是天之與と存大悦仕一  
兩年之内ニ御願申上度御答申上候

寛政九年九月廿三日藤大夫病歿ス享年八十五嫡子藤五郎嗣キ子孫相承ケ斯業ニ  
精勵シ乃祖ノ遺績ヲ失墜セズ維新後ニ及ヘリ

吹浦村 吹浦鳥崎瀧野浦女鹿落伏箕輪新田ヲ管ス

吹浦宿町横町ノ小字アリ濱街道内郷街道ノ要路ニ當リ由利地方ニ於ケル宿驛

ニシテ其名夙ニ世ニ著ハル

元和九年ノ現高百三十九石貳升九合同年九月檢地帳明曆二年ニ至リ百四十壹石貳斗七升

壹合壹勺同年檢毛帳後チ百六拾壹石三斗六升三合八勺免五ツ五厘トナリ外ニ網役ノ上納ア

リ即チ吹浦組ノ組本ニシテ大組頭高橋氏コ、ニ住シタリキ

延享三年四月巡見使御用覺書 吹浦兩町 高百六十壹石三斗六升三合八勺免五ツ五厘

内百十八石七斗貳升六勺横町 肝煎 津右衛門 長人百姓次郎左衛門 同四十貳石六斗四升壹合五勺宿町

肝煎 助左衛門 長人百姓孫左衛門 一人數五百九十五人内 二百九十六人横町 二百九十九人宿町 一山伏壹軒 一浦河山 禪宗 海

禪寺 一獵船七艘内 三艘横町 四艘宿町 一銀百十九匁八分七厘五毛綱手くり網役内 七十五匁 五分横町

四十四匁三 分七厘宿町 一同六匁貳分五厘指網役内 三匁壹分貳厘五毛横町 三匁壹分貳厘五毛宿町 人改所番人 上役 荒川彦右衛門



下役 御組外 大野左助、後藤久太郎

本邑モ亦往時製鹽ニ從事セシテ地勢ノ變遷ニ依リ寛文十二年以後廢業ニ歸セリ  
今附近海岸ニ「かま」ト字スル處ハ蓋其遺跡ナリ

(酒井家御土藏記録寫) 貞享元年子四月十四日遊佐郷吹浦村鹽竈先年ヨリ燒來候へ  
とも十三年以前ヨリ竈近所ニ水出鹽燒申事不罷成當年迄十年荒置候ニ付御年貢地  
を御訴訟申上子四月十四日御會所ニて赦免當秋ヨリ御年貢鹽引申答ニ申付候ニ付  
訴訟一通御赦免難有旨書付一通 ○但免稅願書及請書ナシ

(名所發句集)

ふくうらに出て、やあつみのころもかへ

涼幣

大物忌神社 國幣中社大物忌神社ノ口之宮ニシテ大物忌神ヲ祭ル事歴進藤重  
風土略記大社考及ヒ當社明細書上帳等ニ詳カナレバ本誌ハ就中重要ノ事項ト認  
ムルモノ編者力新タニ採集ノ材料ニ依リ發見シタルモノ、外一二省略ニ從ヘリ  
由緒 社ノ西傍二月山神社アリ故ニ兩所大明神ト汎稱ス共ニ創祀詳カナラス社  
傳ニ欽明帝ノ御宇大物忌神飽海嶽ニ鎮座シ給ヒ大同年中之レヲ吹浦ニ遷シ祀ル

ト云ヒ一説ニ大物忌神ハ同山ヨリ月山神ハ田川郡月山 現今官幣中社月山神社ヨリ勸請セシモ  
ノナリト云フ孰レカ是ナルヲ知ラス遷座ト勸請ノ事歴ハ姑ク措キ古來延喜式内  
出羽國一之宮ト稱シ一ニ飽海神社トモ號セリ

(大物忌神社々記 芹田貞運著) 社家舊記云欽明天皇廿五年甲申大物忌大神鎮座于飽海郡山  
上又云平城天皇大同丙戌奉遷大物忌大神於吹浦村 ○以上舊記ノ文 土人曰昔時鳥海山大物忌  
神社、山路險難而攀登甚艱故慈覺愁之奉遷大物忌大神於鳥海山下吹浦村使人易參詣  
又本社西傍勸請月山神並祭奉號兩所大明神

(永正五年羽黑山在應年代記) 人皇三十代欽明天皇……莊内ニ三權現始ル

本宮大權現 同七丙寅ノ年飽海ケ嶽ニ出 現今鳥海山權現ナリ

新宮大權現 同八丁卯増川嶽ニ出現ス 今月山權現ナリ

羽黑權現 同十年庚午ノ年添川嶽ニ出現ス

同十一年辛未之三月北日吹浦於本宮新宮兩所權現勸請之社ヲ造ル

(和漢三才圖會) 出羽國十二郡高八十七萬石余、一之宮飽海大明神

(同上 神社佛閣之部)

大物忌大神

在飽海郡號飽海社



祭神一座 倉稻魂神

兩社領千百石

神階 初從五位下勳五等昇進以序貞觀十五年四月五日爲正三位凡一年一度降鏃有暴風雷震天氣異常人以爲神軍至樹下尋求之有鏃降鏃矢墓股等數品而非鐵非石未知何物本草所謂雷極雷斧之類乎又不唯當社前陸奥能登亦有降畿內及山陽之地則未曾有之物也

鳥海山權現 在鳥海山

祭神 未詳

慈覺大師始登山云最高山常有雪潔齊六七日可登而山頂有寺社唯見奇磐窟也麓有社傳曰鳥海彌三郎靈祠也

康平中源賴義父子阿倍貞任等ヲ討スルヤ仙北ノ住人清原武則大物忌月山二神ノ靈威ヲ説キ戰捷ヲ祈ラシム亂平クノ後賴義爲メニ二神ヲ村山郡金井莊ニ勸請シ之レニ報賽ス今ノ山形市縣社兩所神社是レナリ

山形兩所神社記

○山形兩所神社勸請ノ事歴ニ異説アリ庄内昔雜話ニ

吹浦三社權現 ○城輪神ヲ加ヘ三社ト云ヘルモノナルヘシ彼社ノ境内ニ城輪神祠アリ本ト飽海郡二ノ宮城輪神社ヨリ勸請セシモノナリ 昔シハ八幡太郎義家公奥羽合戰乃時志願掛晝夜つや被遊テ兩國治め給ふ御利生新たなる神にてましましけるが弟加茂次郎殿出羽國主と成給ふ本城山形にて毎年御禮として山形より御代

參下し給ふに其節清川口往來開かずして十月ヨリ三月迄往來留る依て右三社權現を山形へくわんぢやう仕來○干今大社にて御朱印地トアリ源義綱出羽守タリシヨト史乘ニ見エ山形ニハ國分寺ナトノ舊刹モ存スレバ當時既ニ出羽ノ國府ハ平鹿郡ヨリ山形ニ移サレ其地山川懸絶シ國司參向ニ不便ナリシヲ以テ三神ヲ國府ニ勸請セシモノナラン开ハ兔モ角モ之レニ據レハ彼社ハ義綱在任中ノ勸請ニ係リ社傳ト相違セリ是非ヲ知ラス後考ヲ俟ツサレド何レノ傳説ヨリスルモ當社ノ勸請タルヲ失ハサルナリ

(當社文書)

出羽國兩所宮修造之事不終其功之由神主久永訴申之去建保六年十二月爲催促雖被指遣雜色正家故大臣殿御大事出來候間正家不遂其節歸參然て有限修造依不可默止爲催促所被遣雜色眞光也無懈怠可終其功之狀依陸奥守殿御奉行執達如件

承久二年十二月三日

散位 藤原判  
散位 三善判



北目地頭新留守殿

正平十三年八月從一位行內大臣源顯信與羽鎮撫ノ際天下興復與羽兩國靜謐御祈願ノ爲メ由利郡小友村ヲ寄進セララル

(當社文書)

奉寄進出羽國一之宮兩所大菩薩由利郡小石郷乙友村事

右爲天下興復別而陸奥出羽兩國靜謐之所奉寄進之狀如件

正平十三年八月廿日

從一位行內大臣源朝臣判

曆應元年三月本地佛藥師彌陀如來ノ造替アリ

古來大物忌神ノ本地佛トシテ藥師、月山神ノ本地佛阿彌陀ノ二体ヲ講堂ニ安置シ社僧勤行ノ本尊トナセシヲ明治三年神佛分離ノ際學頭神宮寺末女鹿村松葉寺ニ撤却セラル此佛体ハ何時代ノ製作ナリシヤ既ニ記錄傳誦ヲ失ヒ絶エテ之レヲ知ルモノナカリシガ三十年五月十八日本誌材料採集ノ爲メ由利郡出張ノ歸途松葉寺ヲ過キリ寺僧ニ請ヒ之レヲ觀ルニ箔色稍新ノ嫌アリシモ相貌肢体總ヘテノ製作凡ナラズ當社ノ本地佛トシテ遜色ナキヲ覺ユ先ツ後光臺座ヲ檢スルニ左ノ文字アリ

本尊藥師如來

奉再興後光臺座爲二世安樂也

寶永三年戊六月吉日

羽州庄内鶴岡芳賀治兵衛

○彌陀佛モ亦同文但首行ニ本尊彌陀如來トアリ

而シテ佛体ヲ檢スルニ背後ニ文字ノ痕跡ヲ認メズ更ニ之レヲ横マニシ内部ヲ觀ルニ藥師佛ノ胎内ニハ左ノ小版ヲ釘ニテ打付ケアリ

奉金色彩色本願人

佐藤久太郎殿  
同名八藏殿  
廣田長左衛門殿

表

寬文拾貳年四月廿九日權大僧都法印堅覺

裏

之レニ據リ寬文十二年ノ衣替ナルヲ知リ更ニ軀體ノ内面ヲ縮視シ左ノ文字ヲ得タ



佛師

此者東福坊千手坊

善住坊兄弟

慶長五年極月廿日

佛師良覺  
法端了  
應元年三月廿五日

就中曆應ニ屬スル文字假リニ圈點ヲ加ヘシモノ

ト慶長ニ係ル文字トハ書体全ク趣ヲ異ニシ曆應ノ

モノハ足利時代ノ筆跡ナリシコト一見甄別スヘク將タ彌陀佛ノ内部ニモ亦左ノ木

版ヲ打付ケ

煤氣不明

奉金色彩色本願人

廣田

表

寛文拾貳

都法印堅覺

裏

同上

躰軀ノ内面ニハ

永正三年丙三月十八日最奥坊

權大僧都法印心澄

取

成城坊  
東福坊

佛師福泉坊

此者東福坊善住坊兄弟佛師千手坊

慶長五年・極月廿日

トアリ永正ノ文字假ニ圈點ヲ加ヘタルモノト慶長ノモノトハ亦書体ヲ異ニセリ以上ノ文字ニ據ルニ藥師佛ハ曆應元年ノ制ニシテ彌陀佛ハ永正三年ノ作ニ係リ但ニ体トモ曆應ノ作ナリシヲ後チ彌陀佛ハ火災ナドニ罹リ永正三年之レヲ再造セラレシモノナルベシ共ニ慶長五年ノ修理ヲ閱シ寛文十二年衣替アリ寶永三年後光臺座ヲ新調シ寶永三年正月元日一山火アリ兩社炎上ス此時講堂モ同祿ニ罹リ佛体ノミ出シ後考臺座ヲ亡ナシナランカ以テ今日ニ至レルモノナリ製作精巧而モ年代ノ確實ナルコト本郡佛体中此右ニ出ツルモノ未タ曾テ見ルニ及ハズ頗ル珍トスヘク蕨岡口之宮ニ曆應五年ノ鰐口ヲ傳ヘ今又當社ノ遺物ニ於テ同時代ノモノヲ發見ス一奇ト謂フヘシ

慶長十七年最上義光社領トシテ高五十三石九斗五升壹合ノ寄附アリ同年龜ヶ崎城主志村光惟社殿ヲ改造セラル寛文九年之レニ修繕ヲ加フ



(棟札寫)

護持教主權大僧都法印祐盛

對大行使進藤但馬守安清

聖主天中天

大工藤原未孫本間與左衛門清定

迦陵頻伽聲

番匠奉行

荒井彌左衛門

▲▲答奉爲並造宮殿一字 護持檀那藤原臣志村九郎兵衛光惟

村山番首茂次

遠藤與五右衛門  
小林九右衛門

衰憐衆生

小行使 濟藤筑後守盛廣

我等今敬禮

衆徒四箇法華懺悔

相田鞆衛尉廣次

門間勘衛尉信久  
秋山與兵衛頼茂

志村伊豆守者河北龜ヶ崎守護也

羽州一宮兩所山神宮寺

二代守護者志村光惟當山建立也 右材木三ッ川内ヨリ出也

別當ハ學頭法印祐盛

一千八百拾三人乎

千時慶長拾七年壬子十月十八日

一和尚住蓮坊 右創立七月十五月初拾月六日已尅遷述也

二和尚林泉坊

貳萬二千二百五十三人但シ本山

三庄遊佐郷飽海郡吹浦之邑也

三和尚成住坊

ベ二萬四千五十六人也

右木番三郡ヨリ出也

村肝煎

伊藤助右衛門

此棟札ハ火災ニ亡ナヒ 贍本ノミ社頭ニ傳フ但小行事相田鞆衛ハ元和八年最上家改易ノ際浪士トナリ儀右衛門ニ至リ酒井家ニ仕ヘ子孫鶴岡ニ住ス家ニ亦棟札贍本ヲ傳ヘ裱背ヲ施シ一幅トナシ現ニ之レヲ所藏セラル

聖主天中天

護持教主權大僧都法印堅覺

哀愍衆生者

大行事石原平右衛門

迦陵頻伽聲

奉造立神宮一字

護持大檀那酒井左衛門尉 寺社奉行園田九右衛門

我等今敬禮

衆徒四箇法用並法花懺悔

小行事杉山七郎左衛門

千時寛文九年己丑八月三日

志村九郎兵衛殿御建立此後依大破棟札等者修理之砌如此打者也

出羽國一宮兩所山神宮寺

右修理之材木公儀ヨリ被下

右新立二月三日ヨリ

阿部淺大夫 龜ヶ崎御城之家老

藤野久右衛門

八月三日選供述也

加藤彦兵衛

右扱人勸ヲ以御家中

遊佐郷代官

右兩人之勸ヲ以テ

飽海郡遊佐郷吹浦村

鵜渡川原本願所也

豊原左太郎 遊佐郷本願請也

大肝煎石山治郎右衛門勸進河北三郡本願請也



元祿十四年鳥海山順峯蕨岡衆徒ト同山逆峰矢島衆徒ト峰境ヲ爭論シ之レヲ幕府ニ訴フ寶永元年五月幕府杉山安兵衛町野惣右衛門ヲ遣ハシ實地ニ就キ調査ヲ遂ケシム其結果吹浦ノ社頭ハ鳥海山大物忌神社ヲ遷座セシモノナリヤ將々勸請ナリヤヲ確ムヘキノ必要起ル若シ遷座セシモノトナレハ三代實錄ニ所謂大物忌神社在干飽海郡山上ノ文字ハ蕨岡ノ爲メニ死物トナリ何等ノ効力モナク更ニ之レヲ勸請トスレハ其文字非常ノ勢力ヲ有シ優ニ勝ヲ矢島ニ制スルヲ得ベク必竟遷座勸請ノ如何ハ彼此死活ノ問題トナレリ抑本訴ノ勝敗ハ單ニ蕨岡矢島ノ利害ニ關スルノミナラズ酒井家ノ得失ニ係ルヲ以テ當時其局ニ當ル有司ヲ初メ庄内ノ士民ニシテ苟クモ邦家ノ榮辱ヲ思フモノハ何人モ勝訴ヲ冀望セサルハナカリキサレバ同年五月兩使ノ諮問ニ對シ吹浦一山ヨリ當社ハ鳥海山ヨリノ勸請地タル一札ヲ差出サレシガ同年九月廿二日ニ至リ幕府三代實錄ノ明文ニ據リ式内一宮大物忌神社ハ鳥海山ニ在リ其地飽海郡ニ屬スヘキモノナリト判決シ裏書繪圖面ヲ蕨岡ニ下附セラレ即チ庄内ノ利運トナレリ事鳥海山ノ下ニ詳ナリ是ニ於テ蕨

岡ハ勝ヲ矢島ニ制スルノ外式内一之宮ノ稱號ヲ占ヲ得ルト同時ニ吹浦ニ於テハ古來享有セル稱號ヲ失ヘリ

寶永二年社殿ニ修繕ヲ加ヘ新タニ雨屋堅七間横十二間ヲ造リ之レヲ覆フ

(當社文書)

乍恐以書付奉願候

大物忌大明神御官慶長十七年以前最上源五郎様御建立其後寛文九年酉之年衆徒共修覆仕候節御披露仕候處ニ川北中奉加被仰付其上吹浦御林ヨリ松之木五十本末木共被下置御米貳拾表致拜借御宮修覆仕候今度御宮破損仕候ニ付鶴岡酒田兩御町並川南川北中致奉加修覆仕度奉存候彌奉願候通被仰付候者難有可奉存候 以上

元祿十六年癸未六月

吹浦兩所山

神宮寺

衆徒連印

(棟札)



聖主天中天 大行事帝尺天王  
迦陵頻迦聲 本地藥師瑠璃公如來

家臣 松平藤兵衛久親 寺社奉行 吉田八右衛門勝之  
松平武右衛門久豊 野澤與一右衛門正春  
酒井吉之允重盈 安倍惣内學林  
水野内藏助矩重 郡代 加藤平右衛門景致

奉大物忌神宮修造一字護持大旦那酒井左衛門尉忠真公  
哀愍衆生 惣行事阿彌陀如來  
我等今敬禮 證誠師仕火梵王堂

家臣 上田頼母勝安 郡奉行 大場宇右衛門正能  
松平舍人輝親 郡代 平林伊右衛門俊堅  
護持教主傳燈大阿闍梨大僧都法印覺求和尚 袖尾彌一右衛門光能

遊佐郷山林之渠木忠真公寄附之

眞言新義護持院大僧正隆光末寺  
庄内飽海郡出羽一之宮吹浦兩所山別當袖宮寺覺求

千時寶永貳年乙酉四月造之五日ヨリ護摩執行一七日

遷宮

番匠工數貳千百五十人  
人足七千貳百人

大工棟梁 澁谷市十郎政清  
鍛冶 小松市郎右衛門

翌三年正月元日兩社炎上纔ニ神体ヲ猛火中ヨリ出シ奉ルヲ得此時多クノ寶物及  
ヒ獅子頭等鳥有二歸セリ同八年社殿ヲ造立ス即現在ノ建物ナリ

(當社文書)

乍恐書付を以奉願候

遊佐郷吹浦村大物忌大明神月山大明神右兩所之御宮並新造之雨屋共ニ三年前亥  
ノ正月燒失仕候

東 大物忌御宮 此御宮ハ建立之時代儘ニ知れ不申候但中古鎌倉之右大臣實朝公御建立  
壹丈四方

ニ御座候段々修覆之跡も相見申候へハ其時代之御宮ニ茂御座候哉承久二年ヨリ當五年迄四  
百九十年程及申候

西 月山御宮 慶長十七年最上出羽守様御建立右之兩社四十年前寛文九  
西之年及破損候ニ付奉

願鶴岡酒田兩御城下川北川南奉加被仰付並吹浦御林ニ而松木五十本被下置御米廿

表拜借仕修理仕候其後及大破候ニ付七年前元禄十六  
年未之年奉願兩御城下川北川南奉加被

仰付並御林ニ而松木五十本被下置御米三十表拜借仕右兩社之修覆並新造之雨屋間横  
間

十二 建立仕候

○此文書ハ寶永六年社殿建立願書ニ添附セルモノナリ但寶永  
八年四月竣功シ同月八日ヲ以テ遷宮式ヲ行ハル棟札アリ

明治三年神佛分離ノ際神宮寺衆徒悉ク還俗シ神式ヲ以テ社頭ニ奉仕セシガ六年  
當社ヲ以テ國幣中社卜定メラレ寶永以後失ヒタル式内一之宮ノ名稱モ自ラ復歸



セシノミナラズ鳥海山ヲモ當社ヨリ支配スルコト、ナレリ明治十四年更ニ鳥海山上ノ社殿ヲ國幣中社ノ本殿ト定メ當社及ヒ蕨岡ノ社殿ヲ以テ其口之宮トナシ隔年奉幣ノ制ヲ立テラレタリ是レ即チ現今ノ形勢ナリ

社領 正平十三年北朝ヨリ由利郡乙友村ヲ御寄進アラセラレシモ收納詳カナラス天文天正ノ比新田目村ニ四萬二千石ノ神領ヲ有シ飛澤神社所藏一三才圖會ニ兩所宮兩所山緣起社領千百石ト見エ此書ハ正徳年中ニ成レルモノナレハ蓋據アリテ舊社領ヲ追書セシモノナルヘシ

最上時代マテハ吹浦北目福升鵜沼新田目及ヒ宮内ニ神領ヲ有セシヲ慶長十六年最上義光ヨリ吹浦外四ヶ村地方ニ於テ高七十壹石四斗五升貳合ヲ寄附セラレ酒井家入部ノ翌年元和九年之レニ丈量ヲ加ヘ高百三十石五升壹合ヲ悉ク神領ニ結ヒ學頭衆徒社人ヲシテ之レヲ配當セシム

(元和九年九月吹浦村檢地帳)  
高合二百六十九石七升七合

高之内七十壹石四斗五升貳合

吹浦兩所御神領本高

此内五十三石七升貳合本高

吹浦村之分

此出目三十八石五斗九升九合

竿打瀬井與十郎

同三石八斗四升本高

新田目村分開□

此出目三石八斗貳升

竿打和田傳藏

同五石壹斗六升本高

北目村

此出目四石七斗九升四合

同大沼作兵衛  
同山口與市郎

同九石三斗八升本高

福升村  
鵜沼村

此出目六石七斗三升八合

本出目合百三拾石五升壹合

四ヶ村本出目高也但取米を以高を作ル高多ク御座候へハ吹浦ニ而御望ニ候間相渡申候以上

殘而百三十九石貳升七合

藏入

辰九月廿三日

武 甚 十 右

(延寶九年伊丹藩 庄内寺社領記)

遊佐郷吹浦村兩所山大物忌大明神社領



高百三十石五升壹合

黒印寛永五年辰九月紛失

内三十五石

兩所山學頭教觀院神宮寺

九十五石五升壹合

衆徒二十五人 大夫二人

- |      |     |      |       |     |      |      |  |  |
|------|-----|------|-------|-----|------|------|--|--|
| 一和尚  | 二和尚 | 三和尚  |       |     |      |      |  |  |
| 東福坊  | 寶藏坊 | 善住坊  | 遍照坊   | 泉養坊 | 法住坊  | 養善坊  |  |  |
| 榮藏坊  | 實相坊 | 泉藏坊  | 大教坊   | 大善坊 | 常儀坊  | 成就坊  |  |  |
| 淨樂坊  | 眞淨坊 | 最城坊  | 西養坊   | 連藏坊 | 本妙坊  | 勝泉坊  |  |  |
| 圓用坊  | 清林坊 | 林泉坊  | 長樂坊   | 乘蓮坊 | 戸内大夫 | 千日大夫 |  |  |
| 外ニ三人 | 清淨坊 | 式部大夫 | 承仕治部郷 |     |      |      |  |  |

舊社職

當社ノ職制ハ學頭衆徒社家ヲ以テ組織セリ然レ本ト大物忌月山ノ兩社ニ勤仕スルモノナレバ由來社家アリテ社僧起リシハ自然ノ順序ナリシモ漸次其位置ヲ顛倒シ學頭神宮等ハ一社ノ貫主トナリ社家コレニ隸屬スルニ至レリサレト其法式ハ本地佛ニ係ルモノハ學頭衆徒講堂一ニ本地堂トモ云フ舊拜殿ハ即チ其位置ナリニ於テ勤行シ神事ニ屬スルモノハ社家兩所宮ニ於テ之レヲ奉仕シ其區別劃然トシテ相侵サ、リシナリ故ニ先ツ社家ノ經歷ヲ叙シ然ル後チ社僧ニ及ボサントス

神主禰宜祝ノ事

ハ邈タリ降ツテ承久ノ比神主久永アルモ氏姓詳カナラズ天文天正ノ際官大夫、戸内大夫、千日大夫アリ一之宮兩所山緣起慶長ヨリ寶永ニ亘リ戸内大夫式

地大夫千日大夫アリテ官大夫ナシ而シテ寶永九年六月幕府ノ檢使ニ差出セル一

札全文鳥海山ノ下ニ引用スニハ官大夫千日大夫式地大夫ト連署シ宛所ノ左傍ニ「右三人ノ外

ニ戸内大夫ニ申候ハ官大夫親ニ而老衰故隱居罷在候」ト見ユサレハ當社家ハ官

大夫式地大夫、千日大夫ノ二戸ニシテ官大夫ト戸内大夫トハ時代ニ依リテ其稱

呼ヲ異ニシ本ト一家ニテアリシナリ但當社古記全文下項祭式ノ下ニ掲載ニ官大夫戸内大夫千

日大夫トアリテ式地大夫ナキハ或ル原因ヨリシテ一旦其職ヲ失ヒ戸内ノ名稱ヲ

以テ奉仕セシモノナルヘシ

進藤氏 官大夫或ハ戸内大夫ト稱ス世系詳カナラズ天文天正ノ比百貫ノ地ヲ領セ

シコト石黒家記ニ見ユ原文南平田村ノ下ニ掲載慶長二年羽黒山光明院清順ノ文書當家所藏ニ「この

内殿」トアルハ當家ヲ云ヒ同十七年志村家々中相田村山兩氏ノ書翰上ニ「神主

殿」ト宛テタルモ亦當家ヲ云ヘルモノナリ以テ戸内官大夫共ニ異稱同家ニシテ